

---

# 同じ世界の勇者と見習い魔法士

希望

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

同じ世界の勇者と見習い魔法士

### 【Zコード】

Z9051Y

### 【作者名】

希望

### 【あらすじ】

セーヴル大公国は日々、魔族と呼ばれる獰猛な種族による侵攻危機に脅かされていた。そんな中でついに耐えかねた皇帝が紡いだ言葉は異世界からの『勇者召喚』。その言葉を聞いたある魔法士の見習いは驚愕する。何故なら彼女は、異世界トリップを現在進行形で経験中の日本人なのだから。主人公の兵藤凜は基本厄介事嫌いの現実主義者。同族に会えたことは嬉しいが、勇者には関わらず元の世界に帰る方法を探そうと思ったところに勇者からありがたくない一言。「一緒に魔族退治をしてくれないか?」いえ、全力で

お断りです。 最強チートなドＳ魔者と異世界トリップ中の見習い少女の織り成す異世界恋愛ファンタジー。

## 第一話・見習いは異世界人（前書き）

2作目の投稿になりました。  
読んでいただけたと幸いです。

## 第一話・見習いは異世界人

「 勇者を召喚しようと思つ

端が見えない程の広い空間に響き渡る静かな声。

発するのはセーヴル大公国の頂点に君臨する皇帝。

30代なのに20代と思えるほどの若々しい美貌に威圧感を纏わせる冷酷非情の王。

そんな彼がいる国は近年魔族による侵攻が始まっていた。

魔族とは人間よりも遙かに優れた身体能力を持つ獰猛な種族だ。そのため、当時は侵攻が始まると共に3日で陥落すると国の誰もが絶望に打ちひしがれていた。

しかし予想に反して皇帝率いる親衛隊が今まで死闘を繰り広げ、国を守っている。

皇帝自ら先陣を切り、魔族をなぎ倒しているそうだ。けれど皇帝はそろそろ限界と感じたのだろう。

魔族と唯一渡り合えるとされる『勇者』を頼った。

「……このまま陥落するのも時間の問題だ。ならば賭けてみるのも良いかもしれん」

紡がれた言葉にこの場の全員が息を呑む。

『勇者召喚』は大量の魔力を消費して行う魔法。多量に魔力を持つ生贊を数人犠牲としなければならない。

その上、勇者の意思を無視しての強制召喚だから極悪魔法といっても過言ではない。

「もう時間が無い…。勇者の召喚は満月の満ちる今宵の晩、おこなう…至急準備せよ…」

皇帝が玉座を去ると、周りが慌てて動き始める。

急すぎる事態に対しても準備を間に合わせようとする彼らの精神は立派だと思います。

（さて…私も哀れな勇者の召喚のために準備をしましょうかね…）

私は周りの動きに合わせて準備をし始める。

あ、紹介が遅れてしまいましたね。私の名前は兵藤凜ひょうとうりんと言います。勘の良い方ならお気づきかもしません。そう、私はれっきとした純日本人です。

そんな私が何故こんなファンタジー溢れる世界に違和感無く存在しているのかと言われますと色々あつたのですよ。

まあ、詳しい話はまた後日にして簡単に説明しますと異世界トリップです。

精神科医を紹介してやろうとか思わないで下さい。大丈夫です、頭はイッちゃつてませんから。

いえ、正直馬鹿な話だと思つてましたよ。異世界舐めてました。気づいたら環境にとても優しそうな縁溢れる草原で寝転がつっていました。

あれですかね、基本現実主義で日頃から異世界を馬鹿に思つてたらですか？

とにかく私は軽くパニック状態に陥り、命懸けで生活を確保して現在は魔法士見習いをやつております。

もちろん元の世界に帰るための方法探しです。

ですから勇者召喚でお仲間降臨はとっても嬉しいのですよ。

勇者という肩書きでの登場は少し哀れに思いますが。

だって勇者なんて聞こえがいいだけの奴隸みたいなものですから。

「リン！お前は何をしているんだ。早く準備を始めろ！」

思わずビクリと心臓が跳ね上がる。

恐る恐る後ろを振り返れば、立腹なご様子の我が師匠、ガウス様。黒い髭をもつさりと生やす50代、威圧感ハンパない。敵に回したくない人と逆らえない人ナンバーワンを魔法士の中で誇る強者です。

頼み込んで弟子にして貰いました。

「いやいや、今からしようつと思つてましたよ」  
「ほう。さつきからずっと見ていたが動く気配が無かつたぞ」「師匠、気配を殺すつて卑怯だと思いませんか?」「むしろ爽快だと感じるな。相手の驚く顔が見れる」「いやあ、どうもそこまでいくといつそ清々しいですね」「褒め言葉として受け取られるか皮肉として受け取られるか、選べ」「遠慮しておきます。今の言葉はお忘れ下さい」

異世界に来て半年、世を渡るための處世術を学びました。

『笑顔は最強の武器』

大抵は笑顔を作つておけば世を渡れます。

私もチャレンジしてますよ。通じない相手に。

「さつあと準備をしり。神殿の掃除と聖水の調達、終わつたら話がある」

「はい、死刑宣告を受けた気分です。

話つてあれですか、あの地獄の数日間の再来ですか?

魔法士としての基礎を寝ずに叩き込まれたスバルタの日々が頭をよぎる。

おかげで初級魔法をマスター、でももつやりたくない。

「はーい」

笑顔を頑張つて貼り付けたまま、神殿へと向かう。

神殿は皇帝の住む城のすぐ隣にある純白に輝く建物。壁には汚れどころか塵1つ付いていなくて輝きを放つていて。

私はわざわざ裏に回つて裏口から中へと入る。下つ端の私が正面から入つたら打ち首です。

神殿の中はとつても冷えていて寒い。壁の素材が大理石に近いものらしく、冬の今は神殿自体から寒さが放たれている感じである。

白い息が吐き出され、腕を洗する。

（さ、寒い！コートが欲しいよ…。こんな布切れでこの寒さを乗り切れどー？）

視線を下に向け、自らの服装を見る。

べらべらの布地がワンピースのような形に加工されているだけの布切れ。もちろん断熱加工や防寒などは一切してない。

ふと腰まである髪の毛が視界に入る。この国では珍しい黒髪をわざわざ一般的な茶色に染めてある。

瞳も黒は見世物にされるほどだという事を知つて、偶然にもポケットに入つていたカラー・コンタクトで緑色に変えた。

お姉ちゃんから未使用で貰つたカラー・コンタクトを出すのを忘れて入れっぱなしにしておいて良かつた。見世物なんて嫌だし。

私は体を振つて寒さを紛らわすと、掃除をし始める。

掃除は簡単。初級魔法の『風』<sup>ワインブル</sup>を使って埃とゴミを集めて捨てるだけ。

指をぐるぐる回して、掃除を終えると次は聖水を汲みに奥へと向かつた。

ちなみに聖水とはぶつちやけると只の水だと思ひ。//ネラルウォーターのような水。

ここの人達は崇めてるけど只の水でしょうがとシッコミたくなる。神殿の奥には聖水が溜めてある井戸があり、傍にある水瓶で汲む。中々の重量なので毎回息を切らしてしまつ。

汲み終えると、さっきの場所に戻つて水瓶を入り口近くに置いておく。後は放置だ。

（よし…終わつた……と。師匠のとこ戻つて死刑宣告を受けよつ。どうせ逃げらんないし）

足取りが重くなるのを感じながら、ガウスの部屋に向かう。ガウスは、国でも高位の魔法士であり神殿を取り仕切る祭司長でもあるため城で部屋を与えられている。基本はそこにいるので探す手間が無いのだ。

「失礼しま～す」

ノックも無しに入るのはこちらの常識。私も抵抗は感じるものやつています。

扉を開けて入ると案の定、ガウスが机で書類仕事をしている。

「ああ、来たか。話がある、座れ」

ガウスは顔を上げると、中級魔法の『念力<sup>テレキネシス</sup>』で片付けてあつた椅子を用意する。

私は大人しく座つて死刑宣告を待つ。気分は裁判所。出来れば食事と睡眠をつけて貰いたいと叶わぬ願いを抱いてスバル修行を思い出す。

「今日の勇者召喚の事なんだがお前が参列しろ」

するりと椅子から転げ落ちる。

何ということだ、身構えて損をした。

一先ず死刑宣告の話では無いことに安堵を覚えたのも束の間、今この人は何と言った？

「すみません、今何と？」

ワンモアプリーズ。

「だからお前が勇者召喚に立ち会え、高度な魔法を見れば良い修行になるとthoughtてな」

「ちなみに本音は？」

「私は面倒くさいから立ち会わん。代わりにお前を行かせる事で休みを貰つた」

「鬼、馬鹿。どう悪魔」

「何とでも言え。今日は大事な娘と会つ日なんだ、」

口元に笑いを浮かべて話すガウスに殺意を覚えるのは何回目だらつか。

よりによつて私に勇者召喚に立ち会えだと？

断言しよう、絶対爆笑する。

目の前で勇者様とか言われる同族日本人を見るわけですよ。しかも素で。

笑う場面でない場所で爆笑したら絶対最悪でしょ。確実に国を追われる。

ここは仮病を使って休むか？

いや、仮病なんてすぐばれる。特に田の前の人は騙せない、今日は更に娘さんも絡んでるから。

ガウスは20代の娘に溺愛する危ないお父さんなのだ。  
最近、結婚して離れて住むことになり凶暴化が進んだ。

ちなみに娘さんはとっても美人で嫁ぎ先が公爵家。貴族の中でトツ

ブに位置する。

ガウスは伯爵家なので大出世だった。

「くつ…分かりました。引き受けます」

結局は折れるしかないのだ。仮にもガウスは師匠であり地位もある。そんな人に逆らえるわけがない。

「どうか、じゃあ私は帰るから後は頼んだ。勇者召喚の参列者マニュアルを机に置いておくから頭に入れておけ。それと服装は神官服が正装だ、そこに新品があるから着替えておけよ。じゃあな

何だ、この手際の良さは。

とゆうか勇者召喚の参列者マニュアルって何ですか。

異世界にそんなマニュアル存在するんだ。

私は立ち去るガウスを見送った後に、しぶしぶ分厚いマニュアル本を掴みパラリとめぐり始める。

『勇者を利用して平和を掴もう、勇者攻略100の方法』

私はパタリと本を閉じて深呼吸をする。

うん、今のは見間違いだ。きっと疲れてるんだ。

だつておかしい、救世主に対してもつときし利用という文字。

私はもう一度本の表紙をめくる。

うん、書いてあるのは同じ文字だ。良かった、私の目がおかしくなつたわけじゃ無くて。

つていやいや良くない何も良くないよ！

私は現実主義者のはずがいつの間にか現実逃避に走っていたらしいです。

今だけは現実を逃避したい気分です。と言つ事で私は何も見ません

でした。

壁に掛けてある新品の服を持つてガウスの部屋から出ると、自分の部屋のある地下へと向かつ。

下つ端の部屋は地上ですら無いのがとても悲しいです。  
重たい本と汚れを付けてはいけない服が私の心をどんどん重くしていくのが分かる。

夜まではもう少し。月はもう満ち始めているころだらけ。

私は地下へと続く階段を下りて奥にある自分の部屋へと通り着く。  
扉を開けて中に入れば、灰色の壁に薄汚れたベッドという質素すぎる4畳の見慣れた空間。

夜までもう時間が無いので、急いで新品の服に着替える。  
着方はスバルタで叩き込まれたからマスターしている。着終えた後に残る感想は

ぶかぶか。

サイズが合わなくて裾を引きずる形となつていて。この服は元はガウスのために用意されたもので当然といえば当然なのだが。  
ふと、『刻量』と呼ばれる時計のような役割を果たすものを見れば夜はもうすぐそこまで迫っていた。

慌てて本を服の中に入れて、勇者召喚の行われる神殿の『光臨の間』へと向かつ。

引きずる裾は汚れていく気がするが構つてられない！

遅れたら真っ先に眼に浮かぶのはガウスの怒りと国からの視線だ！  
息を切らしながら神殿に着いて、中に入る。

まだ始まつてはいないうらしく、人は居るもののは慌しく動いてるだけだつた。

そんな中、私に近づいてくる慌しい人影が見えた。

「お、リン。お前も参加すんのか

「ミニー。神官服つてことはミニーも？」

「もちろん。俺は「いつまつ」のことは人一倍興味があんだよ」

このミリーは喋り方こそ男のようだが、れっきとした女性であり強気系の美人だ。

私と同期で魔法士見習いになつたが、すでに彼女は魔法士となつて立派に活躍している。

天才的な魔法センスと、美しい美貌によつて求婚は日々耐えないと、贅沢な悩みを持つている。

「私は師匠に押し付けられたんだつて。早く帰りたいのが本音だし」

「まあまあ、見てて損はねえつて！楽しめよ」

「はいはい」

手を振つて去つていくミリーは男に呼ばれていた。

あれは皇帝の長男であるレオン殿下であり、皇帝に負けず劣らずの美貌の持ち主。

二人は恋人同士という噂が流れではいたが、どうやら真実だつたようだ。

私はもうすぐ始まる召喚に備えて、心の準備をしていた。むろん笑わないように。

そして始まりの合図、皇帝のお出ましだ。

「これより伝説の戦士を異世界より呼び寄せる！」

凜と響く声に先程までの喧騒が嘘のように静まり返る。

皇帝の声と共に、端にいた祭司長方が前に出る。

祭司長方が中央に集まり、杖で魔方陣を描き始める。

これでも魔法士の基礎は叩き込まれたから分かる。高度な魔方陣でとても真似が出来そうにない。

私は思わず息を呑み、魔方陣の出来に惚れ惚れとしてしまつ。

「異世界より現れし救世主の御靈よ。今宵、危機に陥ら

んとする我が国を救う新たな救世主の召喚を我は願う。現れる、数多の戦を勝ち抜いてきた異世界の勇者よー！」

皇帝の叫ぶ声に力が入るその瞬間、魔方陣が強く輝いた。

眼を閉じてしまふほどの強い光に私はたじろぐ。数秒くらい続くと、光はゆっくりと収まった。

その場を静寂が包む。成功？ それとも失敗？

眼を開ける前に轟いた歓声がその答えだろう。開ければ、魔方陣の上に青年の姿が見えた。

17歳位だろうか、私よりも年上そうなすらりとした顔つきは端整に整っている。白い肌とは対照的な黒い髪と黒い瞳は私の持っていた『色』。

何よりも日本人である事を証明するその色は、私を喜ばせた。

(同族

！－！)

相手側にとつてはいきなりの事態に混乱してこんな風に思われるのは迷惑かもしけないがとにかく嬉しいぞ！

しかしそくよく見ると青年は物凄い美形顔だった。切れ長な瞳がクールだ。

いかにもな勇者オーラが出ているようである。

「こ、こ、こ、は……？」

驚きと戸惑いの混じる声。懐かしい、私もここに来て初めて発した言葉がそれだったよ。

「我が召喚に応じてくれて礼を言おう、勇者よ。こ、こ、は、君ひとつての異世界だ」

「……は？」

「受け入れられないのも無理は無いだろうが、君には勇者として我が国を救つてもらいたいのだ」

「いや、あのちよつと…」

「ああ、こきなり事が起こり疲れているのだな？今、部屋へ案内させる。詳しいことは明日にしよう」

「え、あ…ちよ。はああー！…？」

皇帝の『勝手に話を進める』攻撃には同情するよ、勇者。あれはカウンター攻撃が入れられない最強技だよ。

「案内は…………ん？」

今、目が合つたのはきっと氣のせいだよ。皇帝様が私なんかを視界に入れてくださるなんて勘違いも甚だしいな。うん、下を向いておひづ。

「おー、そこの君」

皇帝の声が誰かに向けられて発せられる。

私はきょろきょろと辺りを見回してその誰かを探してみる。

「君だ、裾を引きずつてる」

おつかしいな、裾は引きずるもののじやないよ。誰だ、身の丈に合わない服なんか着てるのは…

「隣の君達、その子に教えてあげてくれ

皇帝が溜め息をつくと、私の隣にいる神官一人が私の袖を掴んで前に引っ張る。

ちゅひゅひゅおい！！

ペイント皇帝の前に放り投げられた私は冷や汗ものですよ。

「丁度いい、勇者と同じ年頃だろう。勇者を密室に案内してやってくれ」

ええ確かに私は15歳ですよ。ですが同じじや無いです。女性の年齢を大雑把に見るのはいけないことですよ。

それでも高年齢ばかりで構成されている神宮の中では確かに同じくらいでですね。

私を選ぶ理由は十分ありますね。正直、面倒くさいので嫌ですが皇帝にそんな事言えば公開処刑間違いなし。

「…分かりました」

逆らえるなんて奇跡が起きるわけがありません。

私は、皇帝の先にいる勇者同族に視線を向けました。

私も異世界人だとばれれば厄介事間違いなし。ばれないように極自然にこちらの世界の住人を装いましょう。

いや、勝負！！

## 第一話・見習いは異世界人（後書き）

よかつたら次回もお立ち寄り下さい。  
感想お待ちします。

## 第一話・勇者は化け物（前書き）

タイトルが少し物騒になってしましましたが、流血表現などはあります。

## 第一話・勇者は化け物

「えつと……。初めましてー、勇者様?」

皇帝から案内という形で神殿から出た私と勇者の間に流れるのはひたすらに長い沈黙。

とりあえず勇気を振り絞って話しかけてみましたよ。挨拶は日本人として当然です。

けれど同じ日本人であるはずの勇者からは反応が一切返ってきません。どうかでしくつたつけ?

勇者は険しいお顔をして下を向くのみ。あーさすがに状況整理の時間はあげた方がいいよね。

「……ここはどこなんだ?俺は学校の帰り道にいた筈なんだが…」

なるほど、だから服装が制服なんですね。青いブレザーとはかつっこいい。

それにして青いブレザーって私の知ってる超有名な進学校のものと似てるなあ。

偏差値80を超えてるとか一般人に喧嘩を売つてるとしか思えないよ。

「ここは勇者様から見て異世界ですよ。近年我がセーヴル大公国は魔族の脅威に晒されており、非常に不味い状態なのです。ですから最後の頼みの綱として貴方が召喚されました」

よし、嘔まざに言えた!

服の中に入れておいた本の1ページ目を見ながら言い切る。

勇者は私の後ろをついて来ているといった感じなので本を見ている

「」とは多分ばれていないと思つ。

「それって……俺にこの世界を救えつてことか?」

「平たく言えばそういうことです。意思を無視されて強制的に召喚された上にこいつら側の問題を押し付けてしまつて申し訳ないと思つています」

「本当に……その通りだな。俺は元の世界には帰れないのか?」

私は進める足をピタリと止める。

結論から言つならまず帰れない。帰れるなら私は今こりにはいない。けれど勇者マニコアルでは、帰れますと明記してある。こいつやって書いてある意図なんていいくらなんでも分かつてしまつ。

勇者の協力を失わないためだ。帰ないと言えば勇者は怒り、協力はなくなつてしまつだろう。

しかしこまだ帰れると分かるならば帰す事を条件に魔族討伐の協力を仰ぐことが出来るからだ。さて、どちらを選ぼうか。個人的には帰れませんよと真実を告げてあげたい。

けど告げたら告げたで後々厄介だ。こりは日本人特有の曖昧作戦を貫こり。

「……私は一介の下っ端ですからそのような事は存じ上げません」

後ろを振り返り、半年間培つてきた笑顔を勇者に向ける。

勇者は、目を見開いた後に眉を寄せて怪訝そつな顔を見せた。美形だから一枚の絵画に書かれた一種の表情のよつに思える。

「そりか……じゃあいい」

「そうですか。ではお部屋に着きましたのでお入り下さい」

私が足を止めた横にある部屋は国賓VIP専用の部屋。

未だに一回も中に入つたことが無い部屋に入るのは勇気が入る。

私は、震える手で扉を開き勇者を中へと促す。

勇者は躊躇いも無く中へ入つた。

「今晩はこちらでお休みを。何か御用がございましたらそちら辺でうらうらしている女官に声をおかけ下さい。ただし部屋を出ないで下さいね」

「分かつた。……なあ、まだ質問があるんだがいいか?」

「答えられる範囲でならよろしくですよ」

「もしもの「話だが逃亡」を図ればどうなる?」

私は一瞬固まつてしまつた。まさか勇者から見て異世界人である私に堂々とそんな事を聞くとは思わなかつた。

鎌をかけてるのか、それとも只の馬鹿なのか。  
どちらにせよ、様々な驚嘆事実にも動じなかつた私を驚かせたんだ。  
褒めてあげましょ。

「… そうなつてしまえばこの国が終わるだけです。最も、この国の人はそんな気がさらさら無いよつですが」

「どうゆう意味だ?」

「気づいていませんでしたか。勇者様の体には、束縛魔法が施され

ています」

「束縛……!? 奴隸かよ…」

「まあ、救世主に対してのおもてなしとは言えませんがこちらに召喚された際に自動的にかかる仕組みだったよつですでに手遅れですね。もう解けない位まで魔法が進行しています」

「それじゃ……」

「はい、勇者様はこの国を救うしかここで生きていく方法が無いと  
いう事です」

終始笑顔のまま会話を続けた。

勇者は流石に堪えたようで顔に翳りを見せた。

束縛魔法というのは本当だつた。勇者を召喚するために作られた魔法陣の中には束縛魔法と追跡魔法の混合魔法の術式が組み込まれていた。

私もこれには同情する。

これじゃ本当の奴隸となつてゐる。

「それではこれで失礼します。明日からこの国を救つために頑張つてください」

私は扉を閉めようとドアノブに手を掛けると、勇者の手がすつと伸びてきて私のドアノブに掛ける腕を掴んだ。

勇者の方を見ると何か言いたげな顔をしていた。

「何ですか？」

「…まるで他人事なんだな」

「……はい？」

「だから、この国の事。君はこの国の人だろ、なのにまるでこの国がどうなつてもいいって言つてるような口ぶりだ」

いやあ、他人事ですから。

しくつたな、墓穴掘つた。もつちよいこの国を思わなきやいけなかつたようです。

「…そんな事ありませんよ。私だって、魔族の侵攻に平静を装つことが精一杯なんですから…」

肩を小さく震わせて、下を俯く。

勇者は慌てて謝ってきた。

悪いね、これもここで生きてくために学んだ事なんだよ。

私はさりげなく勇者の腕を外して、俯きながら扉を閉めて廊下に出た。

（中々勘の鋭い勇者だつたな）。けど詰めが甘い。あれだけの演技でこいつと騙されるなんて）

服の中に入れておいた勇者マニアカルを取り出す。

勇者マニアカルを初級魔法『火』<sup>ファイア</sup>で燃やすと、廊下の窓から捨てた。

勇者とはもう関わらないようにしよう。

隠し通せる自信はあるけど何よりも厄介事を運びそつたタイプだね、あれは。

私は私で元の世界に帰る方法を探しますか。勇者召喚の魔方陣を調べれば何か分かるかな？

廊下を歩く足をふと止めると、窓から星を見上げる。

日本とは違つて、輝かんばかりの星が無数に見える。

初めの頃はただ綺麗だと感じていたが、いつの間にかここが私のいるべき所ではないという事を示しているような戒めに感じてしまつていた。

私は星を睨みつけてから再び歩き出して、自分の部屋へと向かった。部屋に入るとき着ていてるぶかぶかの神官服を脱ぎ捨てて、ベッドの下にある新しい服を取り出す。

冬用に作つておいた自作のワンピースであり、中に綿を詰めておいたので暖かい。

けどこれはあくまで部屋着なので外ではあの薄いワンピースを着なくてはならない。

私は自作ワンピースを着ると、特にすることも無いのでベッドに入つた。

シーツのような薄さを誇る上布団は寒さを素通じて、夜は眠りに

くい。

数時間くらいじつとしているが中々眠気は襲つてこず、仕方ないの  
でベッドから上体を起こした。

（…暇だし、せつかくなら魔方陣を覗きに行こう）

私はこつそりと部屋を抜け出して、部屋着のまま神殿へと向かった。  
夜なので部屋に常備してあるランタンを持つている。  
神殿に着くと、裏口を開けて中へと入る。

神殿の中は静まり返つていて、少々不気味に感じる。

（えーと、魔方陣発見！）

ランタンの光で僅かに見えた魔法陣の側に駆け寄る。  
しゃがみこんでランタンの光を魔法陣全体に当てて見てみる。  
魔方陣は何度見ても飽きないような惚れ惚れとした出来で、見入つ  
てしまつ。  
しかし、そこである事に気づく。

（これ……束縛と追跡の他に人体強化と魔法能力付加も組み込まれ  
てる…。どちらも禁術…、それを大勢の中でやるなんて大胆にも程  
がある。けどこんなに小さいんじや誰も気づかないね。カモフラー  
ジユのために祝福の術式を大きくしてるので）

人の体は普段脳の活動を16%ほどに抑えているが、それを無理に  
外して脳の活動を60%にまで上げる人体強化に魔法を行使できる  
ように膨大な情報量を脳に送り込む魔法能力付加。  
どちらも人体を破壊しうる危険な魔法。

しかもそれに気づかれないように祝福で痛みや違和感を消している。  
用意周到。恐ろしいね、この国は。

勇者本人を化け物に仕立て上げた。

（おいおい……嘘でしょに。よりによつてこれも組み込んだのか…  
…『<sup>ドラゴン</sup>化』。人を何だと思つてんの…）

竜は古代から世界の支配者と呼ばれる種族。固き鱗は刃を通さず、  
大空を自由に駆け巡る翼と火を吐く息吹は正に王たる風格を漂わせ  
る。

そんな竜に憧れ、人が開発したのは人を竜にすることが出来る竜の  
血を使つた『竜化』。

けれど、人ごときが竜の力に耐えられる訳も無く大抵は力に負けて  
死ぬ。

勇者は知らず知らず体のリミッターを外されてるから耐えているの  
かも知れないが長くは持たない。

確実に勇者は死んでしまうだろう。

私は流石に危険だと感じ、勇者にせめてこの事だけでも伝えてや  
うと立ち上がつた。

その時、カツンと誰もいない筈の神殿から足音が鳴り響く。私では  
ない。

「そこで何をしているんだ? リン=ヒョーダー」

フルネームを唐突に呼ばれ、体が固く強張る。

聞き慣れた声だった。いやいや、まさかあの人がここにいる訳ない。  
今は深夜だよ?

「…あ〜、どうして貴方様がこちらへ…」

振り返つて嘆息をつく。

見慣れてしまつたその顔は出来れば今は見たくありませんでした。

師匠、ガウス。

「帰つて来たらどつかの馬鹿が神殿に入つていぐのを見たからな」

「ほんつと気配消すの好きですね」

「ふん、で? 何してん」

「勉強?」

「勉強か、感心だな。場所がここでなければ」

「あ……はは……」

「ははは。……ついて來い」

「……いえつやー」

引きずられて神殿を出ると、ガウスの部屋まで一直線。

ああ、今度こそ死刑宣告の予感。今度からしないんで今回だけは勘弁して下さい。

「つたくお前は問題を起しすのが得意といつか……。常識が無いのか?」

「失礼な! ありますよつ。まず…不正をやるならばれないよつに…とか!」

「どこが常識だ! 非常識を堂々と胸を張つて言つな!」

「どこが非常識ですか! 我が家の家訓になんて言つ草!…!」

「家族自体常識が無いのか!?」

「にしても弟つてばいつも家訓と正反対の事をするんですよ。どう思いますか?」

「弟は唯一の常識人か。お前は弟を見習え」

「家訓破りまくつたら庭の木に吊るされるんですよ。弟はしちゅうです」

「なんて家だ」

珍しくガウスの取り乱す姿を見てしまつた。ここに携帯電話があれ

ば今すぐ写メりたい。

そして全国に配達してやりたい。

「まあいい、いや良くないが。実はな娘に嫌いと言われた」「限りなくどうでもいいです」

「限りなくどうでもいいです」

「聞け。衝撃が走った、愛してやまないそして可愛すぎて口に入れても痛くない程の娘に嫌いだと言われた。これ以上の悲しみがあると思うか？」

「そりゃ遅いわよ」わざわざ来る

「いや、無したゾ。それを聞いた瞬間、私は4階の窓から落ちて、頭から打った」

「何で傷が無いんでしょうか?」

それはホテあれた……とにかく私は今どつもなく死にたい

「いやあ死ねはいいんじゃないですか」ナイ、「持ててますよ」

「良い大人が立かないで下さるよ」

「じゃあ泣いていて下さい。私が死刑宣告かと思って身構えていた

ら娘話を延々と…。失礼しましたー」

私はガウスの部屋の扉を開けて深々とお辞儀をする。

その時、ガウスから真剣味を帯びた声がかかる。

「魔方陣。勇者には伝えてやるなよ、余りにも酷だ」

私は机に突っ伏しているガウスから漏れた声に一言返事で返した。  
それから自分の部屋に戻り、今度こそと思ってベッドに入った。

寒さを噛み締めながら私は眠りについた

と思つたらいきなり活動開始の鐘の音が鳴り響

いた。

まさかと思い、ベッドから跳ね起きると部屋の刻量を見る。刻量の指す時間を日本時間にすると、朝の6時。活動時間だつた。

（一睡もしてない

！－！）

冬のためにまだ6時は陽が昇つていらない時間帯なので油断していた。私は悲しみを抱きながら服を着替えて再びガウスの部屋へ行つた。中に入るとガウスが嫌な笑いを浮かべながら待つていた。

（分かつて言わなかつたのか…－）の悪魔めえ…）

目の前のドリを睨みつけると逆に睨み返された。こいつわ…！

「よく眠れたのか？」

「それ、分かつて言つてますよね。人の悲しみを何だと思つてるんですか」

「快感？」

「うわーお。見事なるドリ発言。さつきの泣きは嘘ですか

「馬鹿いうな。娘に嫌いと言われたんだぞ」

「さいですか。で、今日は何を？」

「今日は今から全員玉座の間に集合。勇者の事で」

「…はあ。分かりました」

私とガウスは朝食も無しの状態で玉座の間に呼ばれる皇帝のいる場所に向かつた。

ガウスの部屋から玉座の間までは歩いてすぐといつた距離。これはガウスが皇帝から信頼されていることを示している。

私達はもちろん玉座の間にも裏口から入ると、玉座へと続く赤い絨

「 皇帝陛下。並びに勇者様のご入場です。」

「 待つのは皇帝と勇者の登場。」

「 皇帝陛下。並びに勇者様のご入場です。」

「 待つのは皇帝と勇者の登場。」

「 皇帝陛下。並びに勇者様のご入場です。」

「 」

「 」

「 」

「 」

「 」

「 」

「 」

「 」

「 」

「 」

「 」

「 」

「 」

「 」

「 」

「 」

「 」

「 」

「まずは騎士団副団長のアーリアに、神官長のクレア。それから魔法士のミリーと我が娘の皇女ラルアだ」

「おお、物凄い精銳の集まりだがハーレム化しそうだな。いや確實になるな。」

勇者よ、頑張つて醜い女の争いの餌となれ。

勇者の前に呼ばれた4人が前に出る。誰もが目も眩むような美人。しかしその中にミリーも混ざっていたのは少々驚いた。彼女は殿下と恋人だと思つてたし。

「この4人は我が國の誇る精銳だ。不満はあるか？」

勇者は顎に手を当てて、黙りだす。

そして意を決したように言つた。

「一人、仲間に入れたい者がいるんだがそいつは駄目か？」

緊迫感が広がつた。勇者自ら引き入れたい人物、誰だろ？

「…誰だ？」

その場に静寂が訪れ、皇帝が固唾を呑む。

皇帝の言葉を受けた勇者は口元に笑いを含ませながら言つた。

「昨日、俺を部屋まで案内した魔法士見習いのリン＝ヒヨードだ」

## 第一話・勇者は化け物（後書き）

良ければ感想をお願いします。

## 第三話・見聞こせ観者の仲間になれる（前書き）

少々短めです。  
楽しんで頂けたら幸いです。

## 第三話・見習いは勇者の仲間になる

静寂　　。それだけの言葉でしか言い表せられない程の静けさが皇帝の座る玉座の間に流れる。

この場にいる全員が口を開けて固まっている。皇帝は流石に口を開けてはいけないが目を見開いている。

もちろん私も固まっている　　はずだつた。

なのに何で勇者が目の前で倒れていて、私は息を切らして勇者を見下ろしているのだろうか。

この状況を誰か説明して下さい。お願ひします。

出来れば私の頭に浮かぶ最低の答えでないのを望んで。

「……また会えたのは嬉しいがいきなりすざわら」挨拶だな

目の前で笑みを浮かべながら呟くよつと言つた勇者に答えを聞いてみようか？

私にそんな勇氣があるわけないね。

とゆうか聞かなくても分かっているのに認めたくなかっただけだね。自分が　　勇者を咄嗟にナイフで切りつけてしまつたなんて。

いやあ、私自身驚きだね！

何言つてんだこいつ　　！みたいな感じで切り付けちゃつたし。しかもほぼ無意識で。

よく元の世界の友達から言われてたつける

『凜つて混乱すると人を攻撃する癖があるよね　　。それって家柄？』

友達の言つことは信じるべきだったみたいです。思いつきり流しました。

しかも家柄つて。友達は私の家族をどんな風に見てたんだろう？

確かに我が家は少し一般家庭と比べて違う所もあるみたいですよー。

一般家庭では、両親に命を狙われるなんて事無いみたいですし。

じゃあ我が家は何なんだって話ですよね。友達曰く、常識を超えた家族らしいです。けど弟だけは別のあだ名があつて、非常識の中の常識といわれるみたいですよ。さつぱりな意味ですが。

さてさて、ここら辺で現実を見つめてみましょーうか。

目の前、倒れた勇者。周り、全員固まつてゐる。どう打開すべきか皆田見当がつかないね！

とりあえず言葉を発しようか。

「…え、…、いきなり切りつけたりしてすみませんでした。痛みますか？まあ、痛まなかつたらおかしいという問題なんですがその辺は置いておいて本題に入りますと貴方何言つてくれちゃつてるんですか、コノヤローとかいう訳ですよ」

とりあえずで発した言葉がおかしかつたような氣もしますが良しと  
いうことで。

私の今の気持ちを3割は伝えられたはずだ。

残りの7割は精神衛生上良くないと思つので伏せておきます。

「簡単な話だ。俺はお前を仲間に入れたいと思つた。だからそれを言つただけだらうが」

「本人の許可無しですか。面白い方とは思つてましたがそこまで行くといつそウザイですね。私の名前は教えていないはずですがどこでお知りに？」

「聞いた」

「あはは。個人情報を流出したのはどこの誰でしょーつかねえ？師匠

！？」

私は皇帝の面前にも関わらず、勇者に詰め寄る。

いやこうなつたらもう引けないじゃん。引いたところで痛い視線バリバリだよ。

今、もう受けてるけどね！痛い視線を！！特にハーレム要員確定のお姉さま方から！

私はこつち来てから何度も痛い視線なんか受けてるからその程度どうつて事無いけどね！

嘘だけど、めっちゃ痛いけど！！

今は無視して、ガウスだあ！！

情報を流すなんてあの人以外いない！あの人以外ありえない！！

私はさっきまでガウスのいたであるう場所をみるがいない！！逃げたぞ、あの人。

「どこ消えたあ、師匠！！出てこないと娘さんにある事無い事、無い事中心に嘘八百並べ立てますよ！！」

『それはやめる、頼むからやめろ』

部屋全体にガウスの声が響いた。

魔法を使っているようで場所の特定が出来ない。

しかし娘さんの事を言つたので無視を決め込む事は出来なかつたようだ。

何を隠そう、ガウスの娘さんは何かと私に優しくしてくれて妹のようと思つてくれてるらしい。

だから私の言つことを大抵は信じてくれるのだ。

「いつ何で勇者に私の個人情報を流したんですか？私の驚く顔が見たかったとか抜かしやがつたら一度と娘さんと会えないようになります」

『悪かつたからとりあえず落ち着け。ここは皇帝のいる場だぞ？場所を変える。陛下、申し訳ありませんが勇者をお貸し願えませんか？正式な発表はまた日を改めてからお願ひします。今は馬鹿弟子を

落ち着かせたいので』

皇帝が戸惑つよつて返事を返すと、ガウスから場所移動を告げられた。

場所は、勇者に『えられた国賓専用の部屋。

普段なら入ることすら戸惑つ部屋に今回は混乱してゐるために戸惑つどころか蹴り開けて入る。

後ろから付いてきていた勇者はそんな私の行動に驚くことなくむしろ笑いを浮かべて部屋に入つた。

「師匠、会えて嬉しいですよ。さて、理由を聞かせてもらいましょう」

部屋の中では中央のテーブルに座つてゐるガウスがいた。

私はガウスに詰め寄つた。

今は豪華な内装や小物なんて田に入らない！  
売つたらいくらだ？

あの壺

「だから落ち着け、確かに悪いとは思った」

「何秒くらい？」

「2秒ほどだ。しかし今はそんなことよりも話す事があるだらうが」「……確かにそうですね。とりあえずは娘さんに師匠が浮気中と話しておきます」

「やめてくれ。娘と妻が逃げる」

「一生冷や飯ですね。ざまーみろです」

「いつもに増して毒舌が凄いのは氣のせいでは無いよつだ。それよりも、だ！本題に入らせろ」

ガウスが私の頭を軽く小突いた。

骨がゴツゴツしてるので地味に痛い。

浮氣嫌いの一途な美人奥さんとお母さんっ子の娘さんはこの人には勿体無い。

ガウスは魔法でお茶を入れると、勇者と私に座るよつに言った。  
私の前にだけお茶が無い事はきつかり娘さんに告げ口をせて頂きます。

「あ、で本題なんだが…勇者よ。そこは説明頼む  
「だからこいつを仲間に連れて行きたいと言つたんだ」  
「そりやまた何でこいつなんだ?セーヴル大公國の精銳じや不満か  
?」

「不満なんてたくさんあるが、昨日会つたときに思つた。こいつは私情を挟まずに物事を見られるタイプだとな、余計な偏見を持つてそうな精銳よりかは大分マシだ」

そんだけの理由で私を肉食獸お姉さま方の檻の中に放り込むつもりか。  
こんな事になるならもう少しこの国を思つてるような口ぶりにする  
んだつた、過去に戻つて私を殴りたい。青いネコさんの持つてるピ  
ンク色の乗り物が天から降つて来ないかな?

「まあ、確かに精銳共は偏見を持つてるが腕は確かだぞ?」  
「腕だけなら傭兵でも良い。俺は感情に流されない奴が欲しいんだ」  
「こいつはしそつちゅう流されてるが?」  
「戦闘では冷徹に物事をこなすタイプだと見た」  
「あ、それはあながち間違つてない。無駄に冷静に俺を殺りに来る  
からな」  
「だろ?だから欲しいんだ」

「けど体裁つてももあるからな。勇者の仲間には魔法士も入つて  
る、魔法士を一人も。しかも見習いじゃキツイ」  
「じゃあ魔法士の精銳はいらない」  
「おいおい、陛下の事も考えてくれ。そんな事されたら陛下も魔法

士の女も名誉丸潰れだ

「じゃあ一人でいい」

何故だ？本人を置いて話を進められている。

私は一度もこの間喋つていないよ、入られる雰囲気ぼぼゼロに近いです。

さつきからテーブルの上にあるお菓子を頬張つてます。さすが国賓専用の部屋なのでお菓子も最高級品です。ほとんどお菓子を食べにきたようなもんですね、これ。

「分かつた…、陛下からは伝えておくが本人の許可は？」

「無許可だ」

「分かつた分かつた。リンは勇者パーティに加盟な」「つて待て、師匠。無許可つてんでしょうが

「おお、リン。良かつたな、勇者の仲間なんて名誉だぞ？」

「黙つてください。私は嫌です」

「何でだ？」

旅になんて出れば元の世界に帰る方法を探せなくなつたやうじやないですか。それに何より勇者と関わりたくありません、この人、気のせいか昨日とキャラ違いますよ。と言いたいのに言えないのは悲しきかな。

理由は本意でなくとも作つてしまえばいいか。

「師匠と離れたくな……」

「理由がお前の性格的にありえない

「チツ」

これはやはりベタ過ぎたか。最後まで言わせてすら貰えないとは。ならば次はどうじょうか。

「ソン、せつかくの機会だし世界を見て廻つてきたりひとつだ？お前は世界を見たこと無いだろ？」「…」

「師匠…」

聞こえは弟子思いの良い師匠。

が、私には分かる。この言葉に隠された本当の意味を…  
『いいから行けつづてんだらうが。そして常識を学んで来い』  
とこう風に。

常識を学んで来いとは失礼な、私は家族に常識を褒められた程だぞ。  
弟には軽蔑された事しか無いが。

「けど…私はまだ未熟です。勇者様の足手纏いとなつてしまいますが…  
から私はここで勇者様を見守るだけにしたいと思います」

「ソン…」

ふ、どうですか。ガウスよ。

勇者思いの良い弟子でしょ？

本意では『絶対』に留まる。私の帰る方法探しの邪魔はさせん…  
てな感じですが。

ガウスも言葉の意味を前半のみ汲み取つたのでしょう。若干睨んで  
きます。

「未熟でも良いから仲間になれ」

勇者の横槍。黙つてなさい、一応ソンちは異世界での先輩ですよ。

「拒否権を発ど…」

「お前に拒否権は無いと思うが？」

「ソンちだつて嫌なものは嫌と言える位の権利はありますよ」

「皇帝と話して居る時に聞いたが勇者の命令は絶対だと聞いた」

何言つてる、皇帝め。

勇者が権力行使で来るとは。昨日はお人好しタイプの勇者かと思つて、いたが全然違つた。

こいつ、ドジだ。しかも物事を計算して見る奴だ。一番食えない奴だつたとは誤つたな。

「今なら打ち首覚悟で皇帝を暗殺できる氣分です」

「落ち着け、リン。勇者の命令を聞け」

援護射撃でガウスが撃つてきやがつた。

ここを回避するために選ぶ選択肢は最もな理由を付けことだ。

「…いいですか？私はこれでもか弱い女の子です」

「どじがだ」

「黙らつしゃい、師匠。……つまり、魔族と戦うのは恐ろしいんですね！」

い、言い切つた！

よし、これで勇者に付いていく事は出来ないといつ最もな理由になる。

これでも女子だつて事を思つ出して良かつた。

「俺が守つてやる」

はい、今誰だ。凄いかつこいい言葉が聞こえたけど今は一番聞きたくない。

聞こえない聞こえない。

「戦つのが怖いなら戦わなくていい。ただ付いてくるだけでいいから仲間になってくれ」

勇者と目が合ひ。

甘い声に切なげな顔。女子なら誰しもが頬を赤らめる場面。私も胸の鼓動が高まる。

「勇者様…」

「頼む…」

ドラマならここで甘く蕩けるよつた音楽が流れ始める。

しかし私は希望しよう、ここは恐怖を味わうときに流れる音楽を！ だつて、勇者怖い！

甘い言葉囁いてるけどこれ逃げ場無くしてきた！

もう八方塞がつて、完璧に逃げ場を埋められた。現に今だつて何か

黒いオーラ出してる…！

やばいぞ、これは。

ここはもうリアルに国外逃亡しかないか？

有休をとつて勇者が国内から消えるまで国外で生活しよう、うんそ  
れしかない。

「良かつたな、リン。これで安心だ。陛下には伝えておくからな、心置きなく討伐に行つて來い」

撃沈。

陛下に伝えられれば行かざるを得なくなる。

もう、私に逃げ場は無いということか。どうの一人を相手に勝とつとした私が愚かだったようだ。

初めから選択肢なんて一つだけだったということか。  
けど、最後に言わせてください。



## 第二話・見ぬこは勇者の仲間になれ（後書き）

勇者はキャラがまだ謎です。

といふか勇者っぽくない勇者ですね。

『』感想お待ちしております。

#### 第四話・原著と見開きの手本わせ（前編）

お気に入り登録ありがとうございます！

## 第四話・勇者と見習いの手合わせ

「ちょっと貴方。お時間を頂けないかしら？」

えっと、どうゆう状況ですか。これは。あの後、私は逃げるよにしてあの部屋を出ました。そしてあわよくば皇帝に伝えられる前に国外逃亡なんて考えも抱いてましたよ。

なのに勇者でも師匠でも無い第三者 ハーレム要員確定のお姉さま方に捕まるとは。

全員美形だからこの状況で無ければわーいとか思えたけど思える状況じゃないです。

とゆうか何故私はこの人達に絡まれているのだろうか。

「あ 、忙しい身ですので手短にお願いします」

顔が引きつるのが分かる。

けど笑顔は忘れない、笑顔さえしつければ大丈夫！多分。

「大丈夫よ。用件は一つだけなの。あのね、悪いことは言わないから勇者様のお話をお断りしなさい。貴方みたいな見習いが勇者様のお仲間になつてなつたら勇者様の品位が落ちてしまつわ。痛い目に遭いたくなければ引くことね」

あ、正論。

私も断りたいですよ？けどあの勇者話聞かないんです。出来れば直接向こうに直談判を。

既に一目惚れな感じのハーレム要員のお姉さま方。

「分かりました。一重にお断りをしておきます」

「物分りのいい子ね、嫌いじゃないわ。じゃあそりしておきなさい」

お姉さま方が高笑いをしながら去っていくと、頼もしい味方が付いたので私は再び直談判をしようと部屋に戻る。

これで私は自由だ！

ハーレム最高だよ、ナイスハーレム！

「勇者様あー先程のお話ですが…」

私は勢いよく扉を開けると、その場で固まつた。

「やつと話を受ける気になつてくれたんですね。私はとても嬉しいですよ」

田の前で優雅に佇む金髪の美形は誰だろつか、部屋を間違えた？

「あ、すみません。間違えました」

私はぎこちなく一礼をして部屋を出ようとしたら、腕を掴まれた。

「間違えじゃねーよ。俺が勇者だ」

掴んだのは金髪の美形男。先程の笑みとは一転して不機嫌そうな顔がある。はて、いつの間に勇者が変わった？

奥を見ればガウスがにやにやしながらこちらを見つめている、なるほど貴方の仕業ですか。

「どうだ、勇者っぽくなつただろ？金髪に染めて口調も変えれば良い感じだ」

「元々金髪にはしてみたかったから良い感じだ。あとは演技だが得意だから問題はないな」

「味方は付けて損はない。どうせなら本性は隠した方がやりやすいだろ?」

「そうだな。お前らにはばれていが問題ないだろ?」

勇者はどうやら心の奥まで真っ黒のようだ。

この国人全員を騙すつもりか、どう勇者め。

それにしても金髪はかつこいいな、美形が更に映えて目の保養度倍増だ。

「本性が真っ黒なのを隠して魔族討伐するつもりですか。ある意味魔族よりも真っ黒の貴方に倒される魔族が可哀想です」

「じゃあその可哀想な魔族を守つてやる為にも俺と付いてきた方がいいんじゃないか?」

「くッ…。逆手に…」

「もうお前の同行は決定事項だから諦めろ」

「ふつ… 最後まで諦めないのが私という人間です」

「俺も妥協はしない」

勇者との間に火花が散る。

今なら気合で目からビーム出せるかな?あの綺麗な顔に穴を開けたいんだけど。

「しかし残念ですね、勇者様。私は貴方に付いていけないという理由を手に入れたのです」

「…………どんな?」

何故か部屋の温度が下がったあ !

原因目の前だ、勇者から冷氣が出ている。

「や、それは……他のお仲間がですね…」「じゃあ無視しどけ。理由は却下、認めない」

だから最後まで言わせて下さってば。  
無視できる状況じゃ無かつたんですから。

「まあ、リン。もう諦めろよ、もう分かってんだろ？」「

ガウスは黙つてくだわこませんか？

「おとなしく着いてくだけで良いんだぞ。勇者の仲間なんて名譽だ  
る」

「メリットだけ押し付けないで下をこよ。肝心な『メリットは伏せ  
まくりですか？』

「『メリットなんて戦つ』ことだけだろ。お前は強いし良いじゃない  
か？」

「何言つてくれてるんですか。この程度の力で強いなんて本気で言  
つてゐる訳じゃ無いですよね」

「……お前の言つている強いつてどのはういだ？」

「両親です、未だに勝てたことがありませんから。いつも挑むと意  
識が墮ちてるんですね」

「お皿にかかりたくない両親だ」

ガウスが渴いた笑いを漏らす。

私の両親は昔から強くて憧れでもある存在。

私も一人のようになりたくて手合わせして貰つたこともこいつか  
るが、勝てる見込みが無い。

気づけば適当にあしらわれて意識が墮ちてる。

「とにかく、主張させて貰います。行きたくありません……」

「主張が通らないことぐらい分かりきってるだろ？」「

「痛いところを……。こなつたら国外逃亡でも……」

「国内を出るには総務部省に申請してから3ヶ月後に可能だ。その時にはとっくに旅に行ってるだろ」

「だつたら申請をせず……」

「捕まつて一生幽閉か。短い間、楽しかつた」

逃げ道が無い！私はこのまま旅に行くと？

私の夢にまで見る『帰る』ことが遠ざかってしまつ。

早く帰つて平凡ライフを楽しみたいと言つの？」

「やついえば勇者、出発はいつにする気だ？」

「当面は修行らしい。騎士団団長とかいう厳つい男が稽古をつけると言つていた」

「ああ、ウエルズか。あいつの訓練はきついらしいが確実に力はつくぞ」

「そうか」

修行があ。私もやつたな。

いきなり来たのが草原、しかも魔物と呼ばれてる凶暴な獣の縄張りだつたから死ぬかと思つた。

草原を抜ける約1ヶ月間危険すぎる修行相手だつた、いやもう死ぬつてあれ。

草原に落ちてる細い木の棒で応戦してもすぐ折られるし、逃げても逃げても追つてくるし。

運よく魔物の死骸に出会つて武器を作れたから良かつたけど牙は駄目だね、べたべたしたから。

結局爪や骨を使って相手し続け、重傷を負つてこの国に駆け込んだのがつい昨日のことみたいだ。

長かった上に辛かつた。よく生き延びたと思うよ。

国に着いて安堵してたところに追い討ちをかけたガウスの修行も辛かつたけど死にはしないような修行だったからまだマシだった。いや、それでも十分辛かつたけどね。

「そういえばリンも修行をしたな。不眠不休で4日間だつたか？」

「そうですよ。スバルタ教官が」

「お前も修行？ どんなんだ？」

「まず魔法の成り立ちと理の綴つてある書物の数百冊を読破、その後ろで鬼が殺氣を漏らして睨んでます。終われば頭に入つたのを確認するためにテストを数十回以上受けさせられます。ちなみに1問、間違えるたびに剣が飛んできます。そしてその次は実践。やらなければ殺すぞの一言で初級魔法をマスターさせられました。師匠は見本とか言いつつ、初級魔法の連発を繰り返して爆音を轟かせ私の眠気を覚まし疲労を蓄積させました。それが4日間に詰めこめられ、5日目からは下っ端としての通常業務開始……といった感じです」

「聞いた俺が悪かった」

「そうですね。海よりも深く反省してください」

「リン、とりあえず顔が怖いからやめろ」

「誰のせいだと思つてるんですか、師匠」

ついつい長く語つてしましました。

勇者は少し口元を引き攣らせて、ガウスは無表情でした。

ガウスは頼むから表情を変える、犯人お前だから。

「悪いとは思つてない、おかげで初級魔法をたつたの4日でマスターできただろ」

「そこは感謝します」

「急に素直になられるのも不気味だな」

「怒つていいですか？」

「冗談だ。とにかく今後だが、勇者が修行を終えるまでお前は荷造りしどけ。逆らつたり逃げたりしたら……分かつてんな？」

目の前に魔族よりも怖そうな男がいるぞ。

もう私に拒否権は無いと。そうですか。

私の人権は何処に消えたんでしょうかね、こちらに来たときから人権無視ですが。

「ツ分かりましたよ！！付いてけばいいんでしょうが！」

「勇者、了承得たぞ」

「いい性格してるな、あんた」

「この最低師匠が！」

私はガウスに怒りをぶつけるがガウスは無視を決め込む。嵌められたなんて家族に知られたらボコボコにされてたな。ここが異世界でよかつたなんて思つてしまつ。帰りたいのに。

「なあ、提案があるんだが」

勇者が唐突に切り出し始める。

顎に手を当てながら言い出すその顔が不敵な笑みを浮かべるので嫌な予感がよぎる。

「手合わせしてくれないか」

「…………は？」

思わず素つ頓狂な声が出てしまつた。

いきなり何を言い出すんだ、勇者よ。田線が私という事は私に言ってるんですか？

構わないけど何故そんな事をいきなり言い出したのか分からないです。

「…なんで？」

「自分の力量が知りたい。一応元の世界で剣術を習つてはいたが、こちらでも通用するのか分からぬからな。お前は中々なレベルなんだろ？」

「それ、私にぶちのめされろつて言つてるようなものですね」  
「何でだ、勇者が最初から強いと決まつてはいるわけではないだろ」  
「いや、剣術つてだけでも強いのに更に……アレですか？」

「アレ？」

「何でもないです。忘れてください、忘れる」

つい失言してしまい、口を押える。

剣術習つてゐる人に召喚魔方陣の魔法が上乗せされたらどんな化け物になつてゐるのか分からぬ。  
負ける戦はしないタイプです。

勇者は眉を潜めたがそれは一瞬の事ですぐに無表情に戻つた。

「ふー…ん。で、受けてくれるか？」

「…お断りしたいですが師匠の視線が突き刺さるのでお受けします」

勇者の隣に佇むあの男が怖いです。

視線だけで人を殺せる能力を持つてゐるに違ひない。

「じゃあ訓練場を貸して貰うとい。勇者が使つと言えば、すぐ使わせて貰える」

「今からですか！？」

「今以外にいつがあるんだ。ほら、とつとと行くぞ。……負けたら殺すからな」

「物騒すぎる言葉が小声で聞こえたんですが」

「気のせいじやないから安心しろ」

「安心できるのは頭がおかしい人だけです」

と言つ事で、訓練場に行くことなり部屋を出ました。  
足取りがとても重いのは気のせいじやない。

知らずに大きな溜め息が漏れる。ああ、幸せが逃げていく。

「あ、勇者様だわ」

歩く廊下ですれ違つ女官やメイドが勇者を見て頬を赤らめる。金髪に変わつてゐるのに勇者と見破られるなんてすごいなと思つていたら、ガウスに勇者は髪の色を金色に染めるしきたりがあるので聞いた。どんなしきたりだ、それ。

勇者もそれに対して笑顔で返す。その笑顔に黒いオーラが一切見受けられない。

本当にこの国」と驕す氣か、勇者。

「着いたぞ、ここだ」

ガウスが足を止めた先にあるのは土煙の舞う闘技場のような所。ここがさつき言つていた訓練場のようで、中央の所に剣を振る男の人達が見える。

「おい、ウェルズ！勇者を連れてきた！」

ガウスが叫ぶと、中央で剣を振つていた内の一人がこちらを向いて走ってきた。

ガウスよりかは若そうな風貌を持つ中年の男の人で、強面だった。

「おお、そつか。修行を受けに？」

「それもあるんだが、まずは私の弟子と戦わせてやつてくれ。勇者の希望だ」

「弟子？…………」の可愛らしいお嬢さんの事か？」

「ああ」

「初めてまして。ウェルズだ」

「リンです。師匠にやらないと殺されるので使わせて頂いていいですか？」

「構わない。使つてくれ」

「どうもです」

ウェルズが二ツコリと人の良い笑みを浮かべる。

それから中央で練習する男の人達をどけて貰い、勇者と手合わせをする形となつた。

それにしても展開が早い。

出会つて翌日で勇者と勝負、これ何フラグ？

そもそも勇者と言つたら騎士団団長と戦つて負かして強いつてことを見せ付けさせるフラグが有効なはずなのに何ですか、この展開は。憂鬱感が半端ない。今すぐ逃げ出したい。

第一、勇者が一介の下つ端を相手にして勝つて嬉しいんですか？ガウスもガウスだ。か弱い弟子を勇者の前に放り出すなんて酷すぎるだろ？

「一つ聞きたいんですけど」

「何だ？」

「制限時間3分でどうですか？」

「分かつた、参つたと言わせればいいんだな？」

「武器破壊でもいいですけどね」

私は持たされた木刀を見つめる。

この勝負、負けたら殺される、ガウスに。

つまり、負けることは出来ない。けど勇者相手に勝てる筈も無い。  
何これ、私にどうしろと言うんだ。

私は残された道は引き分けのみ、3分 耐え切るしかない！  
私は目の前の勇者に木刀を構え、見つめると勇者が顔を背けた。  
いや、何故そこで背ける？

「じゃあ、行く……」

「勇者様ツ！…？」

勇者と私がその場で突然の声に驚き、固まる。

今のは訓練場の奥の方から響いた。

私は動こうとした体勢で固まつたので若干姿勢がキツイ。

それにしても誰だろうか、女の人の声だつたみたいだけ。

視線を変えてみると訓練場の奥で綺麗な女の人が剣を持って口を開けていた。

あれは ハーレム要員の騎士団副団長であるアーリアさんだ。  
切れ長の赤い瞳に燃え盛るような赤いさらさらの髪の毛が人気の美女で、剣の腕が天才的と言われ若くして副団長を務める人。  
騎士団の中では唯一の華で、憧れの的なそうだ。

そんな彼女が焦つたように勇者の方に駆け寄り心配そうな顔を浮かべている。

うん、勇者と彼女は端から見ればバツチリお似合いなカップルだね。

「何をしていらっしゃるんです！？勇者様が何故このような所へ  
？」

「あ、少し…自分の力量を知りたいと思つたのですが……いけませんでしたか…？」

今だけ勇者に尊敬の念を抱きました。

いきなりのことに動じず演技に笑顔、どこの詐欺師か。

演技が本性と違いすぎて鳥肌が立つ。断言しよう、勇者は一流の俳優になれます。

「いえ、そのようなことは…。けれど何故この者と他にもマシな相手がいたかとは思いますが」

私とアーリアは一度廊下で会っている。  
会話こそはしていながら睨む力だけは以上に凄かつた。言動と行動から勇者に一目惚れですか。恋愛に興味の無い鉄の女といった噂は嘘?

「いえ、私から頼んだのですよ。彼女は快くも引き受けくださいたので」

勇者は笑顔を崩さないまま、答える。

1つ訂正をお願いします。快くないです、嫌々です。  
そして勇者とアーリアさんで二人のワールドを展開しないで下さい。私、空気化します。

この場から抜け出したいのに抜け出せないこの気持ちを察しろ。日本人はこうゆうプレッシャーに人一倍弱いんだぞ。

「けれどこの者では勇者様と対戦させるのは失礼に当たってしまします。どうか、やるならば私と対戦してくださいませんか? 私ならば副団長を務めておりますのまだ相手になつて差し上げられるかと……」

「でも、私は……」

「お願いします。一度だけでいいのです」

「いえ、それでも……」

「私ではやはり戦力には欠かしますか?」

「そういう訳ではなくて…」

「ならば致しましょう！おい、木刀を貸せ」

私の手元にあつた木刀がアーリアに渡る。奪つよう取られたので不覚にもよろめいてしまつた。

その時勇者がこちらを見て驚いたような顔をしたがまあ当たり前でしょう。

いきなり副団長との戦いにシフトチェンジしたんですから。私は助かつたんで嬉しい事この上ありません。

アーリアの言動にツツ「ミミたい事がいくつかありましたが、勇者、頑張れ！仲間との初対戦ですよ。

私は内心ウキウキしながらその場を離れてガウス達のいる観覧席へと向かつた。

訓練場は屋根の無いドームのよつな造りをしているので観覧席がちゃんと存在する。

私は訓練場の奥にある階段で観覧席のある2階へと昇り、ガウス達に会ひ。

「師匠…と言つことで今回の対戦は無しです」

「チッ。仕方ないか…。じゃあ座つて見てろ。勇者と騎士団女との対戦か、悪くない組み合わせだがつまらなくなつたな」

「つまらなくなつた？むしろ楽しくなるのでは？」

「…………はあ」

「なんですか、その溜め息。地味にダメージですよ？」

「いいから座つてろ…………つたぐ」

「は～い」

私は観覧席に着いて、下にいる勇者を見下ろす。

勇者とアーリアが何かを話しているらしいが声は聞こえない。

話がついたのか一人のが離れてお互ひ木刀を構え始めた。

さて、勇者はどれ程の強さなんでしょうかね。出来れば人間内である事を希望して。

#### 第四話・観者と見聞の手合せ（後編）

色々な展開をすり飛ばしてゆくなきがしますがどうか温かい田で  
見守つてください……。

## 第五話・勇者の仲間（前書き）

勇者の仲間がやつと全員出てきました。

## 第五話・勇者の仲間

本日は冬とは思えない程の暑さが照りつける。降り注ぐ陽光が暑さのみを運び、体が少し汗ばむ。炎天下とはいっても過言ではないこの暑さの中で、金属音が鳴り響く。

不快感を思われるような音だが、私はこの音がどちらかと言えば好きである。

金属音を鳴り散らかすのは訓練場の中央で向かい合つ勇者と騎士団副団長の肩書きを持つ勇者の仲間。　もといハーレム要員。剣の打ち合いを見続けてもうすぐで3分を切るが決着はまだ着かない。

着かない　　というか着けない。

圧倒的に勇者の方が剣技や能力は上なのだが、決着を着けようとはせずに只打ち合いを続けている。

一方でアーリアはもう疲労困憊しており、打ち合いを続けるのがやつとと言つた感じである。

そしてそんな戦いを見続けている私が思つた事は、騎士団団長が怖いという事です。

副団長のあまりにも情けない姿に観覧席に座る団長がお怒りの様子でさつきから顔が怖い。

ただでさえ強面で怖い顔がさらに迫力を増してもはや鬼と化している。

(ウェルズさん怖あ…。もう人一人殺つてるようなオーラが出てるよ……)

私は勇者の試合よりも団長の顔の怖さに意識が持つていかれていた。その時に大きな笛の音が鳴り響く。

どうやら勇者の試合が時間切れで終わったようである。

それと同時に団長が観覧席から立ち上がり、ゆっくりと階段を下りていった。

私とガウスも下へ降りて勇者のいる中央まで足を進めた。

「馬鹿者！お前は副団長という役職に就きながら何という体たらくだ！！！勇者様に勝てない事は十も承知の上だとしても良い勝負すらも行えんのか！！！」

団長がアーリアさんに怒鳴りつける声が響いていた。  
アーリアさんは顔を伏せ、じっと動かずに聞いている。

「まあ、ウエルズ。そこまで怒らずともいいだう」

「良い訳があるか！ガウス！貴様の弟子であればもつと良い試合を行えたのであるつー？」

「え……あ どうだらうか？」

「渋らずとも良い。それを取つた上に無様な戦いを見せてしまなかつた」

「いや、そこまで…」

私が物凄い団長に過大評価されてる。

評価されるのは嬉しいけど身の丈にすぎる評価は有難くないのでやめて貰えますか？

あ、ホラ。アーリアさんがいつかを睨んでくるんですつて。かなりの眼力で。

「すまないが勇者様。修行は明日にして頂けませんか？こっちの馬鹿を修行し直さなければ勇者様の仲間とはいえません。失礼します」「別に構いませんよ。では」

勇者が最後まで笑顔で団長が去るのを見送ると一気に顔が無表情へと変わった。  
「演技終了」。

「自分の力量を測ろうにも測ることができるなかつたな、あの女の実力は分かつたが」

「勇者の仲間としては少し力量が足りなかつたか？」

「まあな。さて、今度こそ相手をして貰おうか？」

リン＝

ヒュー＝

「断りさせて頂きます。副団長ですから勝てなかつた相手を見習いがどう勝てと？」

「お前ならいけると思つんだがな」

「どんだけ皆さん私を過大評価してるんですか、師匠の弟子だからですか？」

私が言い放つと勇者とガウスが大きく溜め息をついた。  
いや、溜め息をつきたいのはこっちなんですが。

「ま、いいか。勇者、皇帝陛下のところへ行くだ」

「……いきなり何だ？」

「いや、何か成り行きで忘れてたけどリンを落ち着かせる畠田で皇帝の間を退席しているんだぞ。戻らなきややばいだろ？」「が」

「そういうれば忘れていました。ナイフで切りつけて出てきてしまつたんでした」

「お前はいつもいきなりの行動だからな。あれでよく不敬罪にならなかつた」

「いやあ、無意識で体が動いてて……」

「その反応が怖いな」

ところで事で城の中を進み、黄色い声が上がりつつ玉座の間の正扉の

前に辿り着いた。

ここに来るまで勇者が女人達に困まれて足止めをくらつたので大変だつた。本来なら3分もかからなかつたような道が20分もかかつたとはどうしたことだ、イリュージョン？

さて、扉前まで来たのは良いけれど入りにくい。

だって下つ端が正扉からですよ！何様つて話なわけですよ。けど裏扉からは入れません。こそこそ入つて皇帝へのご挨拶は出来ない上に不敬罪で打ち首確定になつてしまします。

ガウスが指を動かして金の装飾で造られている重そつた正扉を魔法で開けて行く。

（そもそも皇帝の前なんかに一介の下つ端！絶対おかしいつて…！私はどこで選択肢を間違えてこつなつてしまつたんだよ…）

心の中での葛藤を繰り広げながら田の前の扉はゆつくりと開いていきます。

分かりました。この世界は私を苦しめたいんですね、受けてたつてやりますよ。

扉が完全に開き、中に入ることを余儀なくされると勇者とガウスの後に続いて私も中に入る。

赤い絨毯の先には玉座に優雅に佇む皇帝が。

私達は玉座の前にまで歩いていくが、その間皇帝の側に控える重臣達の視線がめつちや痛かつた。

今この玉座の間にいるのは皇帝と重臣達だけみたいだつた。玉座前にまで来ると膝を折つた。

「……リン＝ヒュードだつたな」

皇帝が開口一番に発したのが私の名前だつたので心臓が跳ねた。

「落ち着いたか？」

「……え？ あ……はい……」

皇帝の予想もしていなかつた言葉に一瞬固まつてしまつた。  
勇者を切りつけた事や何で私が仲間となるのかを聞かれると思つて  
いたので少し拍子抜けしてしまつた。  
予想が外れたのは嬉しいから良いのだけれど。

「ならば良い。…して勇者、何故この者を仲間に？」

「……理由はある事にはあるのですが、話す氣はございません」

勇者が爽やかな笑顔で言つてのける。

「… そうか。仲間の件はいいのだが話したいことは今後の事についてだ」

「今後…とは？」

「まずは勇者の修行は良いとして、その前に勇者の仲間と自己紹介だけでもやつて欲しい」

「そういえば騎士団副団長とお会いしましたよ」

「そうか。ならばそちらはいいな。後は神官長のクレアと魔法士のミリー、我が娘のラルアだ」

「そうですか。近いうちにお会いしたいですね」

「その憂いは必要ない。この3人は既に別室に集めてある。ここを出た左の客室だ」

「……分かりました」

皇帝がそれだけを言い残して重臣達と去ると、勇者が舌打ちをした。  
つて舌打ち！？

「面倒くさいな。わざわざ会いに行けと言つ事か」

「…待つてくださってるみたいですし、早く行つた方が良いのでは？」

「他人事のよつて言つてるがお前も付いて来いよ」

「いえ、私は……」

「お前も仲間だからな」

勇者が不敵に笑う。

語尾が強調されたのは氣のせいではないらしい。

「じゃあ私は帰る、そろそろ仕事に戻らんとヤバイ」

「え…ちょ、師匠！待つてくださいよ」

「しばらくは私の部屋に立ち入り禁止だ、リン」

「し、師匠

…！」

「諦めろ、行くぞ」

去つていいく薄情者の背中を見つめながら勇者に首根っこを掴まれて強制連行。

仲間と会つゝ会つた瞬間かき氷が作れそうな予感がするほどの視線を受けますよ。

だつて、勇者の仲間になることを断つて言つたんですね…？  
なのになんか流れで仲間になつちゃいました、テヘ。 つて  
か！？

嫌だ、死亡グラフ！

私は逃れようと必死に体を動かして逃げようとするが勇者の引っ張る力が強くて抜け出せるに抜け出せない。

勇者はそんな私を見てただ微笑を浮かべるだけ。

かつこいいけど嫌味か！哀れな子羊を見てあざ笑いやがつて…！

玉座の間を出てすぐ左の客室の前まで来ると、勇者はやつと私を放した。

首根っこを掴まれていたので少し咳き込む。

私は既に逃げ出せない状況まできてしまった。ブリザードの視線を受けるまでタイムリミットはもう無い。

勇者が躊躇いも無く扉を開けて私も中に引きずり込まれる。

「初めまして、皆さん。挨拶が遅れましたが勇者として召喚された劉斗と申します」

中に入った勇者は眩し過ぎる笑顔で自己紹介を述べると日本文化の一つであるお辞儀をした。

お辞儀も優雅すぎて、分度器で測れば45度ピッタシでは無いかと思つほど完璧なお辞儀だった。

そんな勇者を中にいた仲間は見惚れていた。

頬を薔薇色に染めて瞳は甘くつぶらか。まさに恋する乙女のものだった。

「あ、貴方が勇者様……」

眩いたのは神に身を捧げ、純潔を貫き通す神官長のクレア。

白き巫女と呼ばれる彼女は、衣服を穢れの無い白で統一し金色に輝く髪と瞳はまるで女神だとわれている。

凜々しい顔付きは今ピンク色に染まつていて更に魅力を生んでいる。

「やつぱつ……かつ……」

ふつぶらとした赤い唇からその言葉を漏らしたミリー。

くねくね巻いてある茶色の髪に大きな紫色の瞳で可愛い系の顔立ちをしているミリーは性格が男のようなのが玉にキズと云つ事らしいがそれでもギャップがあるからと求婚を絶えず受けているような子。同期と言う事で仲は良いほうだった。だからミリィの事を少しは知つている。

彼女の憧れは野性味の強い男らしい男なそつだつたはずなのに正反対の勇者に一目惚れとは驚いた。

「…………はう…

勇者の顔を見て守りたくなるよつなよろつき方をする皇女ラルアは、140あるか無いかほどの小ささで華奢な体つきをする守りたくなる女の子。

王族特有の銀色の髪に透明感を持つ白色の瞳は小顔に合ひ優しさを感じさせる。

王道には定番と言える皇女だった。

(これがハーレムを作ることのできる男の能力か！？)

一気に3人の美女を落とした勇者に尊敬の念を抱いた私は呆然としていた。

笑顔一つで女を落としてハーレムを作り上げるのが王道の勇者。この勇者は全く持つて王道を突き進むらしい。

それを見ていかなければならない私はどうすればいいんだろう。

「よろしくお願いしますね」

首を少し傾げて言う勇者は計算でもしてゐるのか完璧だつた。

可愛さを生み出しながら、それでいて男らしさを失うことの無い仕草。

ハーレム3人はもうめろめろだつた。

え、私？勇者の本性を知つてしまつてるので恋愛対象外ですよ。目の保養だなとは思いますが美形はテレビの中でいいです。

「は、はいーあの……私は神官長を務めているクレア＝トレイルと

申します。これからよろしくお願ひしますね

顔を真っ赤にしながらも平静を装おうと声音は冷静さを保つクレア。

「あ、俺は//コート//言ひ一よ、よろしくなッ」

『恥ずかしそうに言ひつつもの調子じゃない。

「……私は……ラルアって言います。治療術が使えるので今回の同行を希望しました……足手纏いにならないよう頑張ります……」

もじもじしながら言うラルアは勇者の方を上田遣いで見つめ上げる。勇者は何気に身長が高くて、私も見上げなければならぬほどの大きさだけど上田遣いはやばいでしょ。

そつ思つて見上げてみると勇者は私の視線から顔を逸らした。耳が赤い。

勇者め、そつそく王道の皇女との恋愛ストーリーを始める気か。

「では自己紹介も終えたので失礼します。……おい、行くぞ」

耳元で囁かれて驚く。

無駄に美声だから心臓に悪い。

「いや、私は何のために来たんですか。せめて自己紹介しますよ。

あの、リンク=ヒュードです。では」

腕を勇者に掴まれながらも一応自己紹介をする。

3人は勇者にずっと見惚れていて私の自己紹介など微塵も聞いていないようだったが。

ま、いいか。

私は成すがままに勇者に引っ張られて部屋の外へと出る。

(それにしても全員美人だつたな）。日本じゃ絶対にお田にかかりないね）

私は一人そんな事を考える。

「…面白くさい挨拶は終えだし、部屋に戻るか」

「そうですか、ではさよならですね。お部屋への道は分かりますか？」

「は？お前も来るんだよ」

「へ？いやいや私は用事がありまして…」

「用事？」

「はい、日課で図書館へ」

「……ふーん。じゃあ俺も行く」

「何故……まあいいですが…」

毎日図書館へ通う理由は単純明快。

いざ、元の世界へ帰るため書物を読破している。

魔方陣から空想のジャンルまで幅広く読み漁り探しているものの有力となつた情報は一つもない。

この国は別名『文明の塊』と呼ばれ、図書館にはそれを証明するかのじとく書物がある。

記録によれば図書館には約5000万冊もの蔵書があるらしい。

だからこそ可能性を信じて毎日通り詰めているのだ。

図書館は城の中に入り、行く事が簡単なので通り詰められる原因にはそれも入つてゐるが。

ガウスから暇も貰つたことですし、今日は読みふけるぞ！

つと思つたのはいいんですが、勇者がついてくると言い出すなんて予想外でしたね。

図書館に行つて人が騒ぎ立てなければいいんですがその心配は要らないでしょうか？

人は滅多に居ないし、居ても静かな方ばかりですから。

ただこの勇者が書物に興味があるとは少し意外でした。外見をこの際詳しく説明させて頂くと、金色に輝く髪と正反対に鋭い瞳に染まる黒色が整った顔に映え、スタイルも少し引き締まっている感じでどちらかといえば運動系で文化系には見えない。

眼鏡を掛ければ別だと思うけれど。

基本見た目はクール系美少年だけど演技中は紳士になるとほんないでしょ？

とか考えてる内に図書館へ辿り着きました。

「こんにちは、リンです。新しい本がまた入ったと聞いたなんですが……」

いつも通りに図書館の扉を開けて、中に居る人に声を掛ける。

「やあ、リンちゃん。入つてるよ、パッド先生の新作『未知の魔方陣』が

人の良さそうな優しい笑顔を浮かべて出迎えてくれたのは図書館の管理員をしている通称『図書館の主』。図書館にある本で知らない本は無くて、ずっとここで管理員をしている。

明るい亜麻色の髪と薄い水色の瞳は決して悪印象を抱かせない30代の男の人。

「本当ですか！？それ下さい！…」

「毎度あり〜、2000」だよ

「た、高い…。ここは…1000」で…」

「しょうがないなあ、常連さんだから一八〇〇」でいいよ

「一五〇〇」！

「一七五〇」

「一六〇〇」

「一七〇〇」

「……分かりました」

私は結局三〇〇「しか値切れなかつたことを悔やみながら一七〇〇「を差し出す。

ん？普通は図書館なんだから借りるはずなのになんで値切つて買つてるかつて？

ここが地球とは違つとこなんです。

こちらでは図書館は読めるところであつて借りるところではないらしく、借りるには買わなければならんないです。もちろん買ったんだから自分の物になりますが本を買わずに図書館から持ち出すことは禁止とされています。

ちなみに『』とはお金の単位で『円』とあまり変わりません。100「は100円といった感じです。

一応お城で働いてはいるので雀の涙ばかりのお金を貰つてます。だから値切らないとリアルに餓死するのです。

私は受け取つた本を抱きしめて早速読もうと席に向かおうとしますがそこで大事な事に気づきました。

勇者を忘れてました。

「ありがとうござります。あ、それと一緒に紹介しておきますね、こ

ちら勇者様です」

「へえ、リンちゃんが勇者の仲間になつたつて本当だつたんだね」「何故それを……」

「うん？ガウス様が場内に放送を……」

「あの師匠、絶対殺す」

「…………うん。それはまあともかく勇者様、リンクちゃんのことをお願いしますね」

「…………はい」

勇者の紹介を終えたことや、ガラガラの図書館内に数多くある席に着いて本を読み始める。

本を読むだけなら買わなくてもいいのに買った理由は本の処分の速さと図書館の開館時間の短さが原因となる。

毎日増え続ける蔵書のために新作であっても僅か3日で処分されたり、開館時間が毎日2時間だけなのでとても買わなければ読むことが出来ないのだ。

私はそんな理由で買わざるを得なかつた本の1ページ目を開いた。



## 第五話・勇者の仲間（後書き）

勇者が旅に出るまで後数日？数十日？はたまた数ヶ月間か。  
どちらにせよ魔族が修行終わるまで律儀に待ってくれるなんてある  
はずがないですよね

## 第六話・見習いの危機（前書き）

お気に入り登録と評価をありがとうございます。

## 第六話・見習いの危機

私がこの世界に来てからもう半年間が過ぎた。

初めはただ何が何だか分からなくて追い掛け回す魔物から逃げ惑つだけだつた。

けどそのうちこのが『違つ』といふのだと気づいて、元の世界に帰りたいと願つた。

そして元の世界に帰るための方法を探して半年が経つた今、ようやく見つけた。

手がかりとなる情報を。

私はゆっくりと田の前に開いている本を閉じる。

喜びのせいか手が震える。

何千冊も読み漁つて今日見つけた本に書いてあつたのだ、帰る方法の手がかりを。

『未知の魔方陣の中でも、一番未知とされるのが異世界へ渡る術です。しかし長年の研究結果で少々分かる部分が生まれました。すなわちそれは、魔族の王が持つ最も大切な物が必要だという事です』

魔族の王 それは魔王。

定番すぎる定番。

魔王を倒して帰る方法が手に入る。

私は思わず椅子から立ち上がり、ガツツポーズをした。

「……何してんだ、お前」

目の前で本を読んでいたらしい勇者が呆れたよつた声を出す。

「……こえ、長年の夢が叶つたかと嬉しつゝこぼしゃいでしまいました」

「長年の夢?」

「はい、半年間ほど夢に見てました」

「長いようで短い月日だな」

「ええ、それはもう」

「で、何を?」

「……………あ、新しい魔法陣の発見です……」

「…………ふーん」

大雑把には間違えていない!

すみません、勇者。魔方陣が作れたら一緒に帰りましょう。  
そのためにも、魔王退治頑張ってください。

陰ながら応援しますので。

「もうすぐ閉館みたいだ。帰るな」

「分かりました。では」

「明日訓練場だから」

「……私、明日は通常業務が

「休め、訓練場に来いよ」

「いやいや、無断休仕は給料が貰えないんで……つて逃げた……」

物凄い速さで図書館から姿を消した勇者をやつぱりこの世界に置き去りにして行こうかなとか思いました。

私のお小遣いのピンチですね、現在の貯金4300円。

あつという間に消える額です。

どうしましょか、勇者に慰謝料請求でもしてやつべつしますか。  
そんな勇気が無いので却下ですが。

ああ、本当に餓死するかも。

(明日は訓練場…。行かなきゃ駄目かなあ?)

ぶつちやけ行きたくない。

勇者怖いし給料が消えるし。けど行かなきゃ勇者怖いし。

明日が来ない魔法つて無いのかな。

そんな馬鹿なこと考えても無駄ですよね。お金の方は後で考えましょつ、いざとなればガウスから請求してやります。

私は一人また本を読み始める。

(…えっと、やつきの続き……。あ、ん~と?… なお、魔王は強靭な生命体であるために奪い取ることは不可能と考えていい。これを手に入れるためには、魔王に取り入るか魔王よりも強い生命体を戦わせることである。参考にすると勇者ぐらいい。倒すなら頑張つてください)

何、この投げやり感は。

私は溜め息をついて本を再度閉じると、図書館を出ようとしました。そして扉の手を掛けるとふと優しげな声がかかる。

「リンちゃん。魔族と出合つたらすぐ逃げるんだよ」

「主さん……」

「君が命を落とす理由はないんだから」

「…ありがとうございます」

「またね。リンちゃん」

「またね、主さん」

引き止められた私は挨拶をして図書館を出て、廊下を歩いた。わつきの主さんの言葉が少しひつかかりながら。

私が命を落とす理由は無い。なら勇者は?

勇者だつて命を落とす必要なんて無いはずだよ。主さん。

なのに何故勇者には何も言わなかつたの？  
何を思つてそう言つたの？

(「この国は勇者は死んで当然だと思つてゐる……？」)

勇者マニコアルなんてあつたくらいだ。

勇者を只のゲームの駒としか思つてないんだ。

そんなこと私が知つても可哀想ぐらいにしか思わないけど、なら私は？

私は異世界から来たけどこの国の人間として溶け込み、生活している。

なら私はさしつづめ物語でよくある大勢その他の人一人だらうか。

(ま、それなら有難かつたんだけど……。大勢その他が何故勇者の仲間入りを果たしてるのかな？)

私は何のために異世界へ来たんだらうか。

理由も無くただ飛ばされたのか何か理由があつて飛ばされたのかすらも分からぬ。

もし理由があるとするならばこんなとこだらうか。

勇者の仲間になり、魔王を倒した際に魔方陣を構築して元の世界へ帰れ。といった感じ。

あれ、これ私必要か？

魔方陣を構築するのなら元々こちらの世界に居る魔法士でいいはずだ。　　あ、駄目だつた。めろめろのお姉さま方が勇者を帰すはずが無いや。

とするとマジでそれが理由かな。

(はあ、そんだけの理由で私は瀕死に追い詰められたり無駄に本を読みだりしてたのか)

今までの苦労は何だつたんだろうか。

私はテンションが下がつて足取りが重くなつていくのが分かつた。

(「こんな時は城下に行こう。うん、買い物して気分を高めるんだ」)

お金が危機的状況だといつのに城下に行こうとするのは何故だろ？  
いわゆる買い物中毒かもしない。

治したいとは思うけど買い物は楽しいからやめられそうに無い。

私は城を出て、門番に挨拶した後城下に着いた。

城下には頻繁にくるので門番とはすっかり仲良しの顔見知りになつてしまつた。

城下は夕日に照らされながら人が大勢行き通り、賑わつてゐる。  
上手に客を呼び込む商売人や井戸端会議中の奥様方。それにはしゃぎ回る子供たちで賑わう城下はいやなことを忘れさせてくれる。  
私はいつものように城下を歩き回り、品物を見ていく。

「お、リンじゃねえか！今日は何を買う気だい？」

「おっさん…ふ…今日は買い物に来たわけでは無いのです」

「めづらしい…リンが買わないなんて、病氣か？」

「病氣つて…失礼ですね。貯金が危機的なんですよ」

「あつはつは。まあ、あんだけ買つてりやあな」

「口車に乗せて上手く買わせる商売人に言われたくないです」

「…ねう、相変わらずの毒舌つぶりだ。お~い、皆…リンが来てる

ぞ~！」

雑貨屋を営む商売人、おっさんと呼んでいるがおっさんとは結構な顔なじみである。

おっさんだけでなく城下にいる人とは大抵顔なじみで、仲が良い。

「え、リン！」

「あ～リンさんじゃないですか」

「リン！仕事はいいのかい？」

「リンねえちゃん～」

「遊んでよ、リン姉！」

おっちゃんの声で集まってきたのは城下でも結構ひいきにしてる商人や、よく遊ぶ子供たち。

「こんにちは～。皆さん相変わらず元気そうで」

「当つたり前だらつ！商売人は元気がなきゃやつてけないよー。」

「いつもどおりの返答ありがとうございます」

「そつちもこつもどおりの質問をありがとうございます」

「ねえ、リンねえちゃん、遊ぼお～！」

「そうだよ、遊んでえ～リン姉！」

「いいですよ。今日は買い物するとマジメに餓死してしまこそうなので」

「あら、そんなにやばいならウチで雇つてあげようか？」

「はは…雇われると死にそうなので遠慮して置きます」

「失礼しちゃう。ちよつと多忙すぎるだけなのに」

楽しく賑わう会話が異世界にいるといつ不安を消してくれる。

私は何度もここの人々に救われている。

話に区切りをつけるとそれを見計らつたように子供達が私の袖にしがみついた。

私は子供達に袖を引っ張られて、城下の中央にある広場まで連れて行かれる。

決まって遊ぶときも広場になつている。

「よし、では何をして遊びますか？」

「リンねえちゃんのお話…」

「馬鹿！歌がいいよ！！」

「え～じやあお歌」

「また私にあの醜態を晒せと？」

前にもせがまれて小声で歌つたことがあつたが、広場だつたので人に見られて凄く恥ずかしかつたのだ。

しかも地球の歌だから音楽なしの状態はきつかつた。せめてまだ話の方がいい。地球のものしか知らないが。

「今日はお話にします」

「わ～い」

「え～」

「はい、黙る。ではお話、何にしまじょうか」

「前に言つてたオリジナル話！」

「……あれですか。適当に考えたものなんですが」

「いいよ。リン姉、話して！」

子供の無邪気な笑顔に押されて私は考へる。

前に話したのは異世界にちなんでの勇者と魔王の戦いだつた。

今日はどんな話をしようか。

「昔々、あるところにお爺さんとお婆さんがおりました。一人の夫婦は大層仲の良い夫婦でしたが、ある日お婆さんが病で亡くなつてしまつました。悲しみに明け暮れたお爺さんはある1つのことと思いつきました。それはお婆さんを生き返らせるという事でした。お爺さんは研究に没頭し、人を生き返らせる方法を突き止めました。人を生き返らせる方法は、生き返らせる人と同じ血を持った者を全員殺すことでした。お爺さんは自分の子供と孫を殺し、更にはお婆さんの血縁者を全員殺しました。血に塗れたお爺さんはお婆さんの

ためとはいえた、人を殺してしまったことを後悔し自らの胸にナイフを突き刺しました。しかし、お爺さんはその残酷さを見初められた魔王に自殺を阻まれたのでした

「おじいさん、悪い〜」

「これ、知ってるー狂った愛ーーだよ」

子供達に話すには少々早すぎる物語かと思い、当初は話そつとは思わなかつたがこの世界の子供達は物語に關してはありえないほどビビアになる。

地球で話す幼児向けの物語なんか話した途端に総スカンをくじり。とゆうか狂つた愛なんて言葉を何処で覚えた。

「止めた魔王はお爺さんにしていました。『貴様の死ぬ命を私に寄越せ』お爺さんは魔王に咳くよつな声でこう言いました。『いくらでもくれてやる。こんなわしは生きてる価値などない』すると魔王はお爺さんの頬を殴り飛ばしました。『生きてる価値がないだと? ではそんな事をいう貴様に殺された者たちも生きてる価値は無かつたというのか』魔王の言葉は怒りに満ちていました。『貴様は生きる、死ぬことなんて許されない。殺したものの分まで生きて苦しめ、それがお前に与えられた罰だ』魔王はそう言うとゆつくりと消えていきました。その時お爺さんには何故か魔王の姿がお婆さんと重なりました。『馬鹿な亭主だね。あたしや死んじまつたけどそれまでの間は十分幸せだったって言うのにお前さんは分からなかつたのかい? 生き返りたいなんて微塵も思わなかつたさ。あんたと出会つたことであたしや死んでもいいと思つほどに幸せだつたんだから』それは紛れも無くお爺さんの愛したお婆さんの声でした。ゆつくりと消えていく魔王を見ながらお爺さんは咳きました。『魔王となつてわしに会いにくるなんざ洒落とるわ』お爺さんはその後、自首をして死ぬまで牢屋の中で過ごす事となります。が、死ぬときまで笑いを絶やさなかつたそうです

「無駄に感動的だよ！－リンねえちゃん！－！」

「相変わらず良い話を持つてくるね、リン姉！－！」

話終えると、目の前の子供2人は号泣していた。

よ、よかつた。合格点は貰えたらしい。本当に当初なんか不合格ばっかりだったから。

元々の負けず嫌いもあつたせいか寝ずに考えた話とかもあつた。

「そろそろ夜になりますね。もつお家へ帰つたほうがいいですよ」

私はすっかり見慣れてしまつた夜を肌で感じながら、子供達に帰るよに言つた。

「うん！またね！－！」

「バイバイ、リン姉え！－！」

2人は走つていぐと薄暗くなつた夜道に溶け込むようにして消えていつた。

私も帰つと、広場から城の方へ歩き始めた。

するとその時、ふと後ろから殺氣を感じ思わず隠していたナイフを後ろに放つ。

金属がぶつかる音が鳴り響くとナイフが結構な速さで帰つてきて、避け切ることができずに頬をかする。

何が起きているのか全く分からなくて、薄暗い広場の中を目を凝らして見渡す。

「…ッ。何者ですか……」

武器が後ろの方まで飛ばされ、今は丸腰状態。応戦どころではない。いや、そもそも何故私が。

私をただの民間人としての攻撃かそれとも勇者の仲間となつたからか。

どちらにしろ殺氣は明らかに私に向けて放たれていた、今は逃げるしかないか。

私はジリツと後ろに後ずさる。

するといきなり口元が覆われ、体が動かなくなつた。

(ツー?、二いつ?、!?)

いきなりの事で頭が追いつかないが危機的状況というのは分かつた。私は暴れても無駄なのでなるべくじつとし、相手が動くのを待つ。力強さから、男だ。力では勝てない。

考えて理解するのは後だ、とりあえず逃げないと!

「…暴れないのか。頭は回る方らしいな、リン=ヒューード」

私の名前を知つていて。

ということは誰でも良くて狙つた反応ではなく、確実に私と分かつて狙つた犯行か。

勇者の仲間つていう理由の線が濃いかな?

「まず状況の説明をしてやろう。お前を狙つた理由は至極単純、勇者の仲間とやらがどれだけのものかを見てみたかった」

やつぱりか。

勇者の事はまだ国民にすら知られていないどころか私が仲間になつたなんて事は知られる余地も無い。

考えられるのは城の内部の人間。

「私が相手でなければ仕留められていたかもしけんな、中々の腕前

だ。……ツ！」

相手が私から手を離して飛びのぐ。

話していると人はどうしても油断を生む。

私は覆われていた手を噛んで離れたところで広場に立つ木の枝を折り構える。

すっかり暗くなってしまったせいで相手の顔は見えない。

「…油断を突くとはな」

「いい言葉を教えてあげましょ。油断大敵という言葉があります」

「……覚えておこつ」

「そんなことよりも、ただ試しに来た訳では無いよ。ですが本題は何でしょう？」

「…率直に言えば話をしたかっただけだ」

「それは平和的なものでしそうか、正直厄介事の話ならば御免ですね」

「ふむ…、どちらかと言えば平和的だな」

「なら、窺いましょうか。まずは顔を見せてください」

私がそう言つと、暗闇の中から相手が現れる。

私はその時、田を見開いた。

何故なら彼は、流れるように足元まである漆黒の髪をたずさえ、血色に底光りする赤色の瞳を持つ事を特徴とした魔族だった。

魔族だ

## 第六話・見習いの危機（後書き）

この世界の子供は遊びに関して超ジビアです。  
生半可な物はぶつた切られます。

感想お待ちします！

## 第七話・魔族の話（前書き）

～あらすじ～

前回、いきなりお命頂戴と狙われた主人公の前に現れたのは魔族の男だった。その男は話があると言い出しが。

## 第七話・魔族の話

漆黒に艶めく髪は地面に着くほど長く、赤黒く煌く瞳はとても綺麗と感じてしまつ。

その色を持つのは、勇者召喚を行う要因となつた魔族。

私の前に現れた彼は、紛れも無い魔族でとても綺麗な色を持つていた。

羨ましいことに顔も端整で勇者と同じかそれ以上の美形顔だつた。

「……この国は美形出現率が高すぎますね」

ついそんな言葉が漏れてしまい、目の前の魔族は訳の分からないといつた顔をする。

美形には分からぬでしょ。平凡顔の辛さなんて。リア充なんて爆死したら良いと思いますよ。

「失礼しました。それで、現在この国と対立中の魔族が何の御用でしょうか」

「お前は魔族を怖がらないんだな」

「いえ、怖いですよ。何せ得体の知れない種族ですし」

「だが怖いと言つたような口ぶりではない」

「単に変な先入観を持つことが嫌いなだけです。それに怖がらなければいけないという法則なんて存在しません」

「そ、そうなのだが…」

「とにかく！用件を早く話してください。無駄な時間割いてる暇なんてないんですよ」

「あ、あ…。私が話したい」とは魔族と人間との和平交渉なのだが、「和平交渉？あ、私には無理ですね。他を当たつて下さい、では」

厄介事と判断を下した私は全力疾走でその場から逃走を図る。が、魔族に逃げ道を塞がれた。早いんですけど。

「待て、確かにお前には荷が重いと思う話だが城の人間で滅多に出てこず、出てくる人間などお前しかいないのだ！」

「それだというのにいきなり殺氣を放つて殺そうとしたのは何処の誰でしたかね。礼儀も弁えず厄介事のみを押し付けようとする失礼な方と話すことなんてありません。とりあえず叫ばれたくなればそこを退いてください」

「わ、悪かった。つい勇者の仲間だということが分かって実力を知りたかったのだ。それに和平交渉だぞ、そちらにとつても良いこ…」

…

「とでは無いですね、和平交渉？舐めるのも大概にして下さいよ。そんなの和平講和を行うために顔を合わせた瞬間殺される可能性がありますし、何より結ばれれば魔族が国に傾れ込み魔族に怯える民が増えます。第一、私は下つ端…！そんな話はトップんと…言つてください…！何なんですか、皆さん下つ端だというのに勇者の仲間にされるわハーレム軍団に睨まれるわ変な期待を受けるわ拳句の果てには魔族…！下つ端に何を求めてると言つんですか…？」

一息も入れずに一気に話しこんだせいで息が切れる。

魔族は目を見開いて驚くような顔をしている。下つ端なんですってば、私は。

「……驚いたな」

何ですか、下つ端は愚痴すらも言ひてはいけないんですか。

「確かに和平交渉を結ぶとなればそのような事も考えうるな…。お前はそこまで考えているのか」

あれ、そこ論点違いません？

「お前に話して正解だつたようだ。持つてきた和平条件を見直そう

いや、あの貴方はあの私の怒涛の愚痴を聞いて  
いなかつたんですか？

何ですか、都合のいいところしか聞こえない耳でもお持ちなんですかね。魔族というのは。

それとも貴方は天然ですか。頼みますから愚痴の方に耳を傾けてください、そしてさつき前半に言つたことは忘れてください。魔族は独りでに領きながら懐から紙束を取り出して私に差し出してきた。

え、何ですか。この紙束。

「…何ですか、これ」

「和平交渉の条件なのだが、お前の考えを参考にしたい。お前が条件を書いてくれないか？」

「いやいや、無理ですよ！？何故私が…！」

「魔族にはお前のように考えられるものはいないし適切な考えを持つたお前の書く条件の方が人間共も納得しやすいだろう？」

「…………！だからって人間に任せせるのもどうかと思いますが！それ以前にどうして魔族が和平などを？状況的に有利に立つてるのはそちらでしょうに」

「お前は何か勘違いをしているようだが魔族は戦いが好きなわけでは無いぞ。人間は侵略などと言つてはいるが我らは元々和平を結びに来たのだ。その際に人間が魔族というだけで警戒心を持ち、中へ通そうとしないから短気な魔族共が暴れているのだ」

「……なるほど。侵略はこちらの勘違いと…。分かりました、どうも早とちりをしていたようすみませんでした」

「分かつてくれたか。ならばこちらの和平条件を…」

「丁重にお断りさせて頂きます。いい加減理解して下さい、和平は国の問題でありそういうのは政府の重鎮が決めることです。一般人の私に言われても困るだけです」

「しかし話を聞いてくれると…」

「ええ、話を聞きました。では私は役目を果たしたので失礼します！」

「あ！ま、待て…！」

「そう言つて止まるのは素直な馬鹿だけです…」

「おー、止まれ…！」

「止まりません」

「止まれと言つていの…」

「止まるか、馬鹿…！」

城へ続く道へ歩いていくが、後ろから魔族が五月蠅く呼び止め腕を掴まれた。

いい加減、腹が立つてきただんですけど。

厄介事には遭遇しなきや駄目だし、変な魔族に絡まれるし。

思えばこの数日間最悪だらけだ。勇者は傍若無人のドジだし師匠は私の人権を無視するしハーレムには無意味に睨まれた。

厄介事を運ぶ魔族にも会うなんて、呪われるとしか思えない。

そもそも始まりは訳の分からぬ異世界トリップ。

一体私が何したって言うの、学校ではちょっと変な普通の女子高校生だったし家では少し変わった家族の一員だった。

けど悪いことなんでした覚え

ないっけ？

つていやいや！無いよ無い。私は善良な一市民なんだから。

ああ、改めて考えてみたら本当に理不尽な異世界トリップ過ぎるよ。

私はその場に足を止めて屈みこむ。

「…………ふえ」

「ん？ おこひう

ー？」

魔族が急ぎ足を止めた私の顔を覗きこみ、驚きに顔を染める。理由は、私の頬を伝う冷たい滴が原因だ。止め処なく溢れ出して来る涙が頬を濡らしていく。

「……私は……只の一般人……ひっく……なのに……ひっく……どうしたら……いいって……言つんです……か……ひっく」  
「あ……すす、すまない！ た、確かに前は勇者の仲間といえ一般人には違いがなかつた……悪かつた！ 私が悪かつたから泣き止んでくれ……！」

魔族がおろおろと慌てたように言つ言葉に私は僅かに口角を上げた。私は俯いていた顔を勢いよく上げて魔族に視線を合わせると満面の笑みを浮かべた。

「本当にその通りですね。では今後一切私の前には姿を現さないで下さいね、和平交渉頑張つてください」

私がそう言い放つと魔族は文字通り固まり、呆然とした。駄目ですね、女の涙くらいで取り乱すなんて。

それも本物の涙じやないのに。

え？ どういう事かって？ もちろんドラマでは定番といわれる魔法の涙アイテム、目薬ですよ。

カラー・コンタクトとセットのものです。

涙を出すってどうにかとか分からないので目薬を使って一芝居打つてみましたがこうもたやすく出来るものなんですね。さて魔族が正気を取り戻す前に退散しましょう。

私は魔族に挨拶を一方的に告げるとその場から本当に全力疾走で逃走した。

厄介事は勇者だけでお腹いつぱいです。

全速力で走っていると城の門が見えてそこに駆け込む。

「……ん? こ、なん、じつもした?」

「変な人に絡まれて全速力で逃げてきました」

「そいつは大変だね。けど中には無理、あと10分待つて」

と云ふ事であります。」

今は真夜中  
そして後10分程で夜が明ける

私はその場で崩れ落ちた。

なんて事だ、まさかの今日まで不眠だと。

そしに思ひ忘れてしまふ  
でいかにこの世界は何かよく知りんが

この世界に来てからはずつかり生活リズムが少しづつ変化して

て忘れてた。

本来ならこっちの夜は24時間でいうところの5時間

私はどんだけ魔族と話し込んでいたんだろう。そこまで話し込んだ

「モリはなかでなんだけど

「這就是我所說的『心』」

「うん、瞬夜。勇者が現れたから」

「...やつぱりですか」

瞬夜。まさしく名前の通りに瞬間しか夜が訪れない現象の事。

この現象は自転が止くなることで起きる現象で、星は影響を受けるほどエネルギーがない限り起きないので、勇者が現れた時にそれは起こる。

といつても私も見るのは初めてで、本を読破中に知つただけでまさかこんなに早く夜が明けるなんて。

勇者を召喚する際に膨大な魔力を用いたために星に存在する磁気に影響を与えて磁気を変化させた。

磁気を変化させるという事は星にも何かしらの影響を与える事となる。それがこの世界では瞬夜という訳だ。

勇者の召喚後、数日以内に発生するのでこの瞬夜は勇者が現れたという事を世界中に知らしめる事となる。

「で、リンさん。どんな男に絡まれたんですか」

「死ねばいいんじやないかと思うほどの中形男です」

「なるほど、人相を教えてもらえますか。指名手配しますので」

「ウザイほど長い髪の毛と真っ黒な服です」

「はいはい、分かりました。手配しておきますよ」

私はその後門番さんと話しきみ、10分程話し込んだところで中へ通して貰える事となつた。

最も、既に日は上がり睡眠をする時間など無く、私は軽く身だしなみを整えてガウスの部屋へと向かつた。

これで48時間寝てないぞ、あはは、夜更かし最長記録更新しちやつたよ。つて全然笑えない。

私は体の疲労度と眠気を振り払つようにガウスの部屋の扉を力強く押し開けた。

「師匠！もう散々です、考えてみれば私がこんな日に遭つ理由つて何処にも無くないですか！？」

「……お、リン。今取り込み中だ、後にしろ」

「はあ？……………し、シツレイしました……」

ガウスとガウスの奥さんとが熱烈キス中現場に遭遇。

うわーお。朝っぱらから何してやがんだ。

慌てて目を手で覆つて、自らの視界を塞ぐ。

何故、ここに奥さんがいるのかは「おみません。ややこしくなります。まあ、奥さん成分が足りなくて呼んだんでしょう。だから私に入るなと言つたんですか。

上半身裸のガウスと全裸なのだろうがシーツを被つている奥さんの濃厚過ぎるキスシーンはアメリカ人じゃあるまいし見てるのは辛いんだよ。

咄嗟に視界を塞いたものの見ちやつたものは見ちやつたんだから！混乱して物凄い支離滅裂な事を言つてしまつたが、意味は通じて二人は恐ろしく鈍い動きで服を着始めているのか衣擦れの音がし始めた。

「リンク、田を開けていいぞ」

ガウスから声がかかつたので私は覆う手を外す。

2人は軽い緩めの着物を羽織り、素肌は胸元以外は隠れる姿となつ

た。

胸元を隠せよ、そこ隠さなきゃ 駄目でしょうが。

「「めんなさいね、リンちゃん。 刺激の強い所を見せちゃったわね」  
ガウスの奥さん イリアさんが苦笑を浮かべながら言つ。  
相変わらずガウスと同年代といつのに20代にしか見えないんですけど。

艶々してる肌とスタイルが良すぎでしょう。

見た目は大人しめな方なのにキスシーンを見られても平然と対応するつて凄いよなあ。

これがデキル女ってやつかな？

「いえ、お久しぶりです。イリアさん。いきなり叫び声などを上げてしまつて申し訳ございませんでした」

「いいえ。それよりも聞いているわ。勇者の仲間になつたつて。大丈夫？」

「大丈夫と見栄を張りたいのですが流石に今回は少し出来そうにありません。すみません」

「いいのよ。むしろそれが普通だわ、いきなり勇者の仲間になんて大変すぎるもの」

ああ、ここに天使がいる。

こんな状況になつて初めて優しい言葉を受けた。

「ありがとうございます。イリアさん。…あ、そうそう知つてましたか？師匠つてこの前の夜にこつそりと何処かへ出かけてたんです。どうも女人の人と会つてゐる会つてゐるみたいで」

「なッ！？リン！？」

「…女の…人？それ本当なの、リンちゃん？」

「はい、女人と会う約束があるってバツチリ聞きましたから！」  
「ば…ッ！…ち、違うぞ、イリア！！た、確かに女だが娘だ！！娘、  
リリスとだ！！！」

「ふ…ふふ…。浮氣現場の言い訳に娘を使うなんて……最ッ低！」  
「！」

イリアさんの右拳がガウスの頬にクリーンヒット。

ガウスは首が変な方向に向いて倒れた。

私は根に持つタイプなんです。日頃の恨みを思い知りなさい。

ちなみにガウスが最後に叫んだリリスは言葉通りのガウスとイリアさん的一人娘。

イリアさん似のおつとり清楚系美人でガウスが溺愛する女人。  
嘘はついていませんよ。

「もう！しばらくは家へ帰つてこないで！！反省するまで許しませんから！リンちゃん、悪いけど私は帰ります！！」

イリアさんは力強く扉を開いて出て行った。

さて、私はどうしようか。ガウスはイリアさんの攻撃で氣絶中です  
し久しぶりに食堂へ行こう。

そういえばご飯を最近食べた記憶が無いぞ、おかしいな。

私は倒れたガウスを放置したまま部屋を出ると、食堂へ向かつた。  
食堂は値段が安く美味しいものばかり取り揃えてるのでいつも満員状態なのだが今は早朝でまだ人もまばらなはず！

案の定、食堂は人がガラガラで私は朝食セットを頼んだ。

朝食セットは小さめのパンに味の薄いスープの食事で僅か300円  
なのだ。

運ばれてきた固いパンを頬張りながら私はぼんやりと空を眺める。  
まだ少し薄明かりが照らす程度の空は世界遺産に登録してもいいような美しさを放つ。

紫色の雲に眩しい陽の「ラボレーションは最高だと思つ。

と当初は思つていたが今では見飽きてしまつた。どうも感動し続ける事は無理みたいだ。

「……もつ帰れないのかなあ」

最近、よく唇からこんな言葉が零れ落ちてしまう事がある。流石に半年間も帰れなければ帰る方法すら難しいとなると堪える。魔王の大切な物なんて書いてあつたけどそれが何かも分からぬ上にそう簡単に取れるものではないと思うからかな。まずあの本に書いてある事が正しいのかも分からぬし。考えるほど不安になつていくなあ、私の心。

「リンー！」

いきなり耳元で声が響く。  
私は驚いて椅子から転げ落ちた。  
な、何だ！何が起きた！？

「お前はいつになつたら訓練場に来るんだ、とつて時間過ぎてるんだが」

視界に入つたのは不機嫌そうに目を細める美形  
勇者。

「い、いきなり驚かさないでよー！心臓が止まるかと思つたじゃな  
い！」

途端、勇者の顔が驚きに変わつたかと思つと喜びの入り混じつたよ  
うな笑みに変えた。

何だその笑みは。  
まさか私、混乱してて忘れてた  
けど敬語使わずに素で話しかやった?  
うわ、最悪。

「ふーん。敬語が素ではない訳か。いい事を知つたな」  
「……確かに素ではありませんがこれが**基本状態**です」<sup>デフォルト</sup>  
「あ、戻つた」  
「黙れ、馬鹿！」  
「あ、また戻つた」  
「五月蠅いです！！」  
「おー。また敬語だ」  
「～～～～ツ！！」

その後も小一時間からかわれ続け、拳句の果てには食堂のねばねばや  
んから追い出されてしまいしぶしぶ訓練場に歩いていった。

第七話・魔族の話（後書き）

（その頃の魔族）

「女つて…あんなのか…？」

人間不信に陥りかけていました。

## 第八話・旅立ちとテスルーレット（前書き）

空氣を読まない連中＝魔族

## 第八話・旅立ちとデスルーレット

静寂の漂う訓練場。

訓練場に着いた私が目にしたものはただ驚きだけだった。

「……勇者のくせに地獄絵図を作るとは」

視界に映るのは勇者を中心と倒れる兵士の数々。

どうしたら 僅か30秒で兵士50人を倒せるんだよ。  
訓練場に着いた瞬間に突然襲い掛かってきた兵士を勇者は驚きもせず、近くに立てかけてあつた木刀で薙ぎ払つていつた。

その剣さばきは騎士団面々でも構わず圧倒し、襲う兵士に涼しい顔をして勇者は打ち倒した。

剣術をかじつてるのは聞いたがここまでとなると師範か家元かと疑いたくなる。

しかしこれだけの剣術に召喚魔法が入つてくるとなると勇者の体は大丈夫なんだろうか。

まあ、私が言えた事では無いけど流石に不安だ。

「つたくいきなり襲つてくるとか無いだろ?」

その割には凄い冷静に対処してましたね、貴方。

勇者が木刀に着いた返り血を振り払いながら私に近づいてくる。

返り血?あ、よく見たら何故か一人だけぼろぼろになつてゐる血まみれの兵士が。

他の兵士は打撲とかで終わつてゐるのにあの兵士だけ怪我だらけなんですけど。

何故だろ?うね。

「お疲れ様でした。流石は勇者の名に恥じぬ豪腕っぷりで」

「…確かに剣術を習つてゐるからこのぐらいはいけると踏んだんだがそれでも傷を1つ位は負うと思っていた。それなのに…何故か体の動きがしやすい…？体が思うように動きすぎる。これは異世界のオプションか何かなのか？」

「…多分そうだと思いますよ。言語も普通に出来てゐるでしょう？それは召喚陣に仕組まれた言語変換の魔法です」

「ふーん。やつぱり魔法は便利だな。俺は使えないのか？」

「分かりません。使えるとは思いますが魔力を感じられないんですね」

同じ異世界人だというのに驚いた点はたくさんあった。まずはその美貌と性格。

どつちも色々とあり得ないんだけどね、一番驚いたのが魔力を持つていなかつたこと。

少しコツを掴むと見習いであれど他人の魔力を感じ取る事ができる。すると魔力のある人……………というかこの世界の人は誰しも少なからず持つているんだけど魔力の波動を感じられる。

しかし勇者は魔力を持つていない。空っぽ。

けど対照的に私には魔力がそこそこある。ガウスにも匹敵するほどの量を持っているからもつと訓練すれば上級魔法も使えると言われた。

同じ世界の住人なのにどうしてこうも違うんだろうね。同じ世界の住人なはずなのに違う世界の住人みたい。

「残念だな、異世界と言えば魔法が憧れなのに！」

「…なんですか？」

分かるよ、その気持ち！私はこの世界に来て魔法が使えたときキャラが崩壊しそうなほどに喜んだもん！

やつぱり架空の存在であつた魔法には憧れを抱くよね。

「元の世界では魔法じゃなくて科学が発達してたからな。科学も魔法みたいなものだつたがやっぱり魔法は憧れるからな」

ふと唐突に勇者は純粹な笑みのみを顔に浮かべる。  
こんな顔も出来るんじやない。勇者。

「…使えるといいですね。頑張つて特訓すればきっと使えますよ!」

何の思惑も無い、只私も純粹な笑みを顔に浮かべて勇者に向けて言ひ。  
すると勇者は途端に顔を赤くさせて片手で顔を隠すように顔を覆いこんだ。  
え、どうした。

「えっと…どうかされましたか?」

勇者の近くに寄つて顔を覗き込む。

「…何でもないからとつあえず離れろ」  
「あ、はい。分かりました」  
「…離れすぎ」

勇者から3メートルほど離れると今度は手招き。

「どうゆうひと?」

「…とりあえずこれからどうするんですか。兵士を薙ぎ倒したりやつて訓練場にはもう用がありませんが」  
「皇帝に呼ばれてる。訓練終わったら来いって、仲間はもう来てる  
らしく」

「まさかそれって私も行かなきゃならないパターンですかね？」「ああ、来い」

冷え切つた私の右手を勇者が迷う事無く掴む。  
勇者の手は暖かくて私の右手も暖まつていく。  
何で冬なのに勇者の手が暖かいのは不思議だけど。

「…手…あつたかいですね」  
「お前が冷たすぎるだけだろ？」  
「いやあ、この寒さではこれが当たり前だと思つんですけど」  
「確かに冷え込むな」

廊下に入つても風が吹きぬけ構造なので外と寒さは全く変わらない。  
とゆうか勇者、手でこれだけあつたかいなら体はカイロ化してるん  
じゃないだろ？

何気に薄着なのに。

廊下で足を進めるたびに寒さが体を突き刺すから結構私の体は冷え  
込んでいる。

こうゆう時は皇帝に呼ばれて良かつたと思つてしまつ。

玉座の間には魔法士が数人構えて部屋を暖める。

おかげで玉座の間のみは城の中で唯一暖かい。

そう思いながら長く続く廊下を歩いていると一人の侍女に遭遇。  
私はその姿を見ると、思いつきり嫌な顔をした。  
侍女はこちらに気づいたようでこちらに寄ってきた。

「あら、お久しぶり。リンちゃん。相変わらずの平凡顔ね、見ても何  
の得にもならないわ」  
「じゃあ見ないで貰えますか？アンジューさん」

目の前に現れた嫌味つたらしい侍女は、キツイ薔薇の香りを放ち濃

すぎる化粧は見てて嫌悪感を抱く。

薔薇も適量つければいいのに、いつも会うたびに香水を2プッシュ押してくる上に歌舞伎みたいなメイク。

家が伯爵家である彼女は花嫁修業で侍女を務める皇女つきの侍女、アンジュ。

髪を紺色に染め、瞳はギラギラと茶色が鈍い光を放つ。

何かと私に構つて嫌味や言いがかりをつけてくるので苦手な人だ。

「ふん。私だつて見たくないわよ、貴方が視界に入るんでしょう。入つてこないで頂戴」

「被害妄想も大概にして下さい。見たら話しかけずに無視すれば済む話でしよう?」

「生意氣ー!どこの出か分からぬ平民のくせに!」

「平民と分かってるんですからどこの出か分からぬなんて付けられませんよ。花嫁修業よりも言語の勉強をなさつたらいかがですか?」

「……ツツ!生意氣だし失礼だわ!…ごめんあそばせ!…」

アンジュは激昂すると私の足を踏んで去つていった。

高いヒールでも履いているのかダメージがでかい。

しかも小指とか狙つているのか?

私は平静を装つて再び歩き出す。勇者は心底不思議そうな顔だった。これが平民と貴族の差別ですよ。

「さつきのは?」

「皇女つきの侍女です。貴族至上主義者なので何かと平民に文句を付けるんですよ」

「…よく腹が立たないな」

「貴族に逆らえば問答無用で打ち首ですから」

「…さつき思いつきり反論してたけど?」

「あれは正論を言つたままでです、それを理由に打ち首となるのは理

不尽といつものです」

「……なるほど」

「納得をいただけたようで何よりですがこれがこの国の現状です。同じ人でありながら生まれで人を判断する、最も醜い蛮行ですね」

「…………」

「……失礼、忘れてください。今のはただの平民の愚痴だと思つてください。それと着きました、玉座の間です」

大きく重厚な鉄の扉の前に立つのは2度目だろつが威圧感が凄すぎる。

鉄に威圧されるのもどうかと思つけど。

扉は独りでに開き、中から暖気が漏れてくる。

ふわりと包むような風が冬の寒さを払つてくれているよつで暖かい。

扉が開ききると、中に入り皇帝とのご対面。

中には案の定皇帝とハーレム軍団がいて、こちら側に視線を向けた。

「来たか、勇者。早速で悪いが深刻な知らせがある」

皇帝の瞳が細められ、その奥にある瞳に真剣さが揺らめく。

こんな皇帝の目をみるのは勇者召喚を行つと決意したとき以来だ。

思わず息を呑む。

「魔族が……動き始めた」

戦慄が背筋に走る。

今まで動かず攻防一体だつた魔族がついに動いた。

頭にあの城下で出会つた魔族の姿が浮かび上がる。

和平交渉するんじやなかつたのか、あの馬鹿魔族！

それとも諦めて本気で落としに来たのか？

どつちにしろ魔族が動いたのなら勇者が動かざるを余儀なくされた。

修行が始まつたばかりなのに出番速すぎでしょ。」

まあ、勇者なら修行が無くてもそこそこはいけると思うがそれでも魔族に対抗できるのか？

「…それは、私に動け…と言つ事ですね」

演技が入つて勇者の口調が変わる。

ただセツトの笑顔だけが無く、無表情である。

「動いて…くれるか？あまりにも早すぎる初陣に

皇帝の額から冷や汗がひと筋流れ。

「…私は、そのために呼ばれたはずです。皇帝に問われるまでもあります」

ドラマにでも出てきそうにないかっこよ過ぎる台詞で私の口から笑みが零れる。

自信満々っていう感じだけど策もあるのかな。

精々後衛で見守らせて貰います。

「……ありがとうございます、勇者。では準備をしてくれ、出立は正午からだ

！」

相変わらず早すぎる！！正午からって、あと3時間なんですか？？この人余裕もつて行動つて言葉知らないの…？誰か皇帝の頭にその言葉を叩き込んで…！リアルに…！

「なお3日後辺りに勇者の正式発表を予定していたが、時間が無いため省く。国民に知られず活動して貰う事となるため魔族のいる国

の辺境に辿り着くまでに村や町の恩賞は受けられないだらう。一応王族の証を渡しておく、困った事があれば大抵の事は回避できるだろうが基本王族は民に嫌われている。民には通用しないと考えてく  
れ

言つかけたよ、皇帝。嫌われてるって自覚はあつたんだ。

この皇帝自身が民に嫌われるわけではなくて嫌われてたのは前皇帝らしいんだよね。

美形だつたけど女遊びが悪くて酒癖もあつたらしくて独裁者っぽくて民に嫌われていたらしい。

クーデターを起にされて今の皇帝が皇位に着いたらしくて前皇帝の直子だつたから子供も独裁政治を行つんじゃないかと民は懸念している。

それとは裏腹に皇帝は政治能力に長けているし民のことを思つからいい人なんだけど。

「…分かりました。では準備を致します。集合は門の前にしてそのまま出立します」

「見送りが出来ないのは心苦しいが頑張つてくれ。財力と装備の方はこちから用意する」

「分かりました。では皆さん、3時間後に門の前にお願いします」

勇者が無表情から演技の笑顔に切り替えてハーレムを見ると、ハーレムは顔を赤らめて部屋から退室した。

私も一礼して部屋を退室しようとすると側に控えていた重臣に引き止められた。

「これを渡しておく。勇者の制御装置だ、暴走したら止めう

彼の言つた言葉に不思議なくらい何とも思わなかつた。

あ、そうなんだ。くらいにしか。

確かにあれだけ禁術魔法を詰め込んだら不安だよね。未知の魔法を試したわけだし。

「……何故私に」

「君以外勇者に惚れこんでるよつだからだ。この制御装置は勇者の体の動きを完全に止めることができる、もしあいつらが使ってみろ。勇者に貞操の危機が訪れるぞ」

「あ、そこは考えてあげてるんですね。分かりました、いいですよ」

「……頼んだ」

重臣が去ると私は受け取った制御装置を見つめた。

多分、これから勇者に渡す装備とかの中にこれの受信機があつて体の動きを止めるのかな。

腕輪のような形をするその制御装置は中央に紋様が刻まれていてそこに魔力を流せば起動する仕掛けのようだ。

私は右手首に嵌め込むと何も無かつたような顔で部屋を退室した。だってこれ、使う事があるなんて考えられないよ。

あの勇者が禁術ごとに負けるはずが無いと思うから。

私はそのまま城を出て門に向かった。

用意するものなんて無いし、私物なんていらないものばかりだしね。けどこれから旅をするんだから必要なものは揃えとかないとね。さびしい懷が一気にさびしさを通り越して冷え切りそうだ。

城下に着くと、暗い路地を通り曲がり角の突き当たりであまり知られていない寂びたお店に入つていく。

そこは旅人専用のお店。暗い路地奥にあるもんだから知る人ぞ知るというものだ。

ここのお店主は少し変わった人だが気が合つて付き合いを続けてい る。

「「んにちはー。ザクロさん、リンです」

「おや、リンちゃんじゃ ないかい。ほほ、何の『J用だい?』

鐘を鳴らして入った店内には埃を被った商品に煤だらけの床が広がり、カウンターには店主である老婆が佇む。

「旅に出る事になりました。必要な商品を下さー」

「おや? リンちゃん、旅に出るのかい? まあそー。ならウチの商品を買うんだね、いいよ。今回の御代は2000」「ただし! この私に勝つ事ができたらね!」

そう言つてザクロが取り出したのは6本のナイフ。

この内の1つには猛毒が塗られていてもし刺されば即お陀仏となる。何故こんなものを取り出したかといふと、これこそがザクロが変人認定された原因だからだ。

ザクロは良質な旅装備を破格の安さで提供してくれる代わりに自ら考案したゲームをクリアしなければ渡さないというゲーム好き。しかも決まってザクロの考案するゲームは死と隣り合わせの危険なゲーム、本人曰くスリルを求めてなのだそうだ。

けれど本当に死ぬわけではなくて死ねばザクロが生き返らせてくれるというも。それでも死ぬほどの痛みを味わう事となるが。人を生き返らすことなんて出来はしないが、あらかじめゲーム自体に手を打つてあるため心配は無用といつ。

「今日は名付けて『デスルーレット』一見たとおりこの6本のナイフの中には毒が塗られているよ。それを箱の中に入れて分からなくなる。それからこの穴からナイフを取り出していき、自分にさすのさーああ安心おし、ナイフはゴム製だから痛くないよ、ただ毒の塗られたナイフは正真正銘の鉄製だけどねーさあ…やるかい?」

「愚問ですね。やらないなんて言う訳ないでしょ?。それにこれを

「3回ほどやつて未だ無敗の私ですよ？」

「まつまつま、じゃあスタートだね。リンクちゃんお先にビーブイ？」

ザクロははこの中にナイフを入れると箱を差し出した。

私は箱の穴に手を入れて探る、これに勝てば本来10万はくだらない品が2000で手に入る。

手で探り、指で中のナイフを叩いてみたりしても全て金属音が響く。魔法で五感の反応を狂わせているらしい。

最初に触ったナイフを掴みだと箱から取り出して迷い無く自分の腹に突き刺す。

するとナイフは私の腹に刺さつていく　　事無くグーキリと曲がった。

「…勝ちですね。では次、ザクロねん」

「やつぱり初戦は成功かね。まあ、そつじゃないと面白く無いがね。そうでなきや…私が3回も負けたことが情けなくなつちまつ」

「今回も勝たせて貰いますね」

「ほほ。私がみすみす4回も華を持たせると思つかい…これで終わりだよ…えいさ　…」

結果　　良い勝負になる事無く初めの一回で毒付きを引き当

てたザクロの負けで勝負は決した。

「では私が勝ちましたので商品を包んでください」

「…ぐふッ。な、何故また…細工しておいたとこ…」

「…これから早く商品を包んでくださいよ。今度はもつと面白いゲー

ムを考察してから挑むんですね

ザクロは毒で体力が限界に近いのか息を切らしながら商品を包み始める。

ザクロが箱に細工をしていたのは毎回の事なので分かつていた。いつもはその細工を外してザクロを負けさせるのだが今回は逆に仕掛けを利用して自分は安全な物を選びザクロに毒つきを選ばせた。えげつない？馬鹿言わないで下さいよ。最初に仕掛けたのは向こうです。

ちなみに箱の仕掛けは極単純なもので音の違いです。

全て金属音に聞こえるように細工してありましたが私が金属の音を見分けられないはずありません。

僅かにトーンの高い金属音とゴム製の似せた鈍い金属音で私を騙す事なんて出来ませんよ。

ザクロは狡賢いから自分には五感遮断魔法を使わずに触つて確かめると思ったので魔法の上乗せをして金属をゴムに変えてゴムを金属に変えました。

普通は金属の方が数が多くなつてしまつたから疑いますけど一番安全なゴムに変わった金属を選ばざるを得ませんよね。

「包み終わったよ。旅、気をつけんんだね」

「ありがとうございます。さよなら、ザクロさん」

「怪我しないようにね」

重い荷物を抱えて私は城の門へと一足速く向かつた。



## 第八話・旅立ちとデスルーレット（後書き）

正体の掴めない勇者と主人公。

二人が近づく時に謎は明らかになる。

第九話・見習い、一人旅の決意（前書き）

旧友登場。

## 第九話・見習い、一人旅の決意

「リンちゃん……」

城の門へと続く石畳の上を重い荷物を持つて歩いている途中で唐突に私の名前が城下に響き渡る。

私は手に抱えた荷物越しに前を見る。

すると視界に入ったのは汗だくで息を切らす一人の少女。忘れる事なんてできないその顔は少し黒色に染まり、そばかすが鼻の頭に広がっている。

陽の光で脱色した薄い茶色の髪は私よりも少し濃い。向けられる黄色の瞳は何かを伝えたがってるような瞳だ。

私は荷物を石畳の上に降ろして向かい合い、微笑む。

「…どうしたの?トト」

敬語を使わずに普段の私の口調で話す。

トトは私が声を発すると急に目に涙を溢れさせる。

溢れた涙は目だけに收まりきらずに頬の上を滴り落ちる。

「……ここを出てくつて、本当…なの?」

トトの瞳は既に聞かなくても確信してる。私がここを出て行くという事を。

多分ザクロから聞いたんだろう。あの人はお喋り好きだから。

「…うん。行かなくちゃ駄目みたい」

私は緩みそうな涙腺を唇を強く噛む事で押さえつける。

トトはこちらに来て初めて友達になつてくれた人でありながら恩人もある。

そんな彼女と別れる事が辛くないわけがない。

「もう… 会えない？」

「そんな訳ないよ！」

「……………？」

アートの顔が涙で濡れて、声も掠れ始める。

1ヶ月かけて草原を抜けて体力が限界に近かった私に食事や水をくれたり街にいられるようにしてくれた。

そして私が異世界人である事を知っている唯一の友達。

孤独た二た私に光をくれた

帰りたいとは思ってはいたが彼女とは別れたくないといふ想いもあるた。

「…分からぬけど、手がかりは見つけたよ」

「…………そつか」

でも帰れるって分かつたわけじゃないよ！だから……！」

いしよ、リンちゃん、私の事心配してくれてありがと」

卷之三

異世界に帰る。一千種の事忘れがない。谷にいた。ルーラー。レンガ。

11

光る滴を零しながら走り去るトトの姿を止められずに私はその場で

固<sup>ル</sup>第<sup>九</sup>〇

馬鹿だ、私。

元の世界に帰る覚悟があつたならこの事も分かつてた筈なのに。  
後悔してる、自分がいる。

「トト」

トトの消えた裏路地を見つめてその場に立ち尽くす。  
これで良かったのかと心の中で葛藤するがそんな物は意味がない。  
けれど少なくともトトを傷つけてしまう理由にはならなかつた。  
最近では会つてなかつたけれどそれでもこちらに来てからは心の支  
えとなつてくれたし、私の一番の理解者だつた。

勇者に無理やり仲間にされたとはいえ、断りきれなかつたのは私だ  
し魔王が帰る方法を持つていると分かつてからは拒む事無く仲間に  
なる事を受け入れていた。

結局は自分の事しか考えてなかつた。

「…馬鹿みたい。勇者に…仲間になつてくれと言われたから仕方な  
くだとか言つて結局は自分の為じやない。トトの友人ぶつてつた  
つて結局は自分が帰る為にトトを利用してただけじやない」

今頃気づくなんて最悪としか言いようが無い。

私は、荷物を持って踵を返し広場へと向かつた。

こんな気持ちで勇者と旅に出るなんて気が乗らない。

広場に着くと、ベンチに腰を下ろし大きな大樹をボーッと見つめる。  
さわさわと風が舞い、私の髪を揺らす。

これから、どうしようか。

何食わぬ顔で勇者の言つた集合場所へ向かつて元の世界に帰る？そ  
れともバックれて城下で過ごしながら違う帰る方法を探す？  
それとも

私は広場の時計台を確認して門へと走り始めた。

今の時間はまだ11時。

誰も門の前になんていないだろ？

息を切らして門の前に辿り着くと、すっかり顔見知りな門番に話しかける。

「こんなにちは、門番さん。また会いましたね」

「おや、リンさん。こんなにちは。今日も城下へ？」

「……え、今日から旅に出るんです」

「あれ、そうなんですか。寂しくなるなあ」

「ふふ、それで少しをお願いがあるんです」

「何です？」

「……」に勇者一行が集まるはずなので勇者に言伝を

「……ん、いいよ。何でかは聞かない事にする、何かあつたらしい顔してるしね」

「ありがとうございます。では

」

その時風が葉を運び、頬を撫でる。

「……分かった。伝えておくよ、恐れ多いけどね」

「すみません。ではさよなら、門番さん」

「君に神の『』加護があらんことを

私は門番に言伝を頼むと街の依頼屋ギルドと呼ばれる所へ向かった。

依頼屋 通称ギルドと呼ばれ、その名の通り依頼を頼んだりこなしたりする場所である。

世界各地に存在し、冒険者や旅人は絶対に加入するこの世界では定番の店。

私がこの店に行く理由はただ一つ。

私は、『一人で旅をする』ことを決めた。

これなら勇者を利用しなくても済むし、そういう戒めを感じる必要

も無い。

初めからこれを選んでれば良かったんだ。  
出来ればトトにもう一度会って話をしたいけど、もつ正午まで一時  
間を切つた。  
勇者よりも先に旅に出ないとあの勇者のことだから色々と言われそ  
うだ。

「ギルド…か。縁の無いものだと思つていたけど」

ギルドは旅をするなら加入は欠かせない。

旅のためのサポートももらえるし、何より依頼をこなす事でお金を  
稼げる。

私は城下で一番目立つと思われるレンガ造りの建物の扉を開けた。

すると、中はお酒の匂いで充満している上に男の奇声や叫び声が上  
がっていた。

どうやら依頼の祝勝会でもやつてこらし、嫌な時に来てしまつ  
た。

けれどその喧騒もあつという間に静まる。  
多分場違いな女が入ってきたからだろ？

普通、女は旅をせず家で夫の帰りを待つという古いしきたりが根付  
いているらしくこうゆう所に来る女は大抵自殺に来るものだという。  
言つとくけど死ぬ気なんてないですよ。

私は集まる視線をものとせず業務全般を行うカウンターへと向  
かう。

（おい、何で女が…？）

（自殺か？まだわつけえのに何があつたんだ）

（ありやあ王宮の制服じゃねえか？大方良いとこのお嬢様が家出つ  
て事じやないか）

（ああ、ありそうだな。じゃあ無謀なお嬢様がこの世界で生き残らねえのに50000しかけるぜ！）

（俺は10000でいいぜー）

（ひゅう。面白そうだな）

言いたい放題の後ろはとりあえず放つて置いてこつ。

私はカウンターの受付嬢に加入希望を申し出る。

「加入希望ですね、分かりました。加入の際の注意事項の説明は御必要ですか？」

「お願いします」

「ギルドでは依頼がランク分けされ、簡単な仕事からE～Sとなります。初心者の方は初めはEランクとされてEランクの依頼しか受けませんが成績を上げていくことで高レベルの依頼を受けられるようになります。しかし途中で依頼を断念するときは成績が下がりますのでご注意を。なお、依頼遂行中に死亡された場合自己責任となりますのでご了承下さい。これらが主な注意事項です」

「分かりました。加入を希望します」

「承知しました、ではこちらのシートに記入事項をお書き下さい」

渡されたシートに名前と年齢だけを書く。

本当にこれだけでいいのかと思ったが、名前と年齢しか書く欄が無い。

私が書き終えたシートを返すと受付嬢は透明なカードを取り出した。ガラスみたいに透き通つて見当たる限り汚れが1つもない。

「こちらはギルドカードというものです。ギルドに居る際に必ず必要なものです。まずこちらで血を一滴垂らしてください」

血？

差し出されたのはマチ針。これを指に刺せと？  
数秒固まってゆっくりと人差し指に突き刺す。

自分で自分を傷つけるという事が無いから未知の事で怖いんですけど。

ふすりと指に針が突き刺さると、チクリとした痛みと共に血が一滴透明なカードの上に滴り落ちる。

すると透明なカードが淡く発光して文字が浮かび上がってくる。  
おお、これがファンタジー！

「文字が浮かび上がりましたか？」

「あ、はい。…ってあれ？ 貴方には…」

「はい、見えません。これは特殊な素材で作られていて血を持つご本人の許可が無ければ他人は見ることができん。ちなみに他人に見せたいときは願つていただければ」

「そうなんですか。…これで加入は済んだんですか？」

「はい、もう依頼をこなしてもらつても、旅に出て頂いても結構ですよ」

チラリとギルド内の時計を見てみると11時30分を超えていた。

のんびりしている暇はないらしい。

ザクロの所で買った商品の中には地図もあるし、一先ずは街の外に出よう。

勇者が出るのと反対の方向で、会うのは気まず過ぎる。

「旅に出ます。南の方向に街はありますか？」

「そちらなら、音楽都市『ルーメン』が。ちなみにここは首都『セトルブルク』と言われています。意外と皆さん、知らないんですよ。知つてましたか？」

「知りませんでした。ありがとうございます」

これで当面の目的は決まった。

魔王を倒せる情報を探しながら旅をして行こう。

そういうえば、他の街へ行くのは初めてだ。考えてみればこの世界の地理なんて魔物のいた草原かここぐらいだし。

そう考えると少しづくわくする旅だ。

私は重い荷物を抱えなおしてギルドを後にした。

後ろでバタリと扉が閉まる音を確認すると、手元にあるギルドカードを見てみた。

透明なカードに黒い文字が浮かび上がっていて、色々小さな文字で書いてある。

『名前：リン＝ヒュード（15）

ギルドランク：E

一つ名：

素性：不明

素性は確かに不明だけれどこれだと怪しげな感じに見える。ん？まだ何か裏に書いてある。

『異世界の氣を纏いし純粹なる影』

全く意味不明の文が。

異世界人だけどさ、影って何？

これでも学校では明るいキャラで通つてたわ！

家柄はそれほど明るくないけど。

私は、ギルドカードをポケットに突っ込むとザクロの所で買った旅用マントを取り出して羽織る。

黒色のマントで着心地はそれほど。

着てみるとあつといつ間に旅人が怪しげな不審者となつた。多分後者。そのまま早歩きで街の出口まで歩いていき、門番に話を通す。

「すみません。 ルーメンに行きたいんですけど」

「…身分証明書」

「ギルドカードでいけませんか?」

「ギルドカード? 駄目駄目、ほとんど何も書いて無いじゃない」

「じゃあ、どうすれば…」

「持つてないなら駄目だね。まだあんた子供だら、家帰りな

「家なんてありません」

「……あす、すまん…」

「いいですよ。それよりも通して貰えませんか?」

ねだるような聲音で言いながら、腰に手を回してナイフに手を回す。通して貰えないなら強行突破しかない、ごめんなさい。

「駄目だつて。いつも規則だからー。」

その瞬間、ナイフを抜いて門番の頭を狙つて振り下ろした。そして肉に刺さる変な感触が

無い?

「危ないな、お前。今の速度、俺にですら見えなかつたぞ」

ナイフが弾き飛ばされ、田の前にあるのは少し焼けた肌の色。少し田線を上げると、さらりとした長めの黒色の髪が田に入り、その奥にある顔は整い、紫色の瞳がぱちくりしている。

一番田にいったのが端整な顔立ちではなく、と、虎耳? みたいなモノが頭に生えていた。

田線を下げるればふわふわそうな縞模様の尻尾が浮いている。

「」の驚き要素満載の今、思つ「」とはただ一つ。

「萌え要素まで出してきやがって平凡に対する嫌味か！…美形があ  
……」

ありつたけの力を込めて目の前の男を叩いた。

美形に会うところくな目に遭わない。最近学んだ異世界教訓です。会  
つたら逃げるべし。

私は男の頬に赤い手形の跡をつけると、全速力で逃げた。  
重い荷物が凄く憎い。これのせいで速さと体力が急激に下がってい  
き、後ろを見てみるとさつきの男が凄い剣幕で追い掛けてきていた。  
女に殴られた事がショックだったのか、アイツ！？  
そこは見逃せよ馬鹿あ…！

スピードの出ない私は男にすぐに追いつかれ、捕まる。

「ハツ…何ツで…逃げる…？」

「追いかけられたら…普通逃げます…よー！」

「お前が…逃げる…からだろうが！」

「何なんですか…一体！少し殺つちやあうつて思つただけじゃない  
ですか！」

「いや、十分犯罪だからな。それは」

「はツ。犯罪なんてやってこそ…法は破るためにあるんです！」

「悪い事は言わん。今すぐ足を洗え、お前みたいな少年が人殺しな  
んてやるな」

今、「」いつ何て言つた？

「……少年？」

「ん？ああ、すまん。青年にしておいてやる。お前ぐらいいの年だと  
大人びたくなるよな」

訂正になつてませんよ。

「……です」

「は？」

「女だ、この節穴男がああああああ！」

男の両方の頬に綺麗な赤い手形がくつきりとついた。

## 第九話・見習い、一人旅の決意（後書き）

早くも勇者が物語から退場して違う新キャラ登場してしまいました。  
⋮。

（退場させる気はさらさらありませんが…）

逆ハー展開になりそうな予感です。

## 第十話・見廻の國內脱出（前編）

勇者は物語からしづらべ廻場して貰こます。  
「ねえよ、勇者。

## 第十話・見習いの国内脱出

「ほひ、食べる」

目の前に差し出されるキャンディを受け取ると、口の中に転がし始める。

甘い味がじんわりと口の中に広がり、気分が落ち着く。

「で、何があつたんだ。一体」

目の前の美形虎男は、どうも獣人と呼ばれる種族みたいで見た目どおり獣と人間の特徴を持つ種族らしい。

失礼発言をぶちかましたこの男の名前はリカルド＝ベラフオルトと言つらしく、首都にはある目的があつて来たらしい。

さつきから『らしい』しか言つてない。だって怪しさ満点じゃん。

失礼発言後、謝られたら色々と激昂してせきとめてたものが溢れ出して最終的に泣いてしまった失態を犯した私は、連れられるままに広場に来た。

泣いたというか目が潤つただけだが、泣きそうになってしまった。そして、今に至る。

「…色々と耐え切れない事が一度に起こつたので国外逃亡をしようとしてました」

ざつくり省いて事実を述べる。

こうゆう時はちゃんと話とかないと怪しまれる上にもつと絡まる。とりあえず時間が本当にやばいから逃げたい。するとリカルドは目を細めて怪訝そうな顔をして見せた。

「だからって門番を殺そつとするか？」

「切羽詰つてたんですよ。時間がもう無いので失礼しますー。」

黒いフードを被つたまま広場を出ようとした。

けど腕を掴まれて止められる。

最近ほんとに多い、止められる事。

他人の行動を制限するなよ。

「まだ話は終わってない。未遂とはいえ罪を犯そつとしたんだ、悪いが騎士団にちゃんとそこの所を教えてもらえ」

そう言つて城の門の方に足を進め始めるリカルド。もちろん私の腕を掴んだままで。

ちょっと待て！そつち勇者、勇者いるから！

それに騎士団つて！？補導されろつてことじょ！前科なんて持ちたく無いよ！

「ちょッ…放して…下さい…！」

「まだ見た所、お前は子供だ。軽く注意を受けるくらいで済ませて貰える」

「ツ…そういう問題じゃ無いんです…よ！」

「前科は付けて貰わないように俺からもお願いしてやる。就職が難しくなるだろうしな」

「そういう問題でもありませんッ…てば…」

「こら、大人しくしのー。」

腕を振りほどこうと暴れまくり、逃げようとするが出来ない。

いつもの私ならこんな事無駄だと分かつて何か策を考えるだろ？が今はそんな余裕が無い。

改めて思うと凄いな、いつもの私。

しかし暴れまくっていると掴む本人は対策をするもので、両腕を完全にホールド。

「こいつ腹立つわああ！！

「放してくださいってば、お願ひですから！騎士団へ行くならせめてもう少し時間を置いてからがいいんです！！」

「訳が分からん。いつ行つたつて変わらんだろ？」

「変わります！凄く変わりますから！！」

「はあ…何でそこまでして時間にこだわる？..」

「今、門の前は危険なんです！！」

「……つたく。俺もそこまで懇願されてまで連れてくつてのは気が引けるから今はやめて置いてやる。だがちゃんと行くんだよな？」

「はい！勿論です！」

「…分かつた、じゃあどうかで暇を潰すぞ」

「あ、ありがとうございます…」

リカルドが体の向きを変えたのに安堵して、全身の力を抜く。こ、これが九死に一生を得たつて事かな？大げさだけど。

「どこ行く？」

「…出来れば裏路地で」

「……人気の無い場所で俺を殺す気ではないよな？」

「ああ、どうでしょ？」

「……まじか？」

「嘘です。：人目につきたくないんですよ」

「わ、分かつた。なら…行くか」

国外に出られなかつたのは計算外だつたが別に勇者が出てくまで街にいればいいだけだ。

どうせ仲間の1人が来なくとも出立してくれるだろう。

そこまで律儀な男ではなさそうだし。

連れて行かれるままに裏路地へ行くと、『気にせずにその場に座り込む。

フードを被つて『いるから』これなら誰も私と『気づかない』だろ？。

そんな私を怪訝そうな顔で見つめる男もいるが。

「何してるんだ？」

「…座つてるんですよ。安心してください、ちゃんと騎士団には行

きますから。…行つて良いですよ、何か用事があるんでしょ？？」

「ある」とには…あるが、用事つて程でも無いからな…」

するとリカルドは隣に座り込み始める。

あ～あ、ヤバイこれ。首を突っ込まれるタイプのフラグだ。

厄介事は『』めん、何としてでもここから去らせないと。

「…何してるんですか？」

「ん～いや、何となく…？」

「聞かれても知りませんよ。早く立ち去つたらいかがですか？」

「…お前、放つて置くと何かしでかしそうな予感がするんだよな

「余計なお世話です。いいから放つて置いてください」

「…そうだな、フード取つたら立ち去つてやる

「はあ？」

「まだ素顔見せて貰つてないだろ。折角知り合つたんだから顔くら  
い見せろ」

「はは、平凡顔を見て得すると思えませんよ。それとも貴方は平凡  
を見て嘲笑いたいタイプですか？」

「は？何言つてんだ、良いから取れ」

嫌な笑いを浮かべながらフードを取りつと迫るリカルドに殺意を覚  
えたのは無理が無い。

「これ以上絡まないためにもフードを取つた方が良いのだろうが、従うのが何となく癪に触る。

「嫌です！ 良いからやつたと立ち去つてくださいよー。これ以上絡まないで下さい！」

「悪いが俺は天邪鬼でな。やるなといわれる事はやるタイプだ」「最低ですね！」

「何とも言え、良いから取れ」

「触るな馬鹿、とりあえず死んでくださいその耳と尻尾を垂つてか」

「…やつぱ言つた、お前の言葉つて心の急所に寸分狂わず刺さる」「言われたくなれば消えてください」

リカルドは私のフードを掴んで取つたとするが私はそれを押さえ込み一進一退の攻防。

それが続き、うごめりしてきた私は半ばヤケになつてフードを思いつき剥ぎ取る。

「…」それで、満足ですか？

視界に流れ込む茶色の髪が腰の高さにまで滑り落ち、今まで視界を覆つていた影が消え去る。

目の前のリカルドはいきなり攻防を止めた私に驚いているのか余りの平凡顔に驚いているのか目を見開いている。

しかし改めてみてみるとリカルドは本当に平凡とかけ離れている顔をしている。

それはリカルドに限らず、勇者もあの魔族もそうだがこちらの世界に来てからはむしろ平凡に会つことが少ない。

勇者は俺様系のクール美男子での魔族は天然で静けさを漂わせる美青年。

リカルドは虎耳と尻尾を受けたもつふもふな要素入りの野性味を感じさせる風貌に引き締まつた体躯。

胸元の開いた服に少し緩みを持つズボンが男の魅力を引き出している氣がする。

それだというのに平凡顔を見て喜ぶ残念なイケメンだつたとは。フードを取つてしばらくの静けさが訪れ、そろそろいたまれなくなつてきた。

「あの、何とか言つてください。何を期待していたのかは分かりませんが無言つて一番傷つくんですよ」

やつぱりとつカルドはよつやく言葉を紡ぎ始めた。

「す、すまん。いや、やつぱ…女だつたんだな…と」「ふふ、殺されたいんですか？」  
「いや、謝る。謝るからその手に持つ石を置いてくれ」「冗談ですつて。全くもつ…冗談の通じない人ですね」「現実に殺そうとした場面を見てるからな」「ですからあれば急いでたんです。それに門番なんて職です、死の覚悟くらい持つてやつて頂かないと」「そこまで重くない仕事だつたと思つんだが?」「そうでしたつけ?」「そうでしたつけ?」「断言する」

リカルドは呆れたように溜め息をつくと唐突に話題を切り替えてきた。

「…1つ聞きたいんだが…」

「はい?」

「お前つて、城の人間で間違いないよな?」

「…どこでそれを」

「悪いがこうして会つたのは偶然じゃ無いんだ。城から出でてきたお前を付けていた」

「…なるほど? 何故ですか」

「……俺がここに来たのは勇者に会つたためなんだ」

その瞬間、動搖から心臓の動悸が早まる。

まさか城から出ても勇者の名がついてくるとは。

「極秘に勇者の召喚を耳にし、確認しに来た。本物なら言つて伝えたい事がある。お前が勇者を知つてゐるなら会わせて欲しい」

「…今つて何時でしようか?」

「いや、話を逸らさず聞いてくれ。で、どうなんだ?」

「何時が答えてくれたら良いですよ」

「…もうすぐ12時を回る」

「なら城門へ向かつてください。勇者に会えます」

「…は!? 本当か!?!」

「大声出さなくとも本当です。早くしないと勇者に会えなくなつてしましますよ」

「な、何でそんな事を知つてる?」

「極秘情報です。さあ、早く向かつてください。ぐずぐずしてると

勇者に逃げられますよ」

「あ、ああ! 分かった、ありがとな。あ、後で礼をするからいいで待つてろ!」

「はいはい」

リカルドが物凄い勢いで門の方へ駆けていくと、またフードを被り直して座り込んだ。

ここで国外に出てもいいが迂闊には動きたくない。万が一の事を考えて。

だから、正午が完全に過ぎるまではこゝにこゝ。

そう考えて3分くらいじつとしていた。

けど、何もしないというのも余りに暇だから、ジリせなうギルドへ行つて簡単な仕事でもこなそう。

うろつろ動き回らなければきっと大丈夫。

僅か3分で『動かない』ということを放棄した。

私は腰を上げて荷物を再び持つ。

それにしても荷物が邪魔だな。まだ開封してなかつたや。

大きな紙袋から旅一式セットをどさどさと出す。

出てきたのは様々なもので、ある一枚の紙切れまで出てきた。手に取ると書いてあつたのはこれらの説明。

『大容量異次元ポーチ：何でも入るよ！

調理セット：これは欠かせないね！

黒マント：これを被れば旅人気分

武器セット：ザクロ<sup>ジ</sup>用達、短剣10本・針石2個

携帯食料：干し肉

煙球：リンちゃん用に作つといたよ』

最後の文字が手書きで書かれている。

これらは日本人としては少ないような気もするけどしようがないよね。

ひとまずポーチを腰に巻きつけ、調理セットや携帯食料、煙球を放り込む。

あり得ない容量がすっぽりとポーチの中に収まり、思わず感嘆する。

最後に武器セットをマントの下に忍ばせる。

私の武器はこちらに来てからはすっかり変わり、一番使いやすい短剣を使用している。

そしてたまに使うのがこの針石。

軽く叩いたりすると針状に割れ、硬度は鉄並なので武器として用い

れる。

所詮は針だから本当にたまにだが。

私は大きかつた荷物がすっかり無くなりスッキリしたので何か安堵する。

それから裏路地を出て、ギルドへ向かおうとする時だつた。

突然、黄色い声が城下に響き渡つたのだ。

鼓膜が破れるかと思つほどの女性達の甲高い声にフードの上から耳を押さえつける。

一体、何事かと思い城下を見渡そつとすると後ろから手を急に引かれた。

「く…？」

「すまん…まさか」こんな事になるとは思つてなかつた…逃げるぞ！」

後ろを振り返るとリカルドが荒く息をしながら、急に走り始めた。本当に何が起きてるの！？

「ちよ、リカルドさん…何が…！」

「後で説明する…とりあえず今は逃げたほうがお前にとつては良さそうだ…！」

「ツ…まさか…勇者ですか！？」

「そのまさか！お前、あいつに何した！」

「何もしてないと言えれば嘘になりますが大事になるような事はしてません！」

「お前の言つて分は後で聞く！今は逃げないとヤバイだろ…」

リカルドが一旦止まり、私を抱え上げる。

「ふえツ…」

うわーい、憧れのお姫様抱っこだー。

の次にいきなりエレベーターが急に上に上がっていくような気持ち悪い感覚が体を襲う。

リカルドはあり得ないほどの高さまで跳躍し、民家の屋根に上がる。こ、これが獣人…？

「悪いがこのまま行かせてもらつぞー！」

横抱きにされたまま、民家の屋根をリカルドは駆け渡り、街の出口近くにまで来るとまた止まつた。

そして、民家の屋根から見ても軽く20メートルは超えてそうな門を見てから私に笑いかける。

「しつかり捕まつてうよ」

ま、まさか…！

ぐつと腰をかがめ、次の瞬間リカルドはヒュオッという風の音と共に門よりも高い空に体が浮く。

跳躍の最高点で体が空に留まり、周りは一面青い空のみが広がる。先には緑茂る森や湖が見え、日本では絶対に見られないような光景が目の前に映りこむ。

普通なら感嘆する程の美景に今は恐怖しかない。

冷たい空気が肌に刺さり、下からは強風が吹き上げる。

そこから一気にフリー・フォール。

耳には風斬り音のみが響き、落ちて行く。

下手な高層ビルから飛び降りるよりも怖いと思うダービングに目を瞑り、リカルドの首にしがみつく。

それが数秒ほど続いた後に突如訪れた衝撃が体を走り抜ける。

地面が抉れるような轟音と共に訪れたのは衝撃と浮遊感が消えた感

覚。

「もう田を開けていいぞ」

リカルドの声がすぐ側で聞こえ、ゆっくりと開けると、視界に映つたのはリカルドの整つた顔。

それから逃げるよつよつにして辺りを見回すと、地面がある。それだけだった。

ゆっくりと横抱きから解放され、思わず腰が抜けてその場に座り込む。

こ、怖かった。というかいきなりの事過ぎて何が起きてるのか全く分からなかつた。

「いきなりで驚いただろ、悪かったな。だが流石にもたもたしてる余裕は無さそうだったからな」

「い、一体本当に…何なの…？」

「話すのは後つて言つただろ、今もこんな風に余裕を持つ暇なんて無いぞ。…こつちはルーメン方面だから、このままルーメンへ向かう。そこに着いたら話す。いいな？」

「わ、分かった…」

分からぬけど頷く。

真剣そうな瞳を向けられたら逆らいにくいです。

空中時に取れたフードをリカルドに被せられ、視界にまた影が入り込む。

リカルドに手を繋がれると、音楽都市『ルーメン』の方向へと走り出した。



## 第十話・見習いの国内脱出（後書き）

状況が分からなまま『ルーメン』に向かう主人公。

ご感想お待ちしております！

## 第十一話・見習いと傭兵（前書き）

（前回のあらすじ）  
首都を訳の分からないまま出てきた主人公はそのまま音楽都市『ル  
ーメン』へと向かう。

## 第十一話・見習いと傭兵

中央に聳え立つ細長い建物を中心に様々な様式だが明るい色の装飾が施された建物が並び、絶え間なく音楽が流れている。

見渡す限り、吟遊詩人や音楽隊が街に溢れ音楽を奏でている。

心を穏やかにさせるようなどかな光景、それがこの音楽都市『ルーメン』だった。

そこに辿り着いた私とリカルドは、息を切らしながら奏でられる音楽を聴いていた。

私は引かれるままに走り、すっかり熱を持つてしまつた体を冷やすために黒マントを脱いでいる。

下は王城所属の制服のままだつたので少し視線を感じる。

王城仕事は王族が嫌われているためかなり嫌われているのでやや視線が冷たい。

私はある程度体が冷めてくると黒マントを再び羽織るがフードだけは外しておく。

ある程度落ち着いたためリカルドが口を開けた。

「『ルーメン』か。来るのは初めてだな」

「そうなんですか、私もです」

いかにも音楽を表したような色合いが辺りに溢れている。淡いピンクを主として黄色や黄緑なども混じっている。

「けど今は普通に観光したいという気持ちが起きませんね、とりあえず！何がどうしてこうなつたんですか！？」

「俺が聞きたいんだよ！何でこうなつた！？」

「知りませんよ！」

「俺も知るか！」

突然追われるように出でてきた首都での出来事の把握が出来ないまま、ルーメンに来てしまったので心がどうしても落ち着けられない。

ああ！私らしくない！！

こんな事慣れっこだったはずなのに！状況が分からぬなんて日常茶飯事だつたのに！

いつの間にか状況が分かるものになってしまっている。

「……とりあえず話し合いしませんか？」

「… そうするか、宿にでも入ろう。勇者の事を公で話してたら捕まりそうだ」

「どうしてですか？」

「勇者なんてまだ正式には発表されていないんだ、それを話してたら怪しまれる」

「…… そうですね」

もう、本当に馬鹿だ。頭を捻ればそんな事分かりきつてる事実じゃない。

この半年があまりに平和過ぎたのか危険に対しての警戒が疎かになつてゐる。

リカルドもこの街が初めてだつたと言つていたのに迷わず宿へと向かつていく。

「はつきり言いましょうか、リカルドって怪しきります！」

城の人間である私をつけてまでの勇者に面会したかつた理由に獣人といえども20メートルを軽く越す跳躍力。

ガウスのスバルタでこの世界で使われる全ての言語と種族の事を頭に叩き込まれたために覚えている。

獣人は人間よりも身体能力は高いものの、20メートルなんて軽く

跳べないしあんな速さで駆ける事も無理だ。

ある一つ

その一つの可能性はかなり信じたくないのでも認識を拒否します。

リカルドを怪訝な顔で見つめていると、その視線に気づいたリカルドは私の頭をくしゃりと撫でた。

子ども扱いですか。

「着いたぞ。おー……あーえつと……」

「名前ですか？ そう言えば私はまだ名乗つていませんでしたね。リンです、リン＝ペラード」

「……はあー、やっぱりかよ」

リカルドは私の名前を聞いた途端、溜め息をつく。  
え、失礼じゃないですか？

「…気にすんな。あと俺の事はリードでいい。リカルドってなんか長くて面倒臭いだろ」

「別にそう感じませんがそつぱつとしたらリードさんと呼びます」

「いやだからリードでいい」

「…分かりましたよ、リード」

「出来れば敬語も止めて貰いたいんだがな。他人行儀つて好きじゃない」

「そんな事を言われても困りますよ。これが私の普通ですか？」

「だけど普通であつて素じやないんだろう？」

「まあ… そうですが何故それを…」

「ここに来るまでの間、一度だけ敬語が取れてたからな

「はー？ 何処で…！」

「門を抜けた後」

「あ、あり得ない…」

確かに大ジャンプの後で放心していたが敬語が抜けていたとは。とゆうかよくそれに気づいたな、こいつ。

「で、敬語外すか？」

「…外さないと言つたら？」

「首都に連れ戻す」

「そこまでしますか！？」

「冗談だがそれに近い事はしてやる」

「そこまで敬語が嫌いですか？」

「ああ、大つ嫌いだな。嫌な思い出しかない」

顔を険しくさせていうので少し怖いと感じてしまった。

まあ、外してどうかするものじゃないしいんだけど何故かどんどん決心が崩れてく。

敬語を使ってた理由つてあまり世界に未練を残さないために距離を残しておきたかったんだよね。

もしも離れたくないと思つような理由ができる事を恐れて。そんなの作れるわけないけど元の世界に帰りたくないといつ甘えは作りたくないかった。

戻りたいというのは本音だけど戻りたくないといつ気持ちが無いといえば嘘になつてしまつ。正直ご免だと思つ出来事も向こうでは多々あつたしね。

そんな事を考えて使い慣れてなかつた敬語を使い始めてたわけだけどもう帰れるとわかつたなら大丈夫、帰れるよ。

最後にトトに一日会いたいけど。

「…分かつた、もう使う理由は無いに等しくなつた訳だし外す」

「ん、よし。じゃあ宿入るか」

リドが中に入つていいくのに着いていき、宿のチェックインを済ます。

大部屋か小部屋か聞かれて迷い無く大部屋と一人して答えた受付のおばちゃんが少し引いていた。

別にやましい事がある訳では無いし、大部屋の方が話し合いもできる上に料金も安い。当然でしょ？

「じゃあまず確認な」

「うん？」

「お前はリン＝ヒュード。勇者の仲間の魔法士でいいんだよな」

「正確には魔法士見習いだよ」

「で、今日が出立の日。だな？」

「そうだよ」

「こつからが質問だ。なんでそれにも関わらず国外逃亡を図るのをしてた？」

「勇者の仲間になりたくなかったの。元々嫌々だつたし」

「…勇者の仲間って名誉な事じゃないのか？」

「よく考えてみて、勇者って結局は都合のいい捨て駒。死んでも国は痛くも痒くも無い、また召喚すれば良いだけの存在だよ」

「……まあ、そうゆう考えも無い事は無いが…」

「その考えしかないよ。召喚される前に勇者マニアカルなんでものが配られたらくらいだし」

「…まじか」

「うん。勇者の取り入り方や操り方がびつしり。面白こくらこく」

「よくやるもんだな、首都の奴らも」

「勇者も馬鹿そ�では無かつたから氣づいてるとは思つうんだけど…」

「勇者が馬鹿だつたら世界なんか救えないだろ」

「お人好し馬鹿つて事の方。そうゆうのつて絶対氣づかない鈍感なのが相場なの」

「…そ、そこまで言つか」

「だつて本当のことだもん、お人好しは動物を殺したりして心を一々痛めそうだし周りのハーレムの気持ちにも気づかないで良い様に

振り回す。そうゆうのつて大抵は馬鹿

「し…辛うつだな」

リドが若干引き際に顔を歪める。

地球の物語で語られる勇者は正義感たっぷりのお人好し勇者。敵に人質を捕られたら絶対に反撃できない。

あの勇者様は人質を捕られても迷い無く攻撃しそうだけど…。

「…つて話が逸れた。それで？一体首都で何があつたの？」

「あ、ああ。実はあの後、無事勇者と会つことが出来たんだが

」

リドが気まずそうに首都での出来事を話し出す。

語り出された内容は、少し驚くものだつた。

リドが勇者に会いに行くと、4人の美人に囮まれた勇者が居たそつだが物凄く近寄りがたいオーラを出していたらしく話し掛けづらかつたらしい。

けど意を決して近づき、私から勇者の事を教えてもらつて話したいことがあると伝えた瞬間勇者が凄い剣幕で私の事をリドに問い合わせてきたみたい。

まあ状況も分からぬリドは当然混乱し、勇者をとりあえず宥めようとした。

しかし勇者が腰に刺した剣を抜いて迫ってきたため、逃げ出した。その際に勇者が私の事を叫んでいたため、ヤバイと感じたリドは私も連れて首都脱出と言うわけだそうだ。

うん、勇者が分からぬ。

たかが仲間が1人減つたくらいで取り乱す？何んだけ仲間に固執してるんですか。

むしろ足手纏いな私にまで変な期待をありがとうございます。

とゆうカリドにはとにかく感謝。首都から脱出させてくれてありが

とい。

「…いや、まじで怖かった。勇者のくせにめりひや黒いオーラを出してた」

リドが顔を曇らせる。

見てないけどそんな勇者と会わずに済んで良かった。

「勇者って正義の代名詞で少なくとも悪の代名詞では無かったとは思うんだけど…」

「そうだな、もうあれが魔王でいいんじゃないからって思つたからな」「いや、呼び出した勇者が魔王とかだったら本末転倒でしょ」

「けど勇者っぽいオーラなんて微塵も放つてなかつたぞ」

「あ、それは同感かな。なんかもう全体的に黒いもんね」

「勇者というよりかは魔王だな」

リドが感慨深そうに頷きながら話す。

いやどれだけ怖かったのさ、勇者。

「…それで、勇者から逃げて来たまではいいけどこれからどうするの？」

「ん？俺は勇者に結局伝える事を伝えられなかつたから勇者に一度会わないとな」

「私は情報都市『キーパス』に行かないと」

「情報都市？首都の情報量の数百倍もの情報が保管されてるってい

う？」

「うん、首都で欲しい情報が見つからなかつたから情報都市と呼ばれるほどこの街にならあるかなって」

セーブル大公国には、いくつかの街が点在する。

首都『セトルブルク』を中心とした音楽都市『ルーメン』に情報都市『キーパス』の三大都市に加えて小さな町や村が存在する。文化に富んだ国だからこそその三大都市だ。

「何を調べてるのは知らないが見つかると良いな」

「ありがと。それでさ、キーパスに行くまでに旅資金溜めないといけないんだよね。この街のギルドってどー?」

「お前、ギルドに入ってるのか!?」

「うん、旅人志望だし」

「女のくせによく入るなんて気になつたな…」

「そこ、差別は禁止。女であろうと利用できるものは利用すべきだよ」

「であるうつとギルドは危険だろ。今すぐ解約して来い」

「リドなら分かるでしょ。旅に危険は付き物だつて」

「確かに分かるっちゃあ分かるが、それは男の場合の話だ」

「男は危険を求めて女は危険を求めちゃいけないなんて決まってないよ」

「お前の言い分も最もだがこれは暗黙の了解つづ一か駄目つて決まつてるんだ」

「だつたらそんな決まりは破るまで」

「……はあ。口論で勝てる気がしねえ」

女の取り得の1つが口だよ?当たり前じゃない。

「それで、ギルドはどこ?」

「教えるよ。ここには危険な依頼は比較的少ないしな、全部音楽関係が多い」

「詳しいね。この街初めてつて言つてたのに

「…疑つてるか。まあ、当たり前だな」

「うん、けどいいよ。別に興味ないし」

「助かる。」いつも諸々事情があつてな

「いつかは聞くかもね」

「…お前は人を落とすのが上手いな」

「それ褒め言葉」

にんまり笑つて見せるとリドが呆れたように溜め息をつく。  
溜め息はついた数だけ幸せが逃げるんだぞー。

「ギルドはこの街の北西にある」

「ありがと。私は当面お金稼ぎかー。リドは勇者に会って行くって  
言つながら、いち反対方向だけどいいの?」

「…も、もう少し時間を置く事にする」

「そこまで怖かったの…、勇者?」

「何というか…絶対に避けられない大災害に会いに行くよつなもの  
だからな?あれ」

「…まあ、『愁傷サマ?』

「助けてくれる気は全く無いんだな」

「関係ないからね。私は厄介事には関わらないタイプだから」

「ああ、そうゆうタイプみたいだな」

リドの隠す素性に興味は無くはないけど知りたいと思わない。

知つてゐる事は獣人で勇者への伝言を持つてゐるって事だけ。

後分かるのは腕が立ちそうといつ事だろうか。

武器なんかは見当たらないけど、手を繋いだときに手のひらの固さ  
が剣を持つ手だつた。  
おそらくは…大剣?<sup>クレイモア</sup>

「ねえ、リド。聞きたいんだけど」

「何だ?」

「リドつてさ、もしかして…傭兵?」

この世界で大剣を使うのは傭兵のような世界を又に駆ける戦争屋。軍隊では効率が悪くて使わないし、旅人でも異様に目立つ大剣を使うものはない。

傭兵はこの世界では結構毛嫌いされている。

金さえ払えば簡単に人を騙す非人道的行為を行う奴等だと。リドの顔が驚きに染まる。

「なんで…気づいた？」

「あ、本当だつたんだ。手だよ、手」

「…手？」

リドが自分の手を見て不思議そうに首を傾げる。

「傭兵の武器に限られる大剣を持つ手の固さだつた」

「…お前は<sup>アナライザ</sup>分析者か？」

「残念。魔法士見習いだよ」

「そういえばそう言つていたな。で、確かに俺は傭兵だ。騎士団に突き出すか？」

「何でさ？」

「は？ 何でつて…俺は…傭兵だからな」

「悪い事をしたの？」

「いや…してないと言えは、嘘になるが食つてくためだし…」

「人は生きるためにには破らなければならないルールもある。仕方ない事もあるでしょ」

「破つてはいけないルール、殺人。俺は人を殺してる、犯罪者だ」

「じゃあ軍隊も犯罪者だね」

「そ、それは…違う…だろ」

「どこが？ 違いなんてほとんど無いよ。あるとすれば軍隊は主にのみ忠実な戦争屋、傭兵はお金に忠実な戦争屋ってことでしょう」

「確かにそうだが……」

「だから私は選ぶなら傭兵が良い」

「…は？」

私はずっと考えてた事がある。

一人旅を決意したとき、この世界の事を知らない人間がどうまともな情報を手に入れるのか。

書物で大まかな情報を知つていても詳しくは知らないこの世界。騙される事がないなんて言いきれない。

けど私は世界を回る事を決めた。

だから私はこの世界を知る『コンダクター案内人』が欲しい。

世界を回り、世界を知る者が。

「リド」

巻き込んだらやうかもしねない。

私自身厄介事は嫌いだから悪い事だと思つてる。

けど君が良い。

だから…。

「私に、雇われてください」

私を元の世界に案内して下さい。



## 第十一話・見習いと魔兵（後書き）

いくつか謎の単語が出て来てしまいましたが説明を次回に回をせて  
もらいます。

第十一話・見習いはギルドへ（前書き）

「感想お待ちしております。」

## 第十一話・見面にはギルドへ

「…それは、依頼か?」

しばらくの静寂の後、リドの口から言葉が放たれる。  
若干声のトーンが落ち、真剣さを醸す。

「うん。……とこつてもお金は後払いになりそうかな~」

貯金ほんとにピンチなんです。

ギルドで稼ぎつつ渡していくパターンでいかがですか?

「…金さえあれば傭兵は誰であろうが雇われる。勿論俺も金さえ貰えるならお前に雇われてやつても良い。だがその前に聞きたいことがある」

あらり、やっぱり疑われるかな。

まあ、こんな少女が傭兵雇うなんて聞いた事無いもんね。

傭兵は毛嫌いされている上に雇い料が高いからどこかの貴族かお偉いさんくらいしか雇われない。

それが小娘に雇われるっていうんだから驚くし疑われるよね。

何か秘密があるって。

「何故俺のような者を雇つてまで世界の情報を得よつとする?」

リドの紫色に輝く瞳が細められる。

別にそんな風な眼で見なくとも答えるって。

『元の世界に帰りたいから』

その瞬間、リドの顔が驚きに染まる。

理由は私の話す言語が変わったからだと思ひ。

ちゃんと理由は話した、「日本語」でだけね。

悪いけど教えられないんだ。話したりしたら厄介事呼びそうだし。

「い、今……言葉は……？」

「私の故郷の言語だよ、一応理由は言つたからね」

「はー? いや、するいだろ!」

「あらあら、傭兵ともあらう方が」この世界の言語やり把握できでないんですか?」

「何だそのキャラ?…」

私のキャラは自由自在に変えられるように訓練されてるんですよー。

だからぶつちやけ自分の本当のキャラを見失つてます。

今の自分を本当の自分にしたいけどね。

「それで、リド。雇われてくれますか?」

「……分かった」

リドの首が縦に振られ、顔がついに綻ぶ。

これで世界の旅は安心かな。懐はどんどん寂しくなりそうだな。

「ありがと。これからよろしくお願いします

「よろしく、雇い主」

さて、旅の道連れもゲットした事しお金を稼ぐためにギルドに行きますか。

「じゅりゅうとギルド行ってくる

「は…？ 今からか？」

「今以外にいつ行くの？ ほら、雇われたからにはおとなしく雇い主に従いなさい！」

「ちょ…俺もう寝たいんだが…言ひとくけど今日は精神的にも肉体的にも追い込まれてるからな！」

「傭兵だったら気力で頑張れ！」

「無茶振りにも程があるだろ？ うが！」

リドの袖を掴んで下まで引っ張つてくと再び宿屋のおばちゃんに怪訝そうな眼で見つめられた。

いや、何ですか…。

後から知つた話で宿屋のおばちゃんは昔恋人にぶつた切れ、それ以来カップルに腹が立つようになつたらしい。

ギルドの方向に向かい続けてやつとギルドと看板のぶら下る大きな建物が見つかった。

ここも周りの建物と同様、明るい色彩で覆われている。グラデーションのかかつた扉を引き開けて中に入ると、今まで騒いでいたであろう他のギルド加入者が一斉にこちらを見た。ただし、リドにだ。

（おい、あれリカルド＝ベラフオルトじゃないか？）

（まじか！？あの『破壊の黒虎』って呼ばれてる…隣の小娘は誰だ？）

（俺が知るか。大方…雇い主か？）

（馬鹿いうなよ、あんな小娘が傭兵を雇えるかよ）

（どつかの貴族だろ）

（ああ、納得）

おお、一応雇い主に見えるらしくて安心した。

リドも話を聞くからに有名といつ事は腕が立つんだな。

…お金大丈夫か、私。

周りのざわめきに聞き耳を立てつつもカウンターに向かうとリドが前に出る。

すると受付嬢は途端に顔を赤らめる。

…受付嬢を誑かすんじゃありません、美形めが。

「すまないが音楽関係の依頼を一通り見せてくれ

「ひや、ひやーーー、こちらですうーーー」

囁みまくる受付嬢が出したのは数枚の紙。  
どれどれ…。

『題：笛吹きが怪我をした！代わりにやつてくれ！！

依頼人：音楽隊隊長、トム

料金：3000円』

『題：僕には実力が無いみたい…。誰かお手本を見せて

依頼人：歌い手、トム

料金：4000円』

『題：音楽についての素晴らしいことを語つてあげるから今すぐ来なさい！

依頼人：音楽評論家、トム

料金：3000円』

…全部依頼人同じ？

やばい、正直関わりたくない人かも…。

私は手に取った3枚の紙を置いて、受付嬢に言った。

「「Jのギルドで一番高額の依頼を見せて！」

言つた瞬間、ギルドの空気がピシリと凍りつく。

「……い、一番…高額…？」

「そう！見せて！」

「…ちよーお前何言つてるー？命知らずにも程があるぞ！」

リドの静止の声を無視して、受付嬢がそろそろと出す紙をひつたぐるよつにじて奪つ。

『題…最近丘に住み着いた魔物の退治をお願いします

依頼人：商業人、ガーデン  
料金：5億』

料金高ッ！！

た、確かに高額…。

「これつて、Fランクでも受けられるの？」

「え…お受けする気ですかー？ま、魔物ですよー！」

…魔物。

魔物つて…あの地獄の一ヶ月間を味わわせてくれた、修行相手…だ  
と思うけど違うのかな。

確かに当初は怖かったけど後半からだんだん追いかけられることに  
腹が立ってきて自ら挑んでいくという愚行もおかしてたな。  
今から思えば何頭トチ狂っちゃつてたんだ？

「うん、そう書いてあるね。で、受けて良いの？」

「う、受けてもらえるならとても有難い事ですが…FランクがSランクに挑戦するなんて聞いた事ありません…」

「リン！いい加減にしろ！魔物に挑むなんて自殺行為もいいところだ！俺達傭兵でもそんな依頼を受けることはまず無い」

「おお、今初めて名前呼んでくれた」

「……ッ。そんな事は今関係無いだろうが！-とりあえずこれは駄目だ！」

「人生何事も経験だよ。それにお忘れ？雇い主は私だよ」

「今はこの道の先輩として忠告する…やめろ」

「……ふう、埒が開かないなあ」

リドの必死の止めも聞かず受けようとするがそこまで言われちゃうと流石に気が引けるじゃ ないか。

魔物が私の考へてる魔物と一緒になのか分からないし。  
けどお金を手つ取り早く稼ぐならこの依頼でしょ？

私はゆっくりと懐に手を入れてナイフを一本取り出す。

「分かった。じゃあゲームしよう」

「…ゲーム？」

「そ、私が勝てば依頼を受けて負ければ受けない。リドが勝てば大人しく諦める」

「……それしかお前を止める方法がなさそうだ、受ける」「ルールは簡単。あそこにある男の一人に当てたほうが勝ち」

私の言葉を聞いた男達が驚き声を上げて逃げようとする。  
けど折角の的をわざわざ逃がす訳が無い。

「『閉錠』<sup>ロック</sup>」

ガチャリといづ音と共に、ギルドの扉が動かなくなる。  
男達は今度はギルド内で逃げ回り始めた、さあフィールドは完成した。

「大丈夫。ナイフに魔法をかけて、標的に当たる際に崩れる脆い物質にした」

「…分かった」

「じゃあリドからお先どつぞ、皆でーん、逃げないと魔法を解いて本当に殺しますよー」

崩れる物質と聞いて安堵していた男達は再び逃げ始め。割と本気で。

リドは男達に狙いを定めてナイフを思い切り放つ。風斬り音と共にナイフはギルドの壁に深く崩れないまま刺さった。あんだけのスピード出してたら脆くとも立派な凶器だよ。うん、人に刺さらなくて良かつた。

「じゃあリドの負けって事でー、依頼を受け…」

「待てー！お前がやつてないだろ？がー！お前も外せば依頼は受けないだー！」

「まつたくもう、我慢だなあ。じゃあはい」

私の手からナイフが消え去り、何処かからこつんと音がする。音がしたのはギルド内のいる男の頭から。ナイフが脆く崩れた後がそこにはあつた。

「な…ッ。嘘、だろ…」

「これで私の勝ち。受付さん、依頼を受けます」

「…くッはいー！こちからですすーー！」

返答のおかしい受付嬢の持つ紙に受印を押してもらい紙を受け取る。これで依頼人の所へ行けばいい。

「ど、どうやつて…」

「種明かしはしないよ。とにかく勝ちは勝ちだから依頼受けのから

リドはそれに従つてね」

「お前…最初から勝つよつに細工したわけじゃ無いよな…」

「私ね、ゲームで負けた事つて一度も無いんだよね」

「やつぱりイカサマだったのかよ…」

リドは頭を押さえて私の受け取った紙を見る。  
あ、そういうえば聞いてない事あつた。

「つー、つーの武器つーどーー。」

「武器？持つてゐる？」「うーん」

リドは空中に手をひらひらと動かす。

…どうや。

「空間だよ、俺は好きなときに武器を出し入れができるんだ」

「うわ、まさかの魔剣とか…」

「よく知つてたな。俺のは確かに魔剣だ」

「本で読んだからね」

魔剣　　、使用者自身の魔力でコーティングされ強化された武器。

魔力を覆わせるので魔法は勿論、威力がすごいと聞く。

ただし使用時は常に魔力を放出しなければいけないのでうつかりしてると衰弱死する。

「そんな事よりも今日はもう宿に戻るぞ。依頼は明日だ」

「うん」

流石に今日は私も疲れたので寝たい。今、昼だけど。  
あれ、そういうえば最近全然ご飯と睡眠取つてなかつたな。  
ご飯食べてから寝よう。

「受付さん。美味しいご飯の店つて知りませんか？」

「それでしたらここからもう少し先に美食家ガストロノーマーが店長を務めるお店が

ありますよ」

「…美食家？」

「はい、世界的有名な方です」

ギルドにはいくつかの職業と呼ばれるものが存在し、ギルド加入者はそれに分類される。

分類は、戦士・補助・分析者・専門者・案内人だ。

戦士は言うまでも無く戦いを目的にギルドに来る人。

補助はそんな戦士に着いていく人。

分析者は何かしらの分析や研究をするためにギルドへ来るし、専門者も似たようなもので自分の好きな分野を追求する。

二つの違いは規模。分析者はこの世界全てに対しても研究をしたい人だが専門者は一つの事だけ。

美食家は専門者に入る。

最後の案内人は私がリドに頼んだ役割に近い。

世界の全てを知り、導くための職。これは戦士とかに雇われる事が多く、別名、知識保持者とも言われる。

ちなみに私はフリーで職には入っていない。

職登録は強制ではないが入れば得する事もある、ぐらいだ。

「ありがとうございます、行つてみます」

「依頼人は丁度その店が行き着けなのでもしかしたら会えるかもしれませんよ~」

受付嬢の言葉を背にギルドの扉を開ける。

リドもお腹が空いてるらしく付いてくるらしい。

「ねえ、リド。勝手に無謀な依頼受けて怒ってる?」

「…雇い主はお前だ。お前の決めた事には従う」

「自我を殺すのも良いけどそんなんじゃ心の無い人形になっちゃうぞ」

「お前が言つと本当になりそつて怖いんだが。……言わせて貰うと、怒つてる」

「うんうん、人間素直が一番。けど取りやめる気は無いからね」

「じゃあ何で俺の意見聞いたんだ…」

「本当に嫌そな強制はしたくないから」

「いや、一応嫌なんだが…」

「だつたらあの時ナイフを私にぶつけて止めるべきだつたね、リド

「…はあ～、分かつたよ負けだ負け」

ギルドの更に奥にある通りを真っ直ぐ歩いていくと小さくひつそりと立つ建物があつた。

音楽都市には合わないグレーの壁に少しヒビが入つていて、だがそんなこじんまりとした建物からは美味しいそうな匂いが香つてくる。

誘われるようになってその建物へ入ると、気前の良さそうな店長が暖かく迎え入れてくれた。

「へい、いらっしゃい！何にします？」

カウンターと座敷が並ぶ店には人が点々といる。

店長が手にお玉と包丁を持ちながら料理を作っている。

とりあえず私とリドはカウンターの隅に座り、メニューを聞いてみる。

返ってきたメニュー内容は、正直分からぬものばかりだった。城では出されたモノを適当に食べていたので勿論料理名など知る由も無く適当に選んだ。

「あいよー『グレグ』『ワットの刺身』ね！」

店長が意気揚々に料理を作り始める。

「はー? グレグコリットー馬鹿、何頼んでるー?」

「え…、駄目なの?」

「…いや、悪い。好みは人それぞれだつた。…店主、俺は虎肉のステーキで!」

…あれ、幻聴かな。

今、同族の料理を頼んだぞ、こいつ。いや、氣のせいだよ氣のせい。

「虎肉つて柔らかくてイケルんだよな」

…幻聴じゃなかつた。

「共食いとか心が痛まないの…?」

「は、共食い? 確かに俺は虎の獣人だが虎なわけじゃ無いぞ。別物だ」

「…そ、そなんだ。違がよく分からぬけど」

私はその後、大人しく店長の料理をばきを見ていながら自分の料理が運ばれてくるのを待つ。

不気味に体が捻じ曲がり、赤いぎょろぎょろとした目を持つた節足動物がさばかれてく姿は中々に気持ち悪い。

しかもジュギョアアアとか訳の分からぬ奇声を発してゐるし。

殻を綺麗に取り除かれて中身を包丁で取り出される間も奇声を発し続ける謎の生き物は中身を取り出されるのを拒み触覚で店長の包丁を真剣白刃取り中。

（うぬ…、今回のは意氣がいいな。だが…！）

（ジュギギョオエエエ…！）

（この私の包丁に大人しくかかれええ…！）

（ジュギ…？ギョオオ）

ズシャツ

（…ふッ、中々の腕だつたぞ。お前の事は忘れんぞ、2秒ほど）

…拒む謎の生き物に店主の包丁が刺さり絶命した謎の生き物は中身をスライスされて皿に盛られていく。

そして綺麗に盛り付けされたと思つたら店長がそれを持って私の方に近づいてきた。

え…まさか…。

「はいよー!グレグコリットの刺身お待ちイイ！」

さつきの謎の生物がグレグコリットかあああーー!



## 第十一話・見習いはギルドへ（後書き）

『グレグ・コリット』

種：節足動物

容姿：捻じれた体と赤い目が特徴。これ生き物？と疑いたくなる。

印象：全体的に気持ち悪い。腐臭が漂う。

第十一話・ひとつめのアーリーフードと睡眠を（前書き）

思えば主人公がまともに睡眠を取っていない。  
これは非常にまずい。

## 第十二話・とつあべやく飯と睡眠を

完食しました。ええしましたよ、しましたとも！

何故か緑色だつた刺身を！

唯一の救いは味がまあまあまともだつた事です、臭いは腐臭でしたけど。

食べる為に刺すと青色の液体が噴出しました。あれはハーブのソースだとでも思いたい。

しかも絶命したはずなのに飾りとして盛り付けられた中身の無いグレグ「リットの皿がこちらを向いたのは氣のせいだ。

「…中々、キツイ戦いだつた」

「お疲れ。グレグ「リットの身は傷に効くんだが氣持ち悪さから誰も食べない」

「…もう少し早く言つてよ。馬鹿…」

「言つたが聞かなかつただけだろ」

「それも… そうだったかも…」

口の中に緑臭さが広がつてまじで気持ち悪い。

店長に水の大盛りを頼んで飲みまくると少しだけ和らいだ。

「…あ、今日はもう宿に帰るうか」

「そうだな、店主一代はここに置いてく」

リドが数枚のコインをカウンターに置くと店を出ようとした。けどその時私は誰かと肩をぶつけてしまい反射的に謝る。

「すいません」

「いや、じつちも悪い。大丈夫か？」

肩をぶつけた人はむさ苦しそうな筋肉盛々のおじさん。

黒い髪を伸ばし、ランニングシャツ一枚。今、冬って知っていますか？

「よお店主！今日も景気が悪いぜ！つたくあいづらまじでうぜえ！」「まだ依頼をうけてくれそうなギルド加入者は現れないのか？そつちも大変だな、魔物なんかに住み着かれて」

「全くだ！ 依頼金にわざわざ5億も出したってのー！」

「そう怒るなよ、元はといえば丘を手入れしてなかつたお前が悪いんだろ？」

あれ？

「知るか！まさか魔物が住み着くとは思つてなかつたんだよ！」  
「少し落ち着け、激昂したつてどうにもならんぞ、ガーデン！」

依頼主だああああああああ！！

この筋肉男が依頼主!? よく5億も用意できたな!  
まさかの展開だが依頼主というなら丁度良いかもしね。

私は筋肉男にそろそろと話しかけてみる。

「あの…ガーデンさん、つていうんですか？」

「ん？ ああ そうだが」

「… 実は、ですね…。 貴方の依頼を受けました、ギルドの者です」

「… は？」

「ですから貴方の依頼を受けたんです。 詳細を教えてくれませんか？」

「え、 つええええ！？ あんたが！？」

「依頼を受けてくれて驚いたのか小娘だと思つて驚いたのかどちらですか？」

「い…いやスマン。 どつちもだ…」

「ズバツ というタイプですね、 嫌いじゃないです。 何はともあれ受けましたので詳細の方を教えてもらえませんか？」

「…いや、 けどあんた…。 … 分かつた、死んでもこっちは知らんぞ。 最近俺の保有する丘の領地に魔物が住み着いたんだ。 軍隊でも太刀打ちできない魔物が俺ら「」と無理に決まつてるし数が多いんだ。 3匹も居やがる。 このまま放つておくしかあいつらの対処は厳しい状態だが俺はあそこで利益を得てる事もあつてこのままじや経嘗が成り立たねえんだ」

「魔物が3匹もだと…？」

「リド、 キツイ？」

「…かなりな」

「じゃあリドは宿で待つていいよ。 私が何とかするから」

「はあ！？」

「依頼主さん、 依頼は明日にしますね。 今日は色々なことがあったので」

「あ、 ああ…」

「行くよ、 リド」

驚きのものが言えないのか素直に引かれていくリド。

店を出て宿の部屋に戻ると、 正氣をやつと取り戻したリドが物凄い勢いで迫ってきた。

リドゥって感情の切り替えが激しいな。

「何言つてゐんだ、お前！ 今日が初対面だがお前は非常識が過ぎて  
るつて事がよく分かつた！ まずはお前に必要なのはお金よつも常  
識だ！」

「何で師匠と言つてリドゥと言い私の事を非常識扱いするのやー。」

「非常識だからに決まつてゐだろ！ 意味の分からぬ行動に言動、  
全てがだ！」

くッ…、それは中々傷つぐだ…。

だが言い負かされてゐるだけは頂けない！

「ふッ…、リドゥだつて…！」

「非常識が形を現してゐるようなのがお前だらうが…！」

ふふ…ふ…。

撃沈。私は地面に臥せた。

中々にキツイ止めじやないか、リド。

「…～～～、そこまで言わなくたつて良こじやん。リドの醜態ーー。」

捨て台詞を吐き捨ててベッドに潜り込む。

固めのベッドからは太陽の香りがする。

「あ…す、すまん。言つ過ぎた…」

「……そりやちよつとは常識が無い」と言われなことも無いにかぎり、  
気にしてゐるのに

「…悪かつたな、いくら何でもきつかった」

「……本当に反省してゐる？」

「ああ」

「じゃあ良じよ。もつ寝よつか

ベッドから顔を出してベッドをぽふぽふと呂く。

「そうだな。……つてその手は何だ?」

「え、一緒に寝るんでしょう? ここ大部屋だからベッド一つしかないもん」

「俺は床でいい」

「何で? 別に寝てる時に襲つたりしないよ」

「……その心配は普通反対だろ」

「全く……、そこまで心配? 分かったよ、ナイフも針も抜いとくから安心してよ」

「だから論点が違う……。良いから俺は床で良い」

「床なんかで寝て風邪ひいたらどうするの? 明日は依頼があるんだよ、大人しくベッドで寝なさい」

「……ッはあー。分かった……」

リドがゆっくりとベッドに横になる。

私も潜つて眠りに落ちるのを待つ。

リドとの間があるので隙間が出来て背中が冷える。リドは向こうに向いてゐるし。

そこまで襲われるのが心配か、傭兵も大変だね。

「リド~」

「……何だ」

「魔物つてさ、強いの?」

「……精銳された軍隊30人ほどでやつと1匹仕留められたほどだ

まさかの衝撃事実。

魔物どれだけ強いんですか。

じゃあ私が戦つたあれは魔物じゃないのかな？

「私が知ってる魔物は赤い目に黒い鱗が特徴だつたんだけど

「それで合つてる、そいつが魔物だ」

「あれえ？』

つかしいな、確かに強かつたけど倒せられたぞ？

魔物なんでしょ、あの凶暴な獸。

「俺でも1匹倒すのが限界だ」

……どうしよう、30匹位相手取つた事もあつたぞ。  
その時は結構魔物との戦いに慣れ始めてたから普通に切り傷を数個  
受けて勝てた。

……どうしよう、リドと話が噛み合わない！

「だから……3匹は未知の挑戦だ。腕が鳴る

クククつと細く笑う声が響く。

この人、戦闘狂だつたのかー！！

自分の限界を超えていくタイプだつたとは。  
伸びそうだね、リド。

「そ、そつ……頑張れ」

「ああ。……そうだ、聞いておきたいんだが……」

「うん？」

「お前は魔法士と言つていたが俺には戦士のよつとも思える。ビハ  
らだ？」

「今は魔法士だけど昔はいうところの戦士だつたよ

「そつか、じゃあ自分の身だけは守れるな？」

「うん、大丈夫」

「ならない。もつ寝るが、リン」

「お休み、… 68時間ぶりの睡眠…」

「…待て、今何て言った?」

「ん~? 68時間…」

「お前はどんだけ寝てないんだ…」

「勇者が来てから。ずっと…かな」

「…今日はゆっくり寝ろよ」

「ありがと。… あ、そういえばソド。やつきの事なんだけど」

「やつきの事?」

「私が襲うつて話。襲いたくは無いけど私時々無意識で人を絞め殺すみたいでちょっと保障が怪しくなってきたかも」

「…嘘だろ」

「冗談なら良かったのにね」

昔、弟と雷の日なんかは一緒に寝る事が多かった。

ある日弟と一緒に寝てて朝起きたら弟が私を恨みがましく見てきた。聞くと、夜中にいきなり抱きついてきてあり得ないほど力で腰を締めたらしい。

弟曰く死ぬ寸前だった。

それ以来弟とは一緒に寝なくなつた。

「だからもし私が抱きついたら振りほどいた方がいいよ

「抱きつくるのか!?」

「みたい。弟は精神的にも肉体的にも殺されそうだったって

「…き、気をつける」

「うん、よろしく」

そういえばガウスに今までのお礼を言つてなかつたな。

厳しかつたけどこの世界で生きる術を授けてくれたひとだった。

トト、「じめんね。もう一度だけで良かつたから会いたかった。  
城下の皆、挨拶もせずに出てきちゃつたけど今までありがとうございました。

貴方達が居たから希望を失わずに済んだ。

そして、勇者。色々ごめん。

また元の世界で会いたいね。

私はそんな思いを馳せながら私は深い眠りへと誘われていった。こひな

\*\*\*

突然、小鳥の鳴き声と共に眩しい光が布団に射し込む。

どうやら朝が来たらしい。ついさっき寝たと思っていたのに。

私は上半身を起こして体を伸ばす。

うん、疲れが一気に吹っ飛んだ。

隣を見ると、リドがまだ寝ていた。

少し顔を覗き込むと規則正しい息遣いが聞こえる。

…とゆうか寝顔までまじ美形だな。

まるで精巧に作られた人形のようでもう逆に人間じゃないと疑いたくなる位整っている。

頭の上に生えている耳は触り心地が良さそうでつい触つてしまった。すると予想通りふわふわで気持ち良い。くせになりそう…。

「…ん…っ…」

リドの唇から声が漏れ、起きたのかと思つて更に顔を覗き込む。覗き込んだ顔から瞼が開きリドの紫色の瞳が現れる。

「……………ツ…ーつおわあああああああーー!」

リドは眠そうな瞼を一瞬にしてかつ開き、大声を上げてベッドから転げ落ちる。

…何してるの?

「…大丈夫?おはよー!」

「お、お前…。朝から何してる…」

「何つて…、顔覗いてただけだよ?」

「心臓に悪いから止める…」

「は〜い」

床に転げ落ちたリドは起き上がり髪を適当に整える。リドの髪は若干つんつんしてる。実際さっきの耳と一緒に触つてみたらさらさらで柔らかかったけど。

私も髪を整えるといつもどおり後ろに流す。

それを見ていたリドがいきなり私の髪を触りだした。

「…どうしたの?」

「いや、結構良い髪質なのにどうしていつもアレンジしないんだ?妹はしようちゅう変えてたぞ」

「妹いるんだ。髪は面倒臭いからね、流しておく方が楽」

「……ちょっと貸せ」

「ほえ?」

ベッドに座らせたリドが私の髪を束ね始める。

髪を結ぶなんて小学校の三つ編み以来かな。

リドは私の髪を今まで持つていき束ねる。つまりポーテールだ。

その際にリドがふと腕を止めた。

「…リン、お前髪染めてるのか?」

心臓が思わず跳ねる。

何でばれた!?

「…別に〜」

「本当の事言え。魔力がかかつてる」

「染めてるよ。いいじゃん、オシャレだよ」

「…オシャレで確かに髪を染める事はあると聞いたがわざわざ地味な茶色に染めるなんて聞いたことも無いぞ」

「オシャレはオリジナリティが必要なんだよ」

「…そつか」

納得はしてなごうな声色。

そこまで疑うなよ、私だって結構気に入つてた黒を捨ててまじこの色に変えたんだから。

だから羨ましいよ、黒である君が。

「そつこつこじは珍しい黒色だよね」

「よく言われる」

「黒つて羨ましい。私も黒が良かつたな〜」

「じゃあ何で黒にしなかった?」

「だつて私の縁の田と会わなきかなと思つて」

「そんな事無いだろ」

チヤツチヤツと手際よくポーネーテールに纏め終えるとリドが良しと満足したように頷いた。

いつもは腰まである髪が今日は肩を少し越す辺り。自分の髪を一房救つて見つめる。

魔法のかけられた私の髪は綺麗な茶色を醸し出す。

「じゃあ今日は依頼だね。早速丘に行つてみよつよ

「待て、準備も無しに行く気か?」

「…」

「……とつあえず腹、じりいえだ」

「賛成」

私は黒マントを羽織り、腰にポーチを付けてナイフと針を忍ばせる。  
これがこれから的基本だ。  
デフォルト

ちなみに王宮の制服は動き易いように切り裂いた。  
袖とスカートの丈を切り落とし、スカートの前に切り込みを入れた。  
意外と際どくなってしまい足が大幅に見えるようになってしまった。  
もはや王宮の制服だった面影はほとんど無い。

私とリドは宿の料理店に行つて小さなパンとサラダを食べた。

こっちの朝食は基本少なめ。

朝はあまり食べず程々というのがこちらの考え方のようだ。  
朝食を食べ終え、チェックアウトすると、ついに丘へ行く事になった。  
ちなみに場所はルーメンから少し離れた街道脇。  
馬車を利用する事となり、馬車を馬飼いから借りる。料金200ル、  
意外とお得。

ゴトゴトと揺れる馬車の中、リドははずつと険しい表情を崩さないで  
居る。

「なんとなく話しかけづらい。

それにしても初で難しい依頼を受けた当の私は全く緊張感無し。  
慣れてるしね。

「リド緊張気味だね」

「…当たり前だ。むしろ何故お前は緊張しない」

「前衛は任せた！」

「…俺を盾にする気か」

「私も戦うよ、けどギルド初心者だもん」

「…ちょっとしづらくなっちゃうかもしれないか？」

「了解」

その後はずつと沈黙する私とリドだったが、雰囲気は全く違つた。

リドは険しい表情でピリピリとした雰囲気を発する一方で私は魔法で炎を灯したりして遊んでいた。リドに水をかけたら滅茶苦茶怒られました。



第十一話・とつねんかい飯と睡眠を（後書き）

くねくねる。

「わ～、コド見て」

「…少しほは緊張しひおお…」

「おおう…こきなり大声出れないでよ、驚くでしょ」

「いいが、今から俺達は戦場に行くんだ。そんな畜生だと死ぬぞ」

「イヒツサー」

「馬鹿にじてるのか?」

「滅相もいざいません」

とかあつたとか無かつたとか…。

## 第十四話・ギルド依頼

荒れ果てた荒野に佇み、武器を持つ2人の男女。

その2人の視線の先には黒い鱗で覆われ、ギラギラとした赤い瞳を彼らに向ける魔物。

狼のような体躯は威圧感を滲み出し、見ているだけで足がすくむようだ。

そんな2人の恐怖や戸惑いを感じ取ったのか、先手必勝とばかりに魔物は2人の喉元にかぶりつき一瞬にして2人を絶命させてしまった。

その後、絶命した2人の体を余す事無くじっくりと食り、2人の骨のみが今も荒野に残っているそつな。

めでたしめでたし…。

「全然めでたくないんだが！」

……あら、リドさん。突然馬車の中で大声を出したりしてどうしたんです？

全く黙つてろと言つた本人が喋るなんて駄目ですねえ。

「いきなりそんな話をし始めて黙つていれば何だその不吉な話は！？」

「嫌だな、冗談だつて。ちょっとあまりに雰囲気がつまらなかつたから明るくしようと思つて」

「逆に下がる」

「そこは大人の寛容な嘘で上がると言わないと子供は拗ねるよ。子供心が分かんない人はこれだから…」

「訳の分からない理由で人を貶すな。それに子供という年じゃ無い

「どうつ」

「何歳に見える?」

「……16?」

「おお、惜しい。15だよ」

「15か、まあ年相応だな……」

「そういえばリドは?」

「俺?俺は18だ」

「そんな感じだね。にしても年頃の男女が一緒に……殺し合いが起きそうだね!」

「待てええ!! 何故そんな答えが出たああ!!」

「だつて年頃つていうのは最も感情が表に出やすくなる時なんだよ、殺人衝動とか起きない?」

「起きるかあ!! 少し黙れ、動く非常識!」

「あ、酷い。今のは常識なのに馬鹿にした」

「何処が、何処が常識!?」

「家訓に『年頃になつたら男子と離れてね、パパに殺人衝動が起きちゃうゾ』って」

「それ单なる親馬鹿だろーが」

「ゴトゴトからガタガタに揺れが変わつた馬車内に会話が弾みだす。

それはすぐに収まることとなつたが。

そんな時、ふと馬車の揺れが止まる。

「お密さん、着きましたよ。丘でわあ」

御者席から馬飼いの声が聞こえる。

私は馬車から飛び降りて、荒れ果てた丘を目の前にする。

木は枯れて地面には草一本すら生えず大地が剥き出しになつていて、ひどく殺風景な寂しい光景だった。

「酷い有様だな…。流石にこれだけ手入れをしていなければ魔物たちにとつては格好の的だろ?」

リドが同じ風景を目にして顔を歪ませる。

私は丘の全貌を見極めるためによく目を凝らす。

そうすると、丘の上で蠢く黒い影があった。間違いない、魔物だ。

「リド、丘の上見て」

「……なるほど、確かに3匹だ」

丘の上から私達を見下ろす黒い影が姿を現す。

丁度3対の赤い目がこちらを威嚇するように鋭く見つめてくる。

「警告…してるね」

「だな、だが後には引けないぞ」

「分かってるよ。」うつむ時は先手必勝?「

「疑問系にするな、断定にしろ!」

リドが勢いを持つて丘の上まで駆け上る。

それと同時に空間がヒビが入ったかのように割れ始め中からリドの背を軽く越すような大剣が出てくる。

紫色に光り輝く大剣は派手な装飾こそは無いものの、美しいと思えるような細工だった。

リドはそれを掴んで魔物たちに突撃する。

考え無しに突っ込んでつたけど大丈夫か、あの人。

けど心配は杞憂と化し、3匹の魔物相手に大剣1つで渡り合つている。

魔物3匹に上手く剣を使いこなして傷を負わせている。しかし魔物も負けじと自らの持つ爪や牙でリドに襲い掛かる。

おお、これ私必要ないんじゃね?

魔物が強いって聞いてたから色々と不安要素もあつたけど、これらリド一人でも良いかも。

とか考えていたらリドから突然怒鳴るような声がかかつた。

「リン、馬鹿！何ボーッとしてる！？」

リドが叫ぶのと同時にリドと相対していた魔物のうちの一人が私に襲い掛かってきた。

いつの間にこっちに飛んできた、こいつ。

飛んできた魔物は人間からでも奪つたのか黒い布を体中に巻きつけ、動物なのかすらも分からぬ。

けど赤い目と黒い肌だけはしっかりと視認できる。

まるでそれ以外は隠しているかのように。

四つん這いになつて行動する真つ黒い何か、赤い目だけが黒とは違うただ1つの色。

さつきは油断しすぎていたからか腕にかすり傷を負つ。

「乙女の体に傷を付けるなんて最低ですね。  
しますよ？」

殺

自然と使い慣れてしまつた癖のせいか敬語が出てくる。  
やつぱり素の話し方と言つても本当の自分が分からんじや素にはなれないか。

少し威圧するようにして放つた言葉は魔物にもしっかりと伝わった  
よつて、魔物は後ずさる。

「さて、1匹で私にかかるなんて本当に良い度胸ですね。  
その度胸に免じて相手してあげますよ。さあ、どうぞ。かかってき  
てください」

両手を広げて無防備さをアピールする。

しかし魔物は中々腹を決めずに襲い掛かつてこない。

当たり前か、殺されるのが分かつて襲い掛かるはず無いよね。

知性は一応存在するみたいで安心した。

：最初は殺すのに必死でそんな事知る由も無かつたけど。

：最初は殺すのに必死でそんな事知る由も無かつたけど。

「……知性があるなら話も通じますよね。今すぐお仲間を引いて消えてください。そうしたら見逃します」

話し合いで通じるならここで引いてくれると助かるけど物事はそう上手くはいかないかな。

「グルウウウウウウ……！」

ほら、やつぱり。

退く気は無いみたい。

「……じゃ、お別れです」

ナイフを取り出して、魔物に躊躇無く投げる。  
すると避ける事もできる速度であるのに関わらず、魔物は避けずにナイフを体で受けた。

魔物の体からは、黒い血が流れ落ち地面を黒く染めていく。

正直避けなかつた事に驚いた。何で死を分かつて避けなかつた？

「……ジー…ダイ…。ジータイ…」

地面に倒れ込む魔物は人間の言葉を発した。

：知性があるから人間の言葉を喋れるのか？

：けど、それでは退かなかつたのは何故なんだろう。

私は既にこと切れる寸前の魔物に近づく。

「少し失礼します」

私は魔物の体を覆う黒い布を引き剥がす。

すると驚きなど超えてしまつほどのが事が目の前で起る。

黒い布を剥がすと、魔物の肉体が一瞬にして砂と化したのだ。

残つたのは私の手に残る黒い布。

一体、何で。

魔物は未だに解明されていない謎の生命体として有名だがまさか黒い布を剥がすだけで砂と化すなんてありえるの？

「正に…ファンタジー…だね」

「リン…！」

その時、リドの声が聞こえる。

声のした方向には、黒い血に塗れたリドが立っていた。

…2匹、倒したんだ。

「怪我は…無いか？」

「見てのとおり。リドは？」

「黒い血のおかげで分からん」

「そりや そうだ」

「そんな事よりもう1匹は…？」

「逃げたよ」

「は…、逃げた？」

「うん、逃げた」

「…なんで」

「ナイフを錯乱して投げまくつてたら偶然当たつて逃げていったよ」

「…そうか、とにかく無事ならしいんだ」

「ありがとう、じゃあこれで依頼達成だしギルドに行こう」

「そうだな……」

私は黒い布を静かに燃やし、風で砂を吹き飛ばす。  
只の小娘が魔物を倒したなんて知られない方が良い。  
余計な詮索はされたくない。  
だから、疑わないで。リド。

リドの視線が突き刺さるよう痛い。

絶対、疑ってる目だ。

馬車内ではずつとそんな目が刺さる刺さる。

「……なあ、リン」

「……何？」

「おかしくないか？」

「……何が？」

「魔物が簡単に逃げるなんて事が、だよ」

……ああ、やっぱり疑ってるんだね。

「ナイフが刺さりまくつたからじゃない？」

「俺の相手をした魔物は俺の剣が何回も刺さつても中々倒れなかつたぞ」

「……偶然急所に当たったんだよ」

「俺は急所に刺しまくつてたが？おかしいな」

「……はつきり言つていいよ。何が言いたいの？」

「お前は本当に只の魔法士見習いなのかつて事だよ」

「それ以外に何があると？」

「そうだな……。人間以上の何か……か？」

「こんなか弱い女の子が人間では無いと？」

「考えてみればおかしい事だらけだろ。一回の見習いが勇者の仲間

だつたり非常識だつたりな

「それは全て成り行きだつてー」

「成り行きで人間はそこまでズレれるモノなのか?」

「うわーお。今のは本氣で傷ついたぞお」

「だつたらもつと悲しそうな顔しり」

「これは…ピンチだらうか。

まさか出会つて2日田で勘付かはじめるとかイベント展開早すぎでしょ。

もつと順序を踏んでからやうのは勘付かなやー、1ヶ月くらい後にやつと氣づき始めるくらいがベストだよ。

まつたく…ひやんと日本を呼んでから出直しな。

「まあまあ、そんな事はどうでも良いじゃないか。2人とも無事だつたんだからさ」

「どうでも良くない。話をばぐらかすな

「どうしても私の事を詮索する氣ならリードの事から教えてよ。色々と隠してゐるでしょ?」

「なつ…」

「ね、お互に秘密事があるでしょ?てゆつか出会つて2日で秘密を言つていうのが無理でしょ」

「や…れもそうだったな」

「納得して貰えて何よりだよ、じゃこれからはお互の詮索は無しで」

「…分かつた」

そつか、考えてみればまだリードと会つて2日だつた。

なんか物凄く濃い2日を送つたせいか長く一緒にいる氣がする。うん、思えば濃い2日だつた。

とゆうか勇者が来てからは濃すぎる田の連発だな。

それまでは平穏だつたといつのことだ。

ま、勇者に会うのはこれでもう無いかな。

（今頃勇者はお姉さま方とウハウハだらうなー、ハーレムを生で見てみたかった…）

気づけば未練あつたな……、とてもなくどうでもいいものが。私はそのまま馬車の窓が心地よくてうたた寝を

出来なかつた。

突然馬車が力なく揺れだした。まるで何かにぶつかったかのような衝撃が襲う。

「リドー」「何どー、一本ー!?

馬車の窓から身を乗り出す。

すると、黒車の周りが魔物で囲まれていた。

見渡すだけでも20匹位だ。

「されば私がやつた方がいいかな?」

「何馬鹿なこと言つてんだ！」この数は流石に予想外にも程がある、ここは逃げるぞ！

「つー… どうやって逃げるの?」これは突破口作るには掃討しかない

۱۹۷

「大丈夫、この位ならイケる」

私は、馬車の窓から身を更に乗り出し飛び降りようとするが、どうに後ろから引かれる。

「だッ…」

「雇い主を守るのが傭兵だ。雇い主が守りうとしてんな、逃げ道は俺が作るからお前はその隙に逃げろ」

「ちょ…リド…!?」

「だから、ここで少し待つてろ…」

私を馬車内に戻したリドは大剣を再び取り出し、馬車の外へ出る。何してんの、リド！

「つぐッ…」

私は急いで窓からリドの姿を確認する。すると、そこにはリドが呆然と立つ姿があった。リドの向ける視線の先には、悠然と立つ長い黒髪の男。そしてその目は赤く輝く。

一度見た、その瞳はあの和平交渉を持ってきた馬鹿魔族の姿だった。

「…あの時の…魔族…何故ここに」

「久しぶりだな、リン＝ヒヨード。お前に会いに来た」

柔らかな笑顔を顔に浮かべて、魔族は言つ。

ヤバイ、無駄に笑顔が眩しい。美形は全員笑うと笑顔が眩しいな、腹立たしい。

一方、リドは魔族を見て固まつたように動かない。

魔族は魔物をちやつかり手懐けているのか魔物は魔族に向かつて跪いたまま一向に動かない。

書物で魔物は魔族と従属関係にあると知つてはいたがこいつゆう事か。

「一体何の用ですかね、こんなに魔物を連れて。まさかまた和平交

渉の件では無いですね

「それ以外に何があると云うんだ?」

…思わず絶句。

馬鹿なのか、この魔族。いや、馬鹿でしょ。

たかが和平交渉案練り直しのためだけにここに来たとか?

「中々面白い冗談を言う方ですね。和平交渉をどんなだけ結びたいんですか」

「冗談でここまでは来ない。それよりも考え直してきた、見てくれ魔族はあの時と同じように懐から分厚くなつた紙の束を取り出しど、どれだけ生真面目なんだ。

「…何故それだけのために魔族を連れているのでしょうか?」

「流石に人間の国の内部にまで入るのには骨が折れる。だから彼らに手伝つて貰つたのだ」

「なるほど、では今は必要ないはずでしょ?。散らしていただけますか?」

「ふむ…、だがそうすると後で怒られ…」

「魔物共、邪魔です。散れ」

威圧感込めまくろの声を冷たく響かせると魔物は瞬く間に消えていなくなる。

あの地獄を体験した人間にとつてはそんな数蹴散らすのは得意だ。魔物が消えたことに驚く魔族だが、次には笑みを浮かべた。

「面白いな、魔族より劣るとはいえるよりも強者のはずの魔物をたつたの一聲で散らすとは。やはり只の女では無いようだ」

「只の女な筈がないでしょ?。これでも最強魔法士ガウスの弟子で

すから」

「む…、 そうだったのか」

だからこそガウスに弟子志望したんだよ。なるまでの道が大変だったけど。

私はその時はつと気づく事があった。リドがさつきから固まりっぱなしだった。

「…リド」

「…リン、 あれは…魔族か？」

「うん、 前に殺されかけた」

「よく生きてたな。 それにしても納得がいった、 お前があのガウスの弟子なら魔物を倒したのも頷ける」

「言わなかつたっけ？」

「すまんが初耳だ」

「ありやりや」

思つたよりも状況整理がついてるようで安心した、 流石プロ。ひとまずこの場はあの馬鹿魔族を適当にあしらつて逃げるか。

「…で、 具体的に私に何をして欲しいんですか？」

「とりあえずこれを見て感想を聞かせてもらいたい」

差し出された紙の束。

「外交官でも何でもないんですけど。」

私は紙を受け取つて紙をパラパラと覗いていく。

『項目1：魔族は敵意が無い事を証明して武器放棄、 生爪剥がし・

牙折りを実行する。

項目2：人間に手を出した場合は四肢を砕き、 声が枯れるまで謝ら

せてから頭に岩をぶつけて絶命させる。

項目3：若い魔族を月に1度奴隸として貢……』

私はすぐさま紙束を閉じて地面に叩きつける。  
魔族の方が強いのにどんだけ下手だああ！！しかも残酷な方法が明確に書かれすぎな上明らかにやり過ぎ！  
逆にこんなに出したら何か思惑があるって誤解されるつての！  
これが魔族の誠意なんだろうけど人間にはそんな感覚無いから！誠意の方向がずれ過ぎ！

「な、何をする…！それは3日3晩寝ずに考えたのだぞ！」

「確かに誠意は篭り、人間に歩み寄りたいという思いはある事にはあります。が何もかもがずれ過ぎです。非常識にも程がありますよ…」「リ、リンに非常識と言われるなんて世も末だな…」

「リドは黙つてて。とにかく、これじゃ和平交渉なんて無理…いえこれでなくとも和平交渉は無理です」

「何故だ！」

「人間というのは欲望に忠実な生き物です。欲望を満たすだけなら同種であろうと蹴り落とします、そんな生き物が異種と仲良く暮らすなんて夢のまた夢の話です。人間は基本、無意識のうちに自分とは違うものを憎んでいる排他的種族。そんな人間と分かり合えるはずが無く、和平交渉なんて到底無理です」

隣で立つリドは絶句する。

まあ驚くよね、人間が人間を貶してるんだから。  
けど、これが真実なのだよリド君。

向こうの世界での出来事を見れば全て納得するはずさ。

「そんな事はやってみなければ分からぬだろう…」  
「やらなくても分かりますよ。 長い歴史がそれを証明し

ています

「…シ」

「こちらの世界では向こうよりは歴史量は少なくとも向こうと回りような歴史を辿っていた。

今、こちらでは中世ヨーロッパくらいの時だろつか。

この頃、地球ではたくさんの殺し合いに革命が起きていた。

そしてこちらでも同じような事は多々起きていた。

魔族と人間との絶え間ない戦争に同じ人間同士であっても行う戦争。

魔族はまた出直すとだけ呴いてそこから風のように消え去った。

後に残つたのは、リドと私。

戻ろうか、とだけ呴きルーメンに向けて馬車を走らせた。

その間に馬車の中できつと想えていた。

とりあえず5億ゲット。

## 第十四話・ギルド依頼（後書き）

魔物は強いですよ？

あの2人が異常なんですって。

第十五話・甘えられる人（前書き）

お気に入り100件！  
ありがとうございます！！

## 第十五話・甘えられる人

「お待たせしました、こちらが依頼金の5億」となります

カウンターの上にずっとしりとした灰色の袋が置かれる。

中身は勿論金貨だろう。たった一つの依頼で大金持ちとなつた私は内心ドギマギしながら受付嬢の話を聞く。

「これでリン様はFランクからDランクへと上がります。ギルドカードをお貸し下さい」

ポーチの中に放り込んでおいたギルドカードを手で探す。

異次元ポーチなので深いところまで入つてしまつたのか腕をポーチの奥深くまで突つ込み、手探りで探しているとカードがあつた。この時、端から見れば異様な光景だつたろう。小さなポーチに腕1本が丸々入つたのだから。

「これでリン様はDランクへと上がりました。飛び級をなされたので二つ名を付けられますがどう致しますか？」

「二つ名？」

「はい、自分の通り名のようなものです。そちらにいらっしゃるリカルド様はSランクですので『破壊の黒虎』というものを持つりますよ」

リドは恥ずかしそうに顔を俯かせる。

「うん、若干中二病が入つてゐるね。

それでもSランクだったんだ、強さは納得。

「私は別にいいですよ。つけません」

「分かりました、その場合はギルドから勝手に付けさせていただきます」

「…え？」

「そうですね…。リン様は……『黒の猛獸使い』とか…」

「ま、待つて下さい！！いりません、てゆうか何ですかそれ！？」

「リカルド様にちなみました。気に入りませんか？」

「気に入るいらない以前の問題ですよ…私はそんなのいりません！」

「第一倒したのはリドですし！」

「それでも規則となつておられますので。そうだ、いつそのことリカルド様に決めていただくといつ手もありますが

受付嬢は笑顔を崩さないまま、リドへと視線を向ける。

当然のようにはリドは困惑するが、すぐに含み笑いへと変えた。

「そうだな…。『謎』だけでいいんじやないか？」

「謎…ですか？」

「ああ、こいつは全てが謎のよつなものだから

「し、失礼すぎる！」

「何処がだ。お前にこれほどぴったりな言葉は無いんじやないか？」

「それだつたらリドにも当てはまるでしょ…」

「俺は知る人に聞けば謎ではない。それに男は謎があつた方が良いらしい」

無駄に正論を吐きやがる…。

謎つて何なの？私の何処が謎？

確かに異世界のことは隠してるけどそれ以外は特に…。

「お前、自分の何処が謎なのか分かつてないだろ」

「うん」

「……けど隠してる事はあるだろ」

「…ある」

「多分その謎が全体的にお前を謎に包み込んでるんだよ」

「…そ、なんだ」

案外的を射てるかもしない。

異世界人だからどうしてもカルチャーショックが起きたし常識も多少違うから。

それでもこちらの人を装えたから大丈夫だと思つてたのに勘が鋭いつていうのかな、リドは。

やっぱり野生の勘は強いなあ。

「分かった。受付嬢さん、私の一つ名は『無名』でいいよ  
「無名…ですか。分かりました。…………はい、カードをお返ししますね」

カードの上に手をかざし、少し念を込めた様子の受付嬢からカードを返されポーチの中へ放り込む。

そして灰色の袋をポーチの中へグイっと多少強引に突っ込むとスッポリ入った。

このポーチほんとに万能。

私はリドに目を向け、外に出ようと田で訴える。

扉に足を向け、出ようとドアノブに手を掛けようとしたその時突然後頭部に激痛が走る。

あまりに突然過ぎる上、痛くてその場につまずくまる。

「リン…おい、誰だ」

激痛の理由は投げられた酒のビンらしへ、床にそれが転がる。  
誰だ、こんな事したの…。只じゃ済まらない。

「『めんよ、嬢ちゃん。手が滑ったのさ。…それにしてもこんなのも避けられなくてよく魔物を倒せたねえ…あ、つととすまない、倒したのは破壊の黒虎だつた！あつはつはは…』

「お前…！」

声からすると女みたい。…甲高い声は無駄に五月蠅いし、言動も腹立つ…！

いきなり何事かと思えば高額報酬依頼完遂への嫉妬か！まじで頭痛い…。頭が痛みで熱いし衝撃がまだ残つてゐる。頭を押さえながら微かに声を漏らす。

「大丈夫か、リン。起きれるか？」

「…ッ。大丈夫…な訳無いッ」

勢いよく立ち上ると共に私は後ろを振り返る。そこには胸元とお腹を露出するセクシーな女性が机で長い足を持て余すように組んで座つていた。ハツとするような美人では無いが、存在感と威圧感を感じさせる佇まいを持つ。だが別に気圧されている訳では無い。むしろ怒り心頭。この偉そうな風貌を見て余計に。私は女性に詰め寄る。

「いきなり何するんですか、嫉妬も大概にした方がいいですよ。いい年して子供を苛めないで下さい、おばさん」

「おばさんとは言つねえ。悪いけど今のは手が滑ったのさ、小娘」「流石に怒りますよ、痛かつたんですから。謝るのは今のうちですがどうします…？」

怒りで震える声を抑える。

理不尽に攻撃されるのは一番嫌いだ。

何か理由があつての攻撃なら甘んじて受ける。私に落ち度があつたのだろうと思うし。

しかし理不尽な攻撃は頂けない。私は悪くないのだから。

「謝る？ 羞めるんじゃないよ、小娘が！ 粋がるのも大概にしな！」

「ふつつり。

何かが切れたような音が頭の中で響いた。

「じゃあ死んでください」

その冷たい声を発すると共に私のナイフが女性の喉元に刺さる寸前で止まらせられる。

腕がいきなり動かなくなり止まつた。

その止めた原因はリード。2度も私の攻撃を見極めるなんてやるなあ。

「リン、怒りは分かるが落ち着け！ いいか、人殺しは……ッ！？」

止められた手とは反対方向の手で今度は心臓を狙う。

ナイフを素早く用意し、女性の急所を狙う。

今度は仕留める。

「リンッ！」

ピタリ、と女性の胸元にナイフが刺さる寸前で止まる。

……あつぶな、危うく殺しちゃう所だつた。

怒りで我を忘れてた…。失敗失敗。

ナイフを戻して何事も無かつたかのように笑顔を作る。

「…と言つゝと、死にたくなければ今後下手な事は言わないで下さいね」

女性は机からずり落ちるみづひにして地面にお尻をつく。

淡い灰色の瞳には涙が溜まつてゐる。

冷や汗も出でるし怖い思いさせちゃつたかな〜？

私はそのまま扉を出て、街道を適当に歩く。

リドは置いてきたまま。

それにしてアレだけで怒っちゃうなんてまだまだ修行が足りないな。

それから今までの理不尽への怒りが一気に爆発したのかな？  
あの時リドがいなかつたら多分犯罪者になつてた。命拾いしたな、  
あの人。

私は体が殺しの行動に移つちゃつ所をみるとあの家の子なんだって  
実感しちゃうな。

実際に嫌な癖が付いたもんだ。ま、じゃなきゃ今頃は捨て子だつたら  
うけど。

珍しく感傷に浸つちやつた。柄でもないのに。

「…けど殺せない所もあるつて事はまだ人なんだよなあ

今まで殺しの行動があつても殺す事は無かつた。

どうしても踏ん切りがつけられないぜ。

「コンーーー。」

唐突に呼ばれる名。振り向くとリドが息を切らして立つてゐる。  
さつきは止めてくれてありがと。

「や、リードー全くも～、さつきのは冗談だよ～真に受けちゃ駄目でしょ～？」

「俺が止めなければ刺さつていたが？」

すっとぼけてみたら一蹴されました。

「いいか、いくら腹が立つても人を殺すのだけはやめろ。じゃないと俺みたいな奴になるぞ」

「はいはい、止めてくれてありがとうね。あと自分を卑下しない」

「…お前はまともに説教を聞く気がないな」

「説教を受けるなんて柄じゃないからね。それよかはいこれ」

ポーチに入れた報酬金を一掴み取つて渡す。

金貨が手から零れ落ちそうになる。

「何だ、これは」

「雇い金に決まってるでしが。これで足りる？」

「足りるどころか多すぎだ。この一枚でいい」

私の手から一枚だけ取つて笑う。

お、やっぱり美形は笑顔が違うね。私もつられてつっこつこ笑う。

「じゃ、宿に戻らつか」

「そうだな。説教は宿に帰つてからにしてやる」

「耳栓買いに行かなきや」

「おい」

さつきの事件など嘘のように何も感じさせない雰囲気が包みリードにお礼を言いたくなる。

さつきのことで問い合わせたいことなんてこゝへりもあるだらうにゃ

れをしないリドはまずるくないですか？

つい涙腺が緩んじゃうじやないか。こつちは感動映画大好きっ子で涙脆いんだぞ。

全く、そんな優しいリドには、褒美をあげよ。

私は目の前に立つリドに思つて、きり抱きつぶ。一応女なんだから嘘でも喜べ！

とか思いつつも自分の頬に冷たい雨が伝い始めたからそれを隠すために抱きついただけだけだ。

「お、おいー！ リンー！？」

「いやあ、雨が降つてきちゃいましたね。濡れるの嫌なんでしょ、うこのままで構いません？」

「は？ 雨なんか……」

「そうだな、分かった」

意図を察したリドは私の背中をぽんぽんと叩く。

ほんとに優しいな、馬鹿。

何でかな、雨足が強くなつてきた。濡れるのが嫌だからリドにじぎゅつとしがみつく。

あ～あ、優しさに弱いなあ。私。

今まで悪意か打算的な好意しか受け取つた事無いから純粹な優しさは私には大効果だよ。

こんな風に人に抱きつくなんて初めてかなあ？

両親には抱きつくどころか触る事すら許されなかつたし弟にも触る事を両親に禁じられてた。破つて一緒に寝た事あつたけど。人つてこんなに温かいなんて知らなかつたや。

「リド……ありがとね」

「……お前が何を背負つてるのは知らんが大人は頼つたほうがい

いぞ

「頼られるのは禁じられてるからねえ」

抱きついているため声がくぐもる。

「それは家訓か？」

「うん、1人で生きる事は絶対条件だから

「…だつたら破れ。俺を頼れ」

「あはは…。家訓破ると破門になっちゃうよ～

「構わないだろ」

「言つてくれるね」

だつから優しくしないでつてば。

ダムが決壊しそうだよ？

そうなつてリドの服まで濡れても知らないからね。

むひひで甘えられる人はいない。

だからこつちでも甘えられる人はいないと思ってた。

けど、リド。貴方にだつたら、甘えてもいいですか？

「…リド、ごめん。ちょっと服濡らしそつ

言い終えるか終えないかの瀬戸際で、耐えていた涙がボロリと大きく零れ落ちていく。

嗚咽を漏らして、リドに更にきつくなしがみついて。

涙を流すなんて赤ちゃんぶりぐらい？

いや、赤ちゃんでもあまり泣いた記憶なんて無いな。

ここで泣いちゃうなんてみつともない。家族にばれたから罵られそ。けどそれだけ優しさを受けて無かつたつて結構お笑い種だよね。とゆうか優しくされただけで泣くなんて人そういうないね。

今までどんな理不尽にも、驚きにも、恐怖にも、衝撃にも耐えてきた私が耐えられない優しさって凄い。

向こうの世界じゃ考えられなかつただろつなあ、仕事中は完璧鉄板面の私の弱点がまさか優しさなんて。

とゆうかよく流れ出てくる、この涙。15年間分の全ての悲しい出来事の時に泣いた事なんてなかつたから今になつて寄せてきてるのかな、15年間分が。

向こうで過ごした15年の思いをまさか異世界の地でぶちまけるとは思つてなかつた。

「……つあー…。泣くのって結構体力使うね」

涙に1段落ついたのか、溢れるだけ溢れて止まつた涙のために顔を袖で拭いて顔をあげる。

清々しいくらいの笑顔で。

「落ち着いたか？」

「うん、いやあ涙つて意思が聞かないんだね。全然止まらなかつた」

人目も憚らずに泣いてしまつた事に現在絶賛後悔中。

周りの人の視線が痛そう、リドが。多分彼女を泣かせた駄目彼氏っぽくなつてる。

気恥ずかしさを振り払うためにもわざと明るく振舞う。泣いてしまつた自分の失態と周りの人目を消すために。

未だリドの腕が私の体に回つているため、ひとまず腕を外そつとする。

が、その直後に搔くようにして体を抱きしめられる。

(……え?……ん??)

外そうと思つた腕が私の腕を掴んで体ごと抱き寄せられた。

抱き寄せた本人は言つまでもなく、先ほどまで私がしがみついて泣いていた人物 リドだ。

い、一体何が…。

視界は影で覆われ、ほぼ何も見えない状況に等しい。

理解不能の状態で、理解不能行動を取る者の声が上から降つてきた。

「…悪いが今度は俺が落ち着くためにこうしていいか？」

「…へ？」

「お前、少しば俺が男だつて事も考えろ。心臓に悪すぎる」「いや、何言つてるのかさっぱりなんだけど…」

「…説教時間増やすか」

「つてええええ！？何で、何処で増やす要素あつたの！？」

「黙れ、それが分からぬから増やすんだろうが。今日は寝れないと思えよ？色々と聞いてやる上にお前の非常識も正してやるから」「遠慮する！この状況で説教聞かないとかつて言えない状況じゃん！」

「！」

「当たり前だ、狙つてたからな」

「この人でなしーーー！」

その夜、きつちりと正座（何故日本文化を知つてゐる！？）させられ延々と説教を受けました。

眠かつたので大半は聞いていない上、訳の分からぬ事が多すぎた。



第十五話・甘えられる人（後書き）

次回は少し番外編を挟みます。

主人公の弟話です。

「父ちゃん！姉さんが消えてから半年以上経つってのにまだ何も掴めないんですか！！！」

「落ち着け、彰。凛のことは全力で探してる。だが余りにも情報が曖昧過ぎるんだ…」

ある家のコンビングの一室で毎日のように起る家族会議。頻繁に行われる会議の内容は、姉の失踪についてだ。

半年前、突然姉さんが消えるようにいなくなつた。

原因は不明。そして行方も未だ手がかりすら掴めず。いる。

姉の名前は兵藤凜。長く艶めく黒髪のストレートにふつくりとした赤い唇が印象的な可愛い系の顔立ちを持つ。

そして僕は、そんな姉を探す非常識の常識と呼ばれ続けて13年。  
兵藤彰。

システムとまではいかないが姉の事は好きで、よく一緒にいた。半年前も、いつもどおり仲良く買い物をしてる時に姉さんは忽然と消えた。

初めは迷子になつたのかと楽観視していたが、半年間ずっと消えたままなのだ。

家柄的に誘拐や暗殺がされやすい我が家は、そのことで姉さんが巻き込まれたのではとも思ったが、あの姉にとつてそんな事はあり得ない。あつても返り討ちにしてる筈。単体で軍隊とも渡り合える人だから。

今日に朝も同じように手がかりすらも掴めていない無駄な会議が開かれ、僕は父さんに詰め寄る。

深刻そうな顔をする父さんに、ずっと黙つている母さん。

「これだけ探しても見つからないといつ事は……もつ諦めた方がいいのかも知れないわね……」

ぼそりと呟く母さんの言葉が頭に血を上りせる。

つい激昂して机を叩く。

「母親のくせにその言ひ草ですか！姉さんは生きてますよ、絶対に！」

「落ち着けといつただろ、彰。彰はそう信じていても根拠は何も無いんだぞ？」

もう姉さんを探す事を諦め、死亡届を出そつか相談している親が憎い。

まだ死んだと決まったわけでもないのに。

僕は、時計を見て時間が遅刻寸前なことに気が付く。

スクールバッグを乱暴に掴む。

「根拠ならありますよ。姉さんが姉さんだといつ事実がね」

台詞を吐き捨て、玄関の扉を開けて外へと出る。

先ほどの言葉、知らない方にとっては意味が分からないように聞こえるでしょ？

我が家は一般家庭とは大分違う家系で、大分変わっています。

両親や姉は決して認めませんでしたが、とにかく非常識過ぎるんです。

家訓には、常識と呼べるもののが1つもなく、全て普通の方にとつてはあり得ないものばかりです。

しかし家訓を破る……つまり常識ある行動を取れば家の庭木に吊るされます。過去に僕は40回くらい吊るされました。

唯一あの家系に生まれながら常識を捨てませんでしたよ僕は。褒め

て貰いたいくらいですね。

しかし姉は正反対に、あの家の子だと証明するような人でした。

家訓に従順に従い、常識など持ち合わせない人でした。

非常識にも程があるだろうと思わずツツコミを入れたくなる程非常識で、謎で、あり得ない位に強い人でした。

その強さは今まで姉さんがやつてきた事を知れば分かつて貰えると思します。

代表例を挙げるなら、ヤクザの抗争に巻き込まれても無傷だった上にヤクザ同士を和解させたとか不良50人の肅清や殺し屋30人と1人でやりあつて圧倒的にぶちのめし一生歩けない体にしたり、米軍を壊滅寸前まで追い込んだり世界中の人に脅せるネタを持つているとか……。あれ？途中から人間じゃ無くなつてる気が…。ん？全文駄目じやないか、これ。

だから姉さんはきっと無事なはず！むしろ無事じやなかつた姉さんなんか見たことないし。姉さんが血を流す姿なんか見た事ありません。

…すみません、嘘つきました。転んで膝から血を流してた事ありますね。

ついつい長く語つていしまいましたが、言うなれば姉さんが死ぬなんて寿命で以外あり得ないということです。

「よお、彰！今日も元気ねーな！」

ポンと後ろから背中を叩いて挨拶をしてきたのは、親友の正臣浩介。まさおみ ひやすけ軽いお調子者だが、正義感が強く人が良いのでクラスの人気者です。姉の失踪を心配してくれる1人です。

「どだ？お姉さんの手がかりとか」

「相変わらずですよ。姉さんの事だから死ぬなんて事は無いと思つ

「…………」

「携帯とかは無理なんだよな？」

「無理ですね。あの姉ですから」

「…………」

姉さんは極度の機械おんち。

携帯とかは持たせた瞬間に煙を出して壊れる。なのにあの姉は全くそれを認識せず、不良品だとか喰いてた。

流石に携帯電話店に乗り込もうとしたのは止めたが。

「つたぐ、凜さん何処行つちやつたんだらうな？」

正臣はよくこねじると姉さんの呼び名を変える。それがお調子者の由縁でもあるのだが、姉さんを名前で呼ばれるとイラッとする。

「~~~~~ッ！？ 彰！」

無意識のつむじ正臣の首を絞めていたらしく、田の前で田田をむく正臣。

我に返つたのは、幼馴染である女の声が聞こえてから。

とゆうか僕も非常識の中の常識とかつて呼ばれてるけど最近はそうでもない。

姉さんが消えてイライラしてるからか少々行動が田を見張るものになってきた。

「心さん。おはよげじります」

「や、そんな事より正臣を早く放してあげなさいー。」

ぱつと正臣の首から手を離すと正臣は咳き込んで地面に跪く。ちなみにやつてきた幼馴染は星間心。

世話焼き体質のお人好し幼馴染。ラブコメの典型的なヒロインにな

れそうな女の子で、そういつだけあってかなりの美少女。

僕は興味ないけれど、中々こうゆう要素が学校にいるだけで賑わうから面白い。

「お前は俺を殺す気か！ 彰あ！」

「正臣が姉さんの名前を呼ぶからですよ。今度呼んだら闇魔様と会わせてあげます」

「き、気をつけるわあ」

「僕、正臣の物分りのいい所は高評価にしてるんですよ」

にっこりと笑つて、僕は学校の方面へと走り出す。

そつこねば遅刻寸前ででてきていた。

正臣と心は普段から遅刻ギリギリで登校しているが僕は彼らと違つてマジメな優等生なので急ぎます。

正臣は朝のセツトに忙しいという理由ですが、心は弟兄妹の面倒に忙しいからだそうです。心は何処までもラブコメ展開を裏切りませんね。若干ツンデレ要素も入っていますし。

「待ちなさい、彰ー今日も置いてく気？ 今日は貴方にとつて良い話を持ってきてあげたのにー！」

心からの制止がかかり、足を止める。

普段なら氣にも止めない制止だが、良いく話というのが氣になります。

「まあ、学校で話すわ。こんなトコでぐずぐずしてたら遅刻しちゃう」

じゃあ止めないで下をいよ、と言いたくなるのをぐつと堪える。

心の話がどんなのかは分からぬが僕にとつての良い話なんて現時点では姉さんの事しかあり得ない。

早く話を聞きたい思い走るが、心は一度決めた事は曲げないので今は学校に急ぐ。

もしも姉さんの事なら一刻も早く聞きたい。姉さん…！

正直、心を量を云うに、三木へと三木を走り向かうが、後ろでの待てコラアアーー！とかいう声はきっと幻聴だったのかな？

תְּמִימָה אֲמִתָּה וְאַתָּה תְּמִימָה תְּמִימָה תְּמִימָה

1年4組と書かれたプレートのぶら下る教室では、まだ先生は来ていないらしくクラスメイトがざわついている。

僕は、鞄を自分の席に置くと、心がまだ来ていない事にやつと気づき落胆する。

どうやら余りの嬉しさで心を置いてしまつたようだ。

あ、田舎者でござるが、どうぞお入りなさい。

クラスに担任である鬼塚先生が入ってくる。

先生は中々の強気美人な女性には興味がある

「センシ セー！ ギリセーフですかー？」

1拍置いて正臣と心が教室に入り込んでくる。

息をせえせえと切らし、全力で走ってきた事が窺える

「はい遅ーーく

先生は正臣と心が入つてきたのと同じくしてぺらぺらな紙を2人に投げつける。

…正臣と心はぺらぺらな紙を体で受け止め、倒れる。

ぺらぺらとは言つても、先生の生み出すあり得ない速度によつてとげとげに変わる。

僕でも目で追うのがやつとの速度を持った紙は、人体を貫くのもやぶさかではないだろう。

紙が銃弾と同等の威力を持つのでいさか危険だ。それでも死人が発生するのは見たことが無い。…先生が手加減をしているからだが。ペラぺらな紙は遅刻反省文。遅刻した生徒には先生の制裁つきで与えられる。

だからこのクラスで遅刻する生徒はまずいない。一人を除いて。

「2人は明日までにソレ提出なー。出さなかつたら頭と胴が離れると思えー」

さらりと怖い台詞を言つ。…これが先生の性格に難アリと言われた理由。

認めたくは無いが先生はウチの家系の親戚らしい。だからあの性格は納得できるが、せめて自重はしてほしいと思つ。

「じゃあ今からH.R始めるまーす。そして終わりまーす。終了、はい解散」

…よく先生免許をとれたな、こいつ。改めて思うと絶対先生をやつてはならない人ナンバーワンになりそうな人なんですけど。

先生は、倒れる正臣と心を避けて教室から出て行つた。僕はそれを確認すると倒れる心の元に駆け寄つた。

早く話を聞きたい。

「心、大丈夫ですか？話はできそうです？」

「ぐッ…、話を聞きたいなら手を貸してよ…」

「分かりました。ヒツヂ」

「ありがとう…」

手を貸して心を起きたがらせぬ、心は正面を起します。

「…鬼塚めえ…、いつかぜつて一復讐してやる」

所詮無理だから止めたらいかがです?と心の中では思つても言いませんよ。

そんな事よりも今は心の話が優先です。

「で、心。僕にとって大切な話とは何ですか?」

「その事なんだけど… 2人とも、今日の授業サボる勇氣ある?」

「聞かれるまでもねえ。次の授業はあの鬼塚だ、堂々とサボつてやんぜ」  
「本当に首と胴が離れそうですよ、正臣。僕は優等生ですから保健室に行つたことにでもします」「ず、ずるい…」

普段は授業をサボるなんて許せない!的な心からサボり宣言が出されるなんて余計に期待してしまいます。

これだけ期待させといて姉さんの話じやなかつたら怒りますよ、心。ベタすぎる屋上に上がつていつた僕達は、心の話に真剣になります。風が強すぎる屋上に大事な話。どんだけベタなんですか?いやここでベタじやなかつたら逆におかしくなってしまいますね。  
すみません、僕の偏見は無視してください。それより早く話を聞きましょつ。

「…根拠なんて何も無いんだけどね、それでも…聞いてくれる?彰のお姉さんの話」

流石は期待を裏切らないラブコメヒロイン。

根拠なんて無くとも構いません。聞けるだけで十分です。

「……ほんとに信じられない話なんだけど、彰のお姉さんは……凛さんは、この世界から飛んだんじゃないって思うの」「飛んだ？」

「うん……。友達の、綾香って子知ってる？」

「知ってるよ、あの超美人、だろ？」「

「その綾香ってね、最近は学校に来てるんだけど……少し前までは全然学校に来てなかつたの。いきなり消えるように行方不明になつたのよ」

「……姉さんと同じ」

「そう、私も不思議で一度聞いてみたの。そしたら、真剣な面差しで『異世界に行つていた』って言つたの……」

「異世界？ おいおい嘘だろ、そんなファンタジー……」

「私も嘘だと思つた！ だつてあんまりにあり得ない話だもの！ けどね！！ 綾香が言つには、1日だけだけどこの学校に私を元の世界に帰してくれた女の子が転入したって言つたのよ！！ それで調べてみたら……」

「……嘘でしよう？」

「……1時的に、たつた1日で入学して退学した外国人の女の子がいたらしいわ」

驚きのみがその場を包む。

もしその話が本当なら姉さんの手がかりが掴めた。姉さんは……異世界にいる。

それならこの半年間、どんな手を使っても分からなかつた姉さんの居場所が頷ける。

やつと見つけた、姉さん……。

けど…異世界なんて…なんで…？どうやって行つたらいいんですか？

「その外国人の女の子の行方は…？」

僕は、心の腕を掴み問いかける。

「も、も、異世界に帰つていつてしまつたらしいわ…」

心の言葉でじうじょうもない絶望感が襲つてくる。

異世界なんて、どうやって行つたらいいんですか？その女の子にもう少し早く会えてれば良かつたです…。

異世界トリップもの…と言えば、勇者召喚や国王の妃、愛人…恋愛モノに何の意味も無いトリップ…。

大きく分けられればこの3つに絞られるでしょう。

勇者召喚…はありません、世界が滅びます。

恋愛モノは…、認めたくありませんが可能性は十分にあるでしょう。姉さんのあの美貌ですし、男なら惚れます。けどあの姉さんに恋愛なんて言葉は似合いませんね。甘い言葉をことじとくかわし、強引な手なんかは通じないと思いします。…もし姉さんを落とせる男がいたとするなら僕はその人を尊敬します。けど同時に殺意も抱きます。恋愛系は僕が認めたくありません、よつて却下です。

と、残るのは意味無しの異世界トリップ。これが最も可能性が高いです。定番でいうならそういう場合は草原や森に落とされて、強制戦闘フラグです。姉さんなら混乱しながらも敵をねじ伏せれそうですね、そこらへんの心配は無用です。姉さんならなんだかんだ生き延びてると思います。こちらに戻つてくる方法も考えてくれてると嬉しいんですが、探してくれてますかね？素直な所がありますから変な考えを植えつけられて帰らないなんて言つてなればいいんですが。

そうなつていいなら僕が迎えに行かないといけませんね。

そのためなら家を継いでもかまいません、姉さんは必ず見つけます。  
…もしかしたら姉さんは家が嫌で異世界なんかに行つた訳ではあり  
ませんよね？ そうだとしても僕は姉さんをこちらに連れ帰つて見せ  
ますよ。

僕は姉さんがいなければこの世界で生きてる意味なんて無いに等し  
いんですから。

「あ、彰…」

姉さんの事を考えている時に他人から邪魔されると腹立たしいです。  
何ですか、正臣。

「全部…声漏れてる…ぞ」

……？

何か問題が？

「いや、…その…なあ？」

「そ、そうね……」

正臣と心が顔を見合わせて静かに呟く。

「システム…」

失礼ですね。

「あやああああああああ…？」

「あやあああ…！」

正臣と心、失礼な発言は控えてください。殴りますよ？

「す、既に……殴つてゐる……」

正臣が頭のてつぺんを押さえながら反論の声を漏らす。

「いいですか？僕は姉さんが好きなだけであつてシスコンではあります。その所を気をつけただかないと僕の名誉負傷に繋がります」

「……いや、だからそれシスコン……」

またもや失礼発言をしようとは、殺されたいんですか正臣。これでも人の殺し方は知つてますよ？僕の家柄が何か知つていますよね？

「～～～～～ツツ……悪かつた……！」

頭の上にたんこぶを2つ作り上げた正臣を凄み、座りなおす。邪魔が入りましたが続けましょ。

まず姉さんの居場所は異世界。よつやく手がかりは掴めました。問題は異世界の行き方です。

姉さんが消えたのがデパートの3階ですからそこに行けば何か分かることでしょ？

いえ、その可能性は多分低いですね。異世界へ行くきつかけなんていくらでもあるでしょう。世界は広いんですから。

となれば、まずは全国の行方不明者事件を洗いましょう。きっと何か分かるはずです。

そつと決まれば警察から全国事件名簿を借りましょ？

「正臣、心。僕は今から人生初学校の抜け出しをします。先生には

やつに置いてください。あとと見逃して貰えるはずですから」「黒野さん。お前は呪縛のめをしてお隣の黒野さん。鬼隣のき連

まつて首から上が消えるぞ」

「じめの間はいまだにあたたかくな

「人の話を頼むから聞いてください。俺、死にます」

「3度も言わせないで下さい。黙つておいで下さいね」

死ねつてか!?死ねつて事か!—

頑張ってください

…」ん齧生かめあああああ！！！

泣き叫ぶ正臣と震える心を置いて屋上から飛び降りる。

軽く30メートルはありますが、この程度問題ありません。

方塊を描るかずほとの比重を打て方塊は足を一にすると立派と警察署へ向けてレツツゴーです。

そういえば、まだ家がそうゆう家系か言ってませんでしたね。

別は種類はする家系でもあります。言つてもいいでしょ。うん、

僕らの家系は……。

「おい、彰一。てめえどこ行く気だー？次は私の授業だぞー、出な  
かつたら警察署に先回りするぞー」

憎き同じ家系の鬼塚。

「どうで話を盗み聞きしてたんですか。

数階上の校舎から鬼塚の声が降り、授業に出なければ全てが駄目になつてしまつような脅威をせられたので皆マ校舎に来ります。

すみませんが家系の話はまた今度にさせて貰います。  
今は戻らないとまずいです。ではさよなら。

その後、教室に戻るとギザギザ板の上で正座をさせられている上に膝に止まで乗せられている正臣<sup>馬鹿共</sup>と心が廊下にいました。

勿論僕も同じ目に遭わされそうになりましたが鬼塚をうまく説得、  
買収して逃れました。

番外編・見習いの弟（後書き）

完璧なるシステム。

次回は本編に戻ります。

話の内容に少し他小説が含まれています。  
お気づきいただけましたか？

第十七話・兎羅こじ連珠のあらすじ (漫畫)

少し短めです。  
と書つか説明文が多めです。

## 第十七話・見習いと傭兵のある一日

「リードー！そつち行つたよー！」

「分かつてゐ、一撃で仕留めるだ」

薄暗く木が生い茂る森の中、1つの木に赤い血が飛び散る。赤い血を振り回したのは、リードの紫色の大剣を体に突き刺すオークと呼ばれる大きな獣。

現在、ギルド依頼遂行中。

今回の依頼は、オークの退治。オーカは知能が低いが力の強い獣の事。見た目は熊によく似ている。

「お見事」

「当たり前だ」

オーカに刺さつた剣を空間に飲み込ませて、退治成功の証拠であるオーカの死体をギルドカードに記録させる。

ギルドカードはギルド内での身分証明と共に、記録装置の役目も果たしている。魔物退治の時もリードはギルドカードに記録させていたらしい。

魔物退治と言えば、あの日から既に1週間が過ぎた。

失態を犯してしまい、翌日は羞恥に塗れたがリードは何の変わりも無い様に接してくれた。

その優しさが胸に染みて、涙腺は緩んだものの涙は見せなかつた。それからといふものの、今はギルドで依頼を淡々とこなしつつお金をためている。

5億もあればいいんぢやないかと思つたが、貯めておいて損は無いしもうすぐこの街ではある大祭が行われるといふ事で折角だから参加してから他の街へ行こうと言つ事になつた。

リードは私の事について何も聞いてこなかつたが、内心では疑問がたくさん募つてゐるはずだ。帰る時にもなつたら語つてみよつと思つ。

「リード、もう言えばさ…大祭つて明日だつけ?」

「そうだ。だからここで行つ依頼もこれが最後だな」

「そつかー。名残惜しいなー」

戦い終えたりードはもろに浴びてしまつた返り血を手で拭いながら言う。

…むしろ血が広がつてますよー…。

ちなみに私は勿論戦つていません。

リード曰く、お前が武器を持つと危なつかしいから持つな。との事。泣いてしまつた夜にお説教として盛り込まれたその言葉に逆らえるはずも無く、今はナイフも針も取られて丸腰状態。

小さい頃から武器と一緒に育つてきたような私は違和感ありまくりで生活しにくいですが素直に従つてます。

男に守つてもらひ…と語つか人に守つてもらひなんて無かつたから…守る事はあつても。

う、嬉しい…?と言づか…何といつか…。

ラブコメに少し憧れてたからな…。一生叶う事ないと思つてた夢が思わぬ形で叶つた!これでも一応女の子だから!と言づか私にはまだ女の子という思考が残つてたんだな…うん、とつくに消え去つたものだと思ってた。

『いいか、お前は確かに強いんだう。だが殺す事はやめろ、血で自らの手を汚す事の醜さは俺がよく知つてゐる』

かつこいい台詞だが現実に語づ台詞を見た人などいない。それを言つてのけるなんて流石異世界。恥ずかしい台詞をさらりと吐きますな。

肝に銘じておきますよ、リド。

「じゃあ帰りつか」

「そりだな、足元気をつけりよ」

「子供じゃないんですねけど……？」

急ぎ足で森を歩いていく。

足元には雑草や木のツタが無遠慮に伸び、足を絡めとらうとする。まあ、普通に考えて避けれますよ？

ひょいひょいとかわして森を進み、ルーメンのギルドへと戻る。

「ギルド到着……。つて何かいつもより様子が騒々しい……」

「大祭が近いからな。ギルドは稼ぎ時なんだよ、準備や要人の護衛やらで仕事が入ってくるんだ」

いつもよりも声のトーンを高くして笑い声をあげるギルドメンバー。

その顔はやる気に満ち溢れている。

大祭つてどんな事をするんだろ。

「大祭での主なメインは音楽だ、だから楽器の運びや雑用なども入ってくるがそれでも気前の良い客なら金を弾んでくれる」

「そりなんだ。大祭つて面白そうだね」

「そうそう、ちゃんと明日は開けとけよ？俺が案内してやる」

「それは楽しみなんだけどリドつてこの街初めて一つて言つてたの嘘だつたんだね」

「う……それは……」

「いいよ、聞かない聞かない。そりがんなさんな」

この数日で特にといった変化は無いもののリドとの距離感が少し狭まつた気がする。

前と明らかに違う雰囲気がリドと私を取り巻いている。

前は少し警戒の色を交らせてはいたが今はリドに對しての警戒が弱まり若干明るい雰囲気が醸し出せている。

「コン、とにかく明日は開けて置けよ」

そう言つとコドはカウンターの方に走つていった。報酬の受け取りだらう。

にしても明日は開けとけ…って別に用事なんて、ギルドで作らうと思わない限り無いけどな。

まあそれはともかくリドが案内してくれるらしいし明日は楽しもう。お祭りなんて久しぶりだ！

えつと… 小さい頃に今の内に思い出作つておこでつて父さんに言われたとき以来かな。

ふわふわ綿飴がおいしくて印象に残つてゐる。こつちでは屋台とか出るんだらつか？だとしたら全部制覇したいな。

「あの…コンさん、ですよね？」

「ほえ？」

頭にりんご飴やチョコバナナを思い浮かべながら明日の事を考えていふと唐突に声をかけられる。

振り向くと、小学一年生ぐらいの男の子が立つていた。

銀髪に碧眼に天使のような笑顔を浮かべている。何この可愛い生物は。

背中に白い羽が生えていても不思議じゃないぞ。

「コン… ハマーさん、ですか？」

おどおどした聞き方が萌を煽る。

ほっぺたももちもちしてそうな柔肌だし日本に来たら絶対どこかの  
変態に攫われちゃうね、これは。

「やうだよ、どいたの？」

同じ位の田線にまでしゃがみ、笑顔を浮かべる。  
もち対幼い子用です！

「あの…僕、ミカエルって言こます…」

この子の両親ナイスネーミングセンス！！  
よりによつてまさかの天使の名前！しかも地球の！  
ピッタリにも程がある名前だよ。

「その、僕…実は…」

「リン、報酬は受け取つたぞ。何してる？」

ミカエルが何か言いかけようとしたがリドが来た事で口を紡ぐ。  
私はリドの方へ振り返ると今の感動を伝えた。

「リド、リド！この子ヤバイ！天使みたい！！」

「落ち着け。……迷子か？」

「い、いいえ…。違います…」

「ここは子供には場違いな所だ、来るんじゃない。分かつたら両親  
の所へ帰れ」

「え……。……はい…」

「いい子だ」

リドの顔が笑みに崩れる。

普段は怒り顔か心配顔か無表情しかしないあのリドが…？

不覚にもそれを向けられてるミカエルが羨ましいと思つてしまつた。だつて、ギャップ萌え過ぎるでしょ、う。普段は笑みなんか1つも見せないあいつがふと笑みを零す。何このギャップ、すごいツボ。異世界だからなのか?こんなにも漫画やアニメの中の存在でしかなかつた様々な要素を味わえるのは。

「…リド、私にも笑顔向けてくれません?」

「は?」

「いや、ギャップ萌えを生で味わいたくつて…」

「訳分からん。それよりも帰るぞ」

「いたた、引っ張らんといてーな」

「何語だ、それ」

首の襟を掴まれて引きつられようとしてギルドを出ぬとい、ドサリと落とされた。

…もうお尻打つたあ。

じんじんと痛みの走るお尻を押えながら立ち上がるとリドが怒つているような感じで田の前に立ちはだかる。

…何故!?

「リン、やつきの子供と何を話してた?」

「いや、血口紹介…的なモノを」

「何故だ?」

こつちが聞きたいわ!!

などと言えたらどれだけ楽でしょう?

私は怒つているリドにだけは逆らえない。

有無を言わさない感と威圧感がビシビシ伝わってくる。

だから…いや…いつの時は触らぬ神に祟りなし。黙つてしましょう。

「……はあ。盜聴術を仕掛けられたのに気づかなかつたか？」

「……！」

「何い！……盜聴術だと……！？  
いつの間に、つうか何故！？」

「俺に帰れと言われた後健氣に術をかけてたぞ。まあ一瞬で解いた  
が」

最悪だ……。

まさかこの私が盜聴されているのに気づかないなんて……！恥にも程  
がある……誰か私の頭を殴つてください……！

まさか刺客が子供だつたのとこの半年の平和ボケのせいですか！？  
あああああああ……！鉄壁鉄板面と恐れられていた私があああああ……！  
子供であつても容赦なく刃を向けていた私は……この半年の内に消え  
たのか……。

それが嬉しいような、悲しいような……ふつ、これが成長を見守る親  
の心か。今は思いつきり使う場面違うけど。

向こうにいた頃は敵であれ友達であれ家族であれ敵意あるものはね  
じ伏せてきたし軍隊とかも戦つたなあ。

今はそんな闘争心消えてるし何より従おうという氣無い。

私は半年の平和な日々で人間らしさを取り戻したとか？だとしたら  
嬉しい事は嬉しいんだけどなあ。向こうの方々が何ていうか……。  
……戻りたくないとかでも一瞬考えてしまった自分が憎い。

「いいが、あまり無用心に人に気を許すな。たとえ子供でも誰かの  
刺客という可能性が十分にあるんだ」

「……はい」

リドに諭されている。

私だつてそんな事ぐらい分かつてゐるよ……。いや、分かつてた。半年前までは。

あ～あ本当に平和ボケつて怖い……。

「分かつたならいいが……。じゃあ帰るぞ」

リドが近づいてきて私の頭をくしゃつと撫でる。  
少し照れくさそうに。

「リド、手貸して?」

「手?」

不思議そうに手を差し出すリドの手と私の手を絡み合わせる。  
最近撫でられる事や手を繋ぐ事が楽しい。

触るな制限から解放された反動かな?  
いきなり手を繋がれたりドは驚きに顔を染めたが、大人しく手を繋  
いだ今までいてくれた。

そのまま宿に帰つたところ、宿屋のおばちゃんの視線が氷のようにな  
突き刺さつた。……いい加減失恋の傷を癒してください。

「じゃあ今日はもう夕方だし風呂入つて寝るか」

「そうだね。じゃあ行こうか」

「着替えもつたか?」

「うん」

この一週間で生活日常品を少しだけ買い揃えた。

衣服は王宮の制服だつたし、1着しか持つてなかつたので2・3着  
軽めに動ける服を買つたりこの冬に備えての防寒具をそろえた。  
黒マントは気に入つてゐるが防寒は出来ないらしい。

新しく買った服を持つと宿の側にある公衆浴場へと向かう。う。

公衆浴場は初めて行つた時は銭湯のような所かと思っていたが、まつたくの予想を裏切る所だつた。

あつたのは個室に区切られたシャワー室のみ。

この世界では水に浸かるというのは高貴な神官の沐浴ぐらいで、水を浴びるというのが普通らしい。

温泉好きの日本人としてお湯に浸かれないのは少しキツイ。

「じゃあまた後でな」

リードはその言葉だけを残して消えていった。

一応個室とは言つても男女は別れている。

私は女性用のシャワー室に入り、服を脱ぐとシャワーの蛇口を捻る。頭の上から暖かいお湯が降つてきて全身を濡らしていく。髪が濡れて体全体に水滴が走る。

私は髪をそつと1房救つて掛けていた魔法を指を鳴らして解く。すると髪は流れる水のようにさあつと色を変えて黒へと変わる。

私の…元の色だ。

ぎゅうっと髪を握り締めて決意を再び固く心に誓つ。

元の世界に戻つてみせる。

再び指を鳴らして黒から茶色へと戻す。

そうこねばと思って目の中に指を入れ、コンタクトレンズを取り出す。

魔法を掛けて洗わなくても汚れない魔法を掛けてあるので取り出しあは無用。

だけど魔法をいまいち信じれず確認する事が度々ある。

緑色に煌くコンタクトレンズに再び魔法を掛けて目に入れる。ちなみに目を保護する魔法も。

これはお姉ちゃんから貰つたんだよな、お土産で。

ちなみにお姉ちゃんという人は親戚で学校の先生をやつている。

鬼塚真子といつてとっても美人なのだが親戚の由縁あつてか中々恋人を作らない。

確か学校は弟の中学校だつたつけ。元気かな？彰。

私はシャワーの蛇口を再び反対方向に捻り、上から降つてくるお湯を止める。

近くに常備してあるバスタオルを取つて、体を拭くと最終的には魔法で水分を吹き飛ばす。

勿論髪も完全に乾き、私はポニー・テールに髪を纏める。リドにやつてもらつていらいこの髪型が気に入り今では自分でやつている。

それから新しく買った服：丈の短い紺色のスカートに9分袖の黒いシャツ。

その上から黒マントを着る。黒マントは外せない、もうこれお気に入り。

靴は旅用に丁度いいとされる黒のブーツ。

なんかもう髪以外全体的に黒いぞ、私。なんだこれ習慣か？黒を着るのに慣れちゃつてるから？

ポニー・テールのためフードは被る事が難しく最近ではフードはすっかりお飾りになつてしまつた。

そんな事を考えて外に出ると既にリドが外で待つていた。

「リド、待たせた？」

「いやそんな事は無い。さっぱりしたか？」

「うん、帰ろうか」

「ああ。帰らう」

リドから差し出された手を繋いで宿へと戻る。

暗闇に溶け込んでいく2人の姿を1つの影が見ていた。



## 第十七話・見習いと傭兵のある一田（後書き）

（この歴史書）

ここセーブル大公国は仕切つて いるのは皇帝ですが元々は大公様が治めていました。しかし大公様の弟 前皇帝が大公を暗殺し、國を乗つ取つたのです。それからといつもの前皇帝は自らを皇帝と名乗り恐怖政治で民を押さえつけ、好き放題にやつしていました。國の名前も帝国に改めようとしましたが國民からと大臣からの強い反発でとうとう変えることができず、流行病で亡くなりました。大公には子供がいなかつたので仕方なく前皇帝の子、現皇帝が皇帝の座につきました。変わつたにも関わらず皇帝を名乗つて いるのは國民からの要望で、皇帝の子が大公と名乗るのは許せない、だそうです。そうしてこのセーブル大公国は名前が大公国であつても皇帝が仕切るという奇妙な国となつたのです。

\* 指摘がありましたので補足させていただきました。

## 第十八話・大祭の場で（前書き）

あけましておめでとうございます。  
今年もどうぞよろしくお願いします。

## 第十八話・大祭の場で

まだ昇り切らない太陽の光、空に舞う小鳥の鳴き声、横で規則正しく眠る人。

朝、目が覚めたときの感想はたつたの3つだがそれがとても幸せに感じられる。

私はまだ重く圧し掛かってくる瞼を擦りながらベッドを降つる。床の冷たさが素足に直接伝わり、寒さに震える。

私はベッドの反対側に回り、横で寝ているリードの顔を覗き込む。まだ寝てる事を確認して耳を少しだけ触る。

前は触りすぎて起こされたのでちゃんと学習しますよ。止めようと思いましたが余りのもふもふさに止められなくなりました。絶妙すぎるもふもふ感…。

少しだけ触った後に、身なりを整え壁に掛けてある黒マントを着る。

「よし…。そろそろコードを起し…」

もふもふ感を体験してから少し時間を置いて起しす。  
これはもう口課です。

「…普通に起しすのもアレだし…」

うん、つまらない。

「…リードは…アレだな」

私はまず、リードを覆いかぶさる布団をむとすと掴む。

そしてお約束展開、布団を一気に剥がす。

冬の冷氣をもろに浴びたりードは一瞬で目を覚ます。

「…………リーン～？」

寝た状態で私を睨みつけるリド。

「やばい、これ説教フラグだ。

私はいち早く察知するとその場から逃走を開始。ものの数秒で捕まえられました。……獣人足速え……。

そこからはまた正座させられて、しつかり叱り付けられた。

「お前は何度言つたら分かるんだ。普通に起こせ、何故違つ事を追求しようとする？」

「そこはほら……。」期待に応えて……

「俺はそんなものを期待したことは一度も無いがな。いいか、明日からは普通に起こせ。これ、もう何回も言つてこるだ

「えー……と、リドの普通？ それとも私の普……」

「俺のだ」

「……遮るなんて酷い」

「好奇心から聞いてみるがお前の普通は？」

「うん？ 夢の中でふらふらしてると異様な殺氣が襲つてくるから曰を覚ますと両親が武器を持って私に襲い掛かってくる

「分かった、今の質問は忘れてくれ。俺は聞かなかつたことにした

い

「了解

何はともあれしつかり起きたリドは身なりを整え始める。

……リドって自分では気づいてないみたいだけど結構寝起き悪いんだよね。

普通に起こそうと体をゆすりつても中々起きなかつたり声を掛けても無反応だもん。

だから普通をしても無駄だから今のような事をやらなきゃ 一発で起

きない。

「よし、今何時だ?」

「今は丁度7時」

「もうすぐ大祭開始の合図が鳴るな」

そう言つてにんまりと笑つたリドは窓の方へ駆け、窓を開けて乗り出す。

私も窓に近寄り、外を見てみると今日はいつもよりたくさん的人が大通りを歩いていた。

私と同じ旅人のような服装をした人やいかにも傭兵ですといった感じの鎧を着けた人などがいて市外からもたくさん的人が集まっているのが分かった。

そして中央の広場では人が溢れかえっている。

大祭つて凄い……！

そう思つて見ていると、突如鐘が鳴り響くような轟音が市中に広がる。

その鐘の音と共に人々が騒ぎ出す。何処からか音楽も鳴り始め、一瞬でお祭り騒ぎになつた。

「す、凄い……」

「だろ?俺も初めての時はお前みたいになつた。さ、行くぞ」

「え……、ちょ……リド。手……!……?」

「は?お前がいつもすることだらうが」

不意に手を繫がれてひかれる。

そりやあ自分から繫ぐ事はしょつちゅうだけどや……。

リドからなんて滅多に無いよ?

心臓が驚くから勘弁して下さい……。

そのまま外に出ると屋台が道の両端に隙間無く広がり、酔わぬ酒を飲む人の姿が目に入り込む。

（お祭りだ…！何年ぶりだらうなあ…、あの時はたいして楽しむ事なんてできなかつたけど今日は楽しめるんだ…）

我ながら子供だと思つよつなはしゃぎ方でその光景を見つめる。リドと繋がれた手を今度は私が引つ張つて屋台に近づく。

「おう、らつしゃい。カツブルかい？熱々だねえ…」  
「なッ！？ばつ…カツブルじやない！」  
「お兄さん…、怪しそ満点だよ～？照れなくて良いから…」  
「違いますよ、おじさん。カツブルじやなくて傭兵とその雇い主、です。今日は無理言って案内を頼んだんですよ」  
「なんだ…、お嬢ちゃんの方は慌てないのか。つまらんなあ…お兄さんの事嫌いなのか？」

「とんでも無い。大好きですよ、好きでもなきや一緒にいませんよ」  
「ふ～ん。良かつたなあ、兄さん」  
「…店主、あんたいい性格してると」  
「はつはつは、どうも。それよりおっさん特製唐揚げはどつだ？」  
「買います、食べたい！」  
「…お嬢ちゃんは色恋よりまだ食い意地のが大切なんだな」

屋台のおじさんとリドとの話がよく分からなかつたけど、まあいつか。

おじさんから唐揚げを値切つて買つと、周囲にいた人からおじさん  
が哀れみの視線を受けた。

何故だ…、300「から20」にしたから。  
案外値切られる事に慣れていない屋台の人間は値切りやすかつた…。  
城下だつたら値切る事なんてできない、むしろ値上げされる。

ふ…ちよろかつたぜ。

「…お前は鬼か」

美味しく何かの肉の唐揚げを食べているとリドから呆れたような視線を受けた。

「失礼な、ただ値切つただけではないか」

「その値切り方が鬼だつて言つてるんだ…普通あんな風に値切るか？」

リドが大きく溜め息をつく。  
うん、少し回想に入ろう。

『おじさん、高い。そこは値切ろ!』

『え…？いや、値切るつて…そんなことは…』

『見たところ原材料は50㍑程…。それを300㍑つて高い。騙し金も含めて10㍑』

『な、何故それを！？しかも安すぎると…』

『じゃあ20㍑でいいよ。私の良心からで』

『既に値切り方が斬新なせいで良心も何も無いと…』

『で、値切る？』

『いや、それは無理…』

『値切る？』

『え？だから無…』

『値切る』

『断定！？』

『値切れ』

『もう命令形なんだけど！…分かった、値切ります…』

…てな感じ？

いやあ押しに弱い人でよかつた。

城下での買い物スキルが思わぬところで役立つたぜ。

はふはふと熱い唐上げを頬張りながら幸せな笑みを浮かべる。

それを見ていたリドも心なしか笑みを浮かべたような気がした。

そう言えば、この肉つて何なんだろ…？無駄においしいけど

「リド、この唐上げのお肉つて何？」

「…唐突だな。それはオーラクだ。昨日倒した」

「へえ。美味しいね！」

につこりと笑つてリドの方を向くと、リドは少し驚いた顔をしながら口元を緩めてああと呟いた。

その顔が嬉しくて頬が赤くなる。

リドの笑つた顔は好きだ。

私の手に入れた笑みとは全く違つて温かみがある。

私の笑みは大抵、作り笑顔か愛想笑いぐらい。

けどリドといつてからは自然と笑みが零れる事があるようになつた。それがリドと同じ笑みなのかは分からぬけど私からも笑みができる事がわかつて嬉しかつた。

もしかしたらこの世界に飛ばされた理由つて私に人間らしさを取り戻そうとさせてくれた神様の粋な計らいかな、なんて。

そんな事を考えるまでにリドといつて私は人間らしくなつていく。

「リド、広場では何があるの？」

「広場は音楽会が開催されている。見に行くか？」

「もちろん！」

人混みを搔き分けながら広場の方へと進み、広場がなんとか見えるような所へと来れた。

広場ではステージのような所で楽器が置かれ周りの人々は何かを待つているような面持ちでステージを見守っている。

「あの、すいません。今から何が行われるんですか?」

隣の女性の人に話しかける。

すると女性はふわりと恋する乙女のよつに顔を赤く染めながら笑つた。

「歌姫様のステージに決まってるじゃない!…あの方…、今日はまたまた用事があつてルーメンにいらしてたらしくて…。今日は特別舞台を披露してくれるらしいの…!」

興奮したよつに話す女性に多少引きながらお礼を言つ。

歌姫か…。そんな風に呼ばれるなんてよつぽどの歌上手なんだろうな。

少し楽しみかも…。

「ね、リド聞いた? 歌姫だつて…」

リドの方を振り向きつつ話しかけるとリドが驚いたよつな顔で固まつていた。

その顔には尋常ではない冷や汗が流れ、心配になる。

…どうした、リド。

「…リド?」

もう一度話しかけるとコドはやつと笑ひいたよつに私の方をゆっくりと向く。

「あ…ああ。何だ?」

「だから歌姫…」

「言ひな…!」

ビクリと体が跳ねる。

リドがいきなりの大声を出すなんて本当にどうしたんだ?

「あ、悪い…。いきなり怒鳴つて悪かった…。気にしないでくれ、それよりかそのフード貸してくれないか?」

「フード? いいよ

「すまない」

ナイフでざつくりと私の黒マントのフード部分を切り取ったリドはそれを自分の頭にかぶせる。

おかげでの虎耳と美形顔が隠れる。

…本当にどうした? 訳の分からぬ行動を説明なしでやられるとこっちは辛いんですけど?

そんな時、突然周りが沸いたように黄色い声を上げ始める。その声は鼓膜を破らんとする程で耳を押える。

微かに聞き取れた単語で歌姫様というものがあつたころからまさかの本人登場?

ゆつくりと顔をステージの方へと向けると、ステージの中央には女神がいた。

…いや、比喩だけどね!?

そう思ふくらい綺麗な人がステージに堂々と立つていた。すらりと伸びた手足にマーメイドドレス。スタイルの良さが強調されている。

白い肌に神様に愛されているとしか思えない程精巧な顔の造り。唇がぷつくりとして髪は少しカールのかかつた金色の糸。

どこをどう取つても完璧としか言ひようの無い美人。

誰もが彼女を見れば感動するほどだが、不思議と私は何も感じなかつた。

その理由は彼女の瞳だらう。

他は完璧すぎるほどで勿論瞳も少しツリ目で綺麗な藍色を浮かびだしている。

だけど何も感じられないような無気力な瞳だった。何か大切な物をなくしたような、そんな瞳だった。

「悲しい瞳…」

そんな声が無意識に漏れる。

その声に反応したリドが不思議そうに顔を傾げる。

「どうゆう意味だ？」

「あの人、随分悲しい瞳してるなあ…つて」

「…何故分かる？」

「私は人の観察に慣れてるからそう感じただけだよ。大した意味は無いから気にしないで」

「……そうか」

リドはそう言うと顔を俯く。

私は再び彼女を見る。

すると、歌姫は大きく口を開けた。

その瞬間、後ろのバイオリンやトランペットが一斉に音楽を奏で始める。

美しい音色が響き、観客は聞き入る。

そこで歌姫はゆっくりと開けたままだった口から息を吸い込み、喉を震わせる。

歌姫の生み出す音色と音楽が混じり合い、とても綺麗な音楽が生ま

れる。

周りはうつとりとした表情でそれに聞き入り、音楽に集中するため  
に瞼を閉じていた。

隣を見てみるとリドも瞼を閉じていた。

「ただ周りが感動を流す中で私だけが感動できずに突つ立っていた。  
人間らしさを取り戻す事が完全では無かつた私にはまだ感動すると  
いう事が難しいらしい。

今まで言葉では感動というものを使っていても感動が分からぬ私は  
は感動ができない。

歌姫の音楽は確かに綺麗だし美しい。けど感動が出来なかつた。  
いや、歌姫の音楽が悪いわけでなくてね？私が悪いんですよー。

（感動…ねえ。リドの優しい言葉には感動するけど…）

昔、誰かから感動すると涙が出ると聞いた事がある。

そして気づいたら歌姫の歌は終わつていて、周りが歓声と拍手を上げた。

漠然とああ、終わつたのかと、そう思つただけだつた。

自分で何もしていなのは変だから合わせて拍手を送る。

「笛さん、こんにちは。サタナキア＝レライエです。今回の歌は新  
曲なのですが楽しんでいただけたでしょうか？」

するとマイクを使って歌姫こと、サタナキアは紹介を始める。  
マイクは魔法で音の拡大をしている。

この世界では、魔法を使って現代で見られるような物もたくさんある。

たとえば、携帯電話と似たような装置が良い代表例だ。

「まだもう一つの新曲があるのですが聴いて貰えますか？」

その声に賛成といつよつと観客の声が響く。

「ありがとうございます。この曲は楽器を変えなくてはいけないの  
で変える為にしばらくお時間を貰いますね」

サタナキアがそう言つと、楽器の伴奏者が下がりステージの奥から  
楽器を持つ人の姿が見えた。

そこで私は少しだけ驚く。

楽器を持ち運びしているのは小さな男の子なのだ。

その男の子は間違いなくギルドで出合つたあの天使のような姿を持  
つミカエルだつた。

重たそうな楽器を持つて並べる係りのようで額に汗を浮かべながら  
頑張つてゐる。

ああ、可愛い…。

「リド…、あの子」

「だな。まさかあいつの差し金か…？」

呟くように言つた最後の方の言葉はよく聞き取れなかつた。

私は必死に楽器を持つミカエルに入つてゐた。

…あれ？あの子つて私に盗聴術かけた張本人じゃ…。

ま、細かい事は気にしないところ。きっと何かの間違いだよ。

…私つて子供好きだつたんだなあ。

「では新曲を披露させていただく前に、紹介させて貰いたい事があ  
るのです」

いきなりの重大発表みたいな事から観客がざわつく。

「実は先日あるパーティからお誘いを受けまして、その皆さんを紹介したいのです」

ざわつきが一層大きくなる。

おお、歌姫の加入パーティか。気になるよね、そりやあ。

ステージの奥からゆっくりとそのパーティが姿を現す。  
私はそこで目を見張る。

……嘘でしょ。

現れ出たのは、よく見知った顔。  
そこにいたのは紛れも無く勇者一行だった。

第十八話・大祭の場で（後書き）

再会なるか？

## 第十九話・勇者との再会

人で埋め尽くされた広場の中央、歌姫のステージにて現れたのは勇者一行。

私は驚きで固まる。

勇者は反対方向に行つていたでしょうが……！

何故ルーメンにいるんだよ……。

ステージに立つのは、あのハーレム4人と歌姫、それにミカエル。

そして……勇者。

あの笑顔の仮面を貼り付け、ステージに堂々と立つている。

しかし口は確かに笑つてはいるが黒色の瞳は全く笑つていない、むしろ絶対零度の冷たさを誇つている。

しかも何故かその瞳が私を見ているとか言つのは絶対氣のせい、氣のせい……。

こんな人ごみの中で私を見ているとかどれだけ自意識過剰なんだ。

私はリドを見て目配せをする。

リドもこの状況の危機感は悟つていたらしく、ひとまず観客のフリをすることになった。

ただし顔は伏せがちのまま。

うう。リドにフード取られてるからなあ……。

「大丈夫だ。いくら勇者でもこんな人混みでお前には気づかない

「と言うか何で私つて勇者に狙われてたんだっけ？解決したよね、確か。探さないで下さいで」

「あつちは何故かお前に異様に執着してたけどな」

「そこまで仲間がいるかな？傭兵でも雇えばいいのに」

「よく分からんよな」

「勝手に断りも入れずにパーティ離脱しちゃったから怒つてるのか

な? プライド傷つけたとか」

「それが一番可能性あるな。しかしどうあっても勇者とは接触しない、」  
「これがお互い良さそうだろ?」

「そうだね。ひとまず観客のフリ」

大丈夫、私は平凡顔だ。

こんな大勢の中にいるんだから溶け込んでいるはずさ。  
ゆっくりと視線をステージの方に向けると、バチリと勇者と目が合  
つた様な気がした。

その瞬間、勇者は口元の笑みを更に深めた。

……『氣の……せい……だつて……』。

じわりと冷や汗が流れ落ちる。勇者なんかが私」ときに氣づく訳無  
い……。

視線が合つたまま外せないでいると、勇者がおもむろにステージの  
中央まで歩いていきマイクの前で止まつた。  
そしてそつと口を開けた。

「……初めてまして、観客の皆さん。私は異世界から召喚された勇者  
リュートとります。まだ正式に発表はされていないのですが知ら  
れている方は知られているでしょう」

とゆうか瞬夜が起きたんだから誰でも知ってるよ。

「実はこの度新たな仲間として歌姫をお誘いした所良い返事を頂いたので我がパーティに加入していただきました。そしてそれを皆様  
に知つて頂くために今回はこのような場を借りて言わせて頂きました」

「そう言つことです、皆さん。ですから私のステージはしばらくは  
行えなくなるかもしません。申し訳ございません」

歌姫が深々と頭を下げる。

歌姫の言葉を聞いた観客は悲しそうな声と雰囲気を醸し出す。

私も周りに合わせて顔を両手で覆う。

多分これでいいはず。

「ではこんな発表のために耳を傾けていただきありがとうございます」と歌姫が言った。

「はい、では新曲の発表をさせて頂きますね。ご視聴下さい」

勇者は何やら歌姫に耳打ちをしてからパーティと共にステージから下がった。

歌姫はそれを見届けた後に再び口を開き、歌い始める。さつきと同じような感動の渦が巻き起こり、私も感動と言つたように瞳を閉じる。

綺麗な声だけど何故か空っぽのように聞こえる。

貴方は何を無くしたの?そんな悲しい声で歌つて何に気づいて欲しいの?

そんな声が途切れる頃に歌は終わる。

周りの歓声と共に。

（やつと終わった…。それにしても他人に依存するような声だったなあ）

うん、誰かに帰つてきて欲しいような縋つた声だった。聞いてて気持ちが悪いなあ。

恋人か家族が死んだのかな。

「…」視聴ありがとうございました。これで終わりなのですが、今日を境に活動を休止しますので皆様にファンサービスをしたいと思います」

満面の笑みで微笑む歌姫の放つ言葉に会場が沸く。  
ファンサービス？

「誰かお1人に舞台へ上がつて頂き、私からの花束を受け取つていただきたいのです」

その瞬間観客は奇声をあげたり、叫び声をあげる。  
「あの、ひるせいです。

「……そして上がつて頂きたいのはそこにいる茶色の髪の女の子です」

ビシリと歌姫の長い人差し指が私のいる方を指す。

「……気のせいか。誰だ、茶髪の女の子って。私はきょろきょろと周りを見回す。

一面茶色だらけ。その中に点々と違う色が混ざつている。

「えつと、黒マントのポーテールの貴方です」

「あれ、私？」

完璧特徴一致？？

何このフラグ…。花束なんて貰つてどうすればいいの？

「…リード」

「……ひとまず行け」

「…う~」

一步足を踏み出すと前の観客が綺麗に道を作ってくれる。

「モーゼか！？」

行かなきやならない雰囲気になり、足を進める。

ステージ前まで来ると階段を使ってステージに上がり、歌姫と顔を合わせる。

いやあ、本当に美人ですね。きらきらしたオーラが舞つてますよ。

「初めまして。聞きたいんだけれど……、貴方がリン＝ヒョードさんで間違い無いわよね？」

「…それが何か？」

「合つてたならしいのよ。ウチのリーダーが貴方に会いたがつてるのは。会つてやつてくれないかしら？」

「断ります」

「…即答なんてツレナイわね」

「とりあえずどうでもいいんで早く花束下さい」

「はあ…わかつたわ。はい」

歌姫の腕から赤い花の詰まつた花束が私の手に渡る。ポワンと良い香りが鼻孔をくすぐる。

ふむ…、何て花？

花束を覗き込むとその瞬間、花から何かのガスのような物が唐突に私の鼻に向けて噴射する。

頭が理解するよりも早く体が咄嗟に花束を投げ捨てる。

あ、危な〜。…少し嗅いだけどあの匂いは…催眠ガスか…。  
なんつーモノ渡すんだ、この人…。

一連の流れを客觀で見ていた観客はハつとしたように我に返り、ブリーゼングを騒ぎ始める。

…うつさい、外野め。

「…なんて事するんですか？」

「ふふ、言つたでしょ？リーダーが貴方に会いたがつてゐるらしいの

「ああ……やつ」

「そうよ。貴方を連れて行けばまたあの人人に会えるもの!」

「……貴方の事情に私を巻き込まないで欲しいんですけど?」

「五月蠅い! あの人と会つためなら私は他人なんてどうでもいい!」

……「いや また典型的な自己中心タイプですね。

「だから……眠らなかつたつてその時の対策はしてあるの」

……してなかつたら随分私も甘く見られていたよね。

「……皆せーん! どうやらこの花束、花が枯れていたらしいんです! 悪い事をしてしまいましたのでこの人にはお詫びをしてきたいと思います! それまで皆せーん、待ってくれますか~?」

歌姫は体を正面に向けマイクで大声を発する。

可愛らしく首を傾げ、有無を言わさない状況へと持つていぐ。

どうしても勇者と私を会わす気か……。

さて、ここで腹を決めるか振り切るか……。考えるまでも無いね、素直に付いてくだ。

下手な事してリドに迷惑かけたら悪いし。

私はリドのいる方向を見て、リドを見つける。向こういつも会話には何となく気づいてくれたらしく緊迫した表情だった。

私は声を出さずに口をゆっくり動かす。

『今日の昼御飯は屋台でいいよね

』 つこりと笑顔で口をパクパクさせる。リドはフードを少しだけ外し、苦笑して口パクで勿論だ、と返してくれた。

じゃあ行つて来る。

「さ、行きましょうか」

「逃げ場無たそうですしこいですよ」

「減らす口…」

「失礼ですね」

素直にステージの奥まで付いていき、ステージ裏に連れて行かれる。そこには案の定、勇者が仲間と佇んでいた。

…不機嫌そう。

瞳はさつきと変わらず絶対零度。頼むからやめてそれ。

「……リン」

呼ばれた声に体が跳ねる。

声冷たッ！？

鋭く光る黒い瞳は間違いなく見つめただけで誰かを射殺せるはずだ。

…ここはひとまず挨拶からか？

少しでもこの雰囲気を緩和したい…。

えーと…、お早うございます？いや、まずは謝罪からか？

挨拶の出何処から戸惑つてるぜ、私よ。

四苦八苦していると唐突に腕を掴まれる。

掴んだのは勇者。そのまま、引きづられるようにして何処かへ連れて行かれる。

え…ちょ、誰かヘルプ…ヘルプミー…！

叫べるはずも無く為すすべもなく大通りの裏路地へ連れてこられた。

…これまさかの説教フラグ？嘘でしょ、説教はリドだけで十分ですよ？

「…リン、お前今まで何してた？」

演技が取れて不満が一気に顔に現れる。

いや、笑顔も怖かつたけどこっちはこっちで数倍怖い…！

「……ギルドの依頼ですが何か？」

何故か対抗する私。

「…あの男は？」

「あの男？リドの事ですか？」

「リド？その男はどこにいる？」

「広場にいますよ。ついさっきまで一緒にだったので」

私は何とかこの尋問から早く解放されたい。  
けど前勇者、後ろ壁。悲しきかな。

「用がそれだけなら私は失礼…」

唯一の逃げ道横から逃げようと脱出を試みる。  
その瞬間、ダーンと大きな音をたてて勇者の腕が壁に伸び、完璧に  
閉じ込められる。

…これはやばい。

目の前勇者で完全ホールド。

「あ、あの…」

「…お前さあ」

顔を俯ける勇者。

どうした？少しだけ何事かと思い、手を伸ばそうとするが唐突に体

が2つの腕によつて搔くよつて抱きしめられ。……はい?

視界が翳り、体に腕が絡む。

額に熱く荒い息がかかる。

……い、これ一体何してゐのさ。勇者。

「いい加減にしろよ…。じんだけ心配したと思つてゐんだ、いきなり消えるし男と一緒にだし……」

甘く耳に囁かれる。

背中にゾクリと電撃のよつなものが走る感覚がした。

「凜…」

静かなのに甘い声が熱い吐息と共に耳に入り込む。

……つてあれ…?

今私の名前の発音が『リン』じゃなかつたよつな気がしたけど…。気のせい…かな?

そ、それよりこの状況…放せ、勇者…!

私は何とか放して貰おうと勇者の胸をじんじんと呴く。すると逆にもつときつて腕が絡まりつく。何故!?

「やつと見つけたんだ…、逃がすわけ無いだろ…」

勇者の顔が私の肩へと沈み込む。

いやいやいや!放してくださいつて…!

重く圧し掛かつてくる勇者の体に潰される…。

「つ、潰れる…」

掠れた様な声を絞り出すと、氣づいてくれたらしき勇者は慌てて放してくれた。

…た、助かった。

力強すぎです、勇者…。

「わ、悪い。大丈夫か？つい加減を忘れた…」

「…まあ別に私が悪いからいいんですけどね…」シモツ

少しむせた…。

流石禁術を一身に受けただけある…。

「じゃあそろそろ帰ります…」

「は？帰るってどーん？」

「広場ですよ？」

「…あの男か？」

「へ、まあ…」

「じゃあそいつなら今はステージ裏だろ。…捕まつてのはずだ

「…？」

リドが捕まつてゐる？

…ダッシュコー！

「お、おい！？待てって…！」

「リドの馬鹿…！呼んでくれれば助けに行くのに…！」

「それ普通男が言つ台詞だろ」

「それより捕まつたつて！？」

「うん？聞いてないのか？」

先ほどのステージ裏に向けて走る中、勇者は涼しい顔で後を追つてくる。

そして額に汗を一滴浮かべてステージ裏に着くと、そこには田を見張るような光景があつた。

「リド様……やつとお会いできました……貴方のいない日々、世界から色が消えたようでした……！」

「放せ、サタナキア！何故お前がここにいるんだ……！」

「愛の力……です……！」

「寝言は寝て言え……！」

椅子に縛り付けられたリドが足にしがみつく歌姫であるサタナキアを足蹴にする光景。何てシユール……。しかもサタナキアの方は恍惚とした表情。……まさかのドM。それにもこの光景は一体……。

「歌姫はあの男……リカルド＝ベラフォルトに心酔しているらしく、今日の舞台はあの男を捕まえるためだつたらし……」

勇者よ、分かりやすい説明ありがとう。それにしてもリドってばあんなに綺麗な人に好かれちゃつて……。お似合いのカッフルですね。

「リド、お母さんは悲しいよ。こんなに綺麗な彼女さんがいて紹介もしてくれないなんて……」

「誰がお母さんだ誰が……こんな変態を彼女にしたつもりも無い！とりあえず助ける、リン……！」

「あ、助けるといえばどうして捕まつたとき私の名前を呼ばなかつたのさ。何かあつたら私の名前を呼んでよ、守るから」

「何が悲しくて男が女に守られなきやいけないんだ……お前は馬鹿か！」

「男女差別反対ーしかも馬鹿って言つたーもつ助けないからーそこ

で一生彼女といちゃついてる！…

「リド様…嬉しいです！…」

「うわあああああ…寄るなあああ…！」

「おお、リドの絶叫とは…。中々貴重だ」

「頼むから助ける、リン！…」

「あともうちょい」

「何があともうちょいだ！…」

その後、ステージ裏をこつそりみていた係員からの話に寄ると、物凄い力オスな光景だつたらしい。

椅子に縛り付けられた男が天下のアイドル歌姫を足蹴に、それを見て笑みを浮かべる勇者と私に少し引いているハーレム。

歌姫ファンの1人だつた係員は泣きながら話してくれた。  
うん、ご苦労様。

第十九話・勇者との再会（後書き）

次回から一気に力オスになりそつ。

## 第一十話・悪夢の再来

「と言つことで私、リカルド様の恋び…」

「そろそろ黙らないと本氣で怒るぞ、サタナキア」

「ああん…貴方に怒られるなんて光榮です…」

サタナキアのステージも終わり、少し話があると言つ事でとある力フェに場所を移した私達は周りから痛々しい視線を浴びている。原因はこの目の前でいちやつく2名。

サタナキアは幸せといったオーラを満面の笑みで表しているが、リドは世界の終わりとでも言つたような沈んだ顔だ。

私はそんな2人とはいかにも他人と言つた感じに優雅にお茶を飲む。勇者も同じように。

あ、ちなみに勇者の周りにくつつくハーレムには宿に帰つていただきました。

帰つていくときのあの恨みがましい視線…、中々の眼力だった。さて、そんな事よりも今はこの状況を整理しないと。

「……でさ、リド。私というものがありながら恋人なんて作つてた訳を言いなさいな。怒らないから」

「まずはお前の頭の治療をしようか。いつお前が俺のものになつてサタナキアと浮氣したなんて事になつた…！」

「まあ…リン＝ヒヨード…私のリカルド様を誘惑したの…！」

「そつちこそ…私のリドを誘惑したのね…！」

「とりあえず黙れえええ…！」

リドの怒鳴り声が店内に響き、店内は静まり返る。ちえー…、少し冗談入つただけなのに。

全く、女心と冗談が分からぬ奴だなあ。

「……はあ……すみませんがまともに話をさせてもらひませんか？」

「ここで、さつきまで我関せずと優雅にお茶を飲んでいた勇者が話に割り込む。

しかも演技が入っているおかげで周りのお客をぢやつかりと誘惑している。

演技の勇者って慣れない……、本性が悪ど過ぎるもん。

「わ、悪い。……えーと……まずサタナキアとは幼馴染だ。小さい頃から一緒にいて、仲が良かつた。そしてだんだん年を重ねることにサタナキアが異様に執着してくる様になつた……んだ」

「それに耐えられなくなつたリドは傭兵となり、離れる事を決意。

だがここでサタナキアに再会してしまつた！……かな」

「お前は人の心でも読めるのか……？大方その通りだ

「サタナキアさんも間違いないですよね？」

「ええ。リカルド様との出会いはあの雪の降る冬の12月24日15時43分22秒で、会つたときはそれは可愛らしくてまだ5歳4ヶ月の時でした。お話し相手としてリカルド様と出会いお会いしたときから一目ぼれでその思いは一向に募るばかり……。そしてその思いが止まる事は無いまま爆走していた所……」

「あ、もういいです。黙つてください」

終わりが見えない様な気がしたから話を区切る。

「普通出会いの日といえど秒刻みで覚えます？」

幼馴染なんて美味しいシチューなのにリドの容姿の良さが裏目に出たね。

「……2人の関係は分かりました。では貴方達2人の関係は？」

勇者が指をさした方向は私とリド。  
関係？傭兵とその雇い主ですが何か？

「リンは敬語が取れてる上にリドって愛称ですよね？」

「…そこ別に気にななくとも良くねえ？  
細かい所気にするなあ…。」

「リドは敬語が苦手みたいだし、リドっていつのはリカルドが長い  
つて事からですよ」

「……そうですか。では私にも敬語はやめて貰えますか？」

「…別に構わないけど、敬語嫌いが集まるね」

「どうしていつも敬語嫌いが集まる？  
普通敬語って嬉しいものじゃないの？」

「…それでは関係も把握できた事ですし本題に入りましょうつか  
「本題？」

「はい、单刀直入に言ひつと…リン＝ヒヨード、リカルド＝ベラフオ  
ルト仲間に入つてもらえませんか？」

「…悪夢再び！？」

「「嫌だ！」」

リドと私の声が重なる。

何故また悪夢になりそうな事に好きではいらにやいかんのだ！  
リドもサタナキアが勇者パーティにいることから断る。  
すると勇者はにっこりと優雅に微笑む。

「…………やつ、じゃありカルドさんの話は聞けないしリンクが行こうつ  
としてる情報都市への道を閉じようかな」

「「是非お仲間にして下せ」」

お、恐ろしい……

「こいつ脅迫ネタで揺すりつきやがつたー！しかも権力乱用する気満  
々だよ！」

思わず叫んじゃつたよ……ああ、悪夢からは逃れられないの？

「良かつた。実は、宿で待機してもらつてる皆さんは首都に帰るよ  
うに要請を貰つたらしくて今仲間を集めめて」

「だからサタナキアさんを…」

「あともう一人いますよ。ミカエルって言つんですけど」

「ミカエル君……つてことは盗聴術を掛けさせたのは……」

「何のことか」

「あんな子供を刺客に送り込むなんて……やつぱり仲間になるつ  
の取り消…」

「簡単に仲間になるのを止めるなんて言ひませんよね？自分の言つ  
たことに責任は持たないと」

「くッ……言質を…」

やつぱり演技背負つても悪どい勇者。

もう魔王やつてよ、魔王職の方が絶対似合つて。

「あの4人はだから宿に戻らせたのね」

「すぐに戻るよつにと言わてるらしく多分今頃は帰路についてま  
すよ」

「薄情ね、仮にも仲間だったんなら見送りぐらいすればいいのに

「元々仲間は1人で良いと言つてしましましたから」

サタナキアはやれやれと呆れたように肩をすくめる。

「本当に薄情というか何というか。

仮にも1週間行動を共にした相手ならもう少し労つてやればいいのに。

じとりと勇者を睨む。

「…睨み返された、何故笑顔で睨める?・今どうやって睨んだ?

「…リン、悪い。勢いで仲間になると、自分が本当にいいのか?」「どうゆう意味です?何故リカルド様がリン=ヒュードに決定権を委ねるような事を?」「リードの今の雇い主だからだよ」

「え…?待つてください、それはおかしいです。だってリカルド様の雇い主は…」

「サタナキア、お喋りが過ぎる」

「…あッ、う、うめんなさい…」

「おおっと、今の怪しい発言。……と思つたところで問い合わせる気はさらさら無いけど」

「お前のそういうことは感心が持てる」

「基本厄介事嫌いなもんで」

少し気になつた発言が出たとしても追求はしない。

こちらの世界に来てから好奇心で動きまくつてた事あつたけどそのせいで痛い目に見たこと何回もあるしね。

例えは少し変わつた地形が珍しくて突き進んでたら「魔物に取り囮まれたり、怪我した老人に道案内してたら盗賊に襲われたし。

…全部完膚なきまでに叩きのめしてやつたけど。

それに今の発言はどうことなくおうナビ私に関係の無い話らしいしどうでもいい。

他人の厄介事に関わるとろくなことが無いなんてことは今時小学生でも知つてゐる。

私はまた田に前でいちゃいちゃしたした2人を尻目に勇者に小声で話しかける。

「それよつと、勇者。仲間になる事は承諾したけどこれから何処行つて何するの？」

「ここから少し迂回してフィルカ村に向かい、そこから船で魔族の陣地じる辺境に行く」

「なるほど、真正面攻撃でなく背後からの攻撃…。考えるね」

「そこまで奴らを舐めてるつもりも無いからな。一気に叩く…事は出来ずとも不意打ちは可能。相手に心理的圧迫をかける」

「流石、勇者様。とでも言つておくね。私はなるべく傍観者に徹するから頑張つて」

「やっぱり参戦する気はないんだな？」

「うん、だから守つてね」

「……はあ、分かつた」

正統派勇者なら真正面から挑んで散るのがモットーだがさすがはこの規格外勇者。

作戦を練り、いかに相手を倒す事ができるか考えてる。

こうゆうの好きだわ。

たとえ失敗した事も含めて相手に確実に止められる一撃の作戦を練る。

軍師であっても中々考えられない。

改めてこの勇者の凄さを感じる。これなら魔王打倒も夢じやないかもしれないよ？

（だとしたら…キーパスで違う帰り方を探す必要は無くなつた。このまま魔王の大切な物とやらに頼つてみようかな）

余計な寄り道が消えた今、目指すは魔王打倒か。

…けど大分強いつて聞いたしなあ、私も腕にはそこそこ自信があるけど不安要素は消しておきたい。

勝てなくても確實に魔王の大切な物を手に入れられれば私はいい。勝ちに執着する事なんてない。目的を果たす事のみに執着してきた。

そのためには、やはり囮が必要か？

…はあ、とりあえず旅をしながらでも効率よく魔王を翻弄しつつ大切なモノを手に入れる方法を考えよう。

…我ながら非道な事を考えるな。

ま、こんな考え方を非道と思えなかつた前の私がおかしいのか。

「じゃあそろそろ行こうか、リド」

「は？」

「屋台だよ、屋台。屋台なんて久しぶりだから楽しみにしてたのー！」

「そういえば言つていたな。分かつた、行くか

「え、じゃあ私も行きます！」

「私も行きたいですね」

「勇者とサタナキアさんは表に出たらまともに歩けなくなるでしょ」

「そうだな、サタナキアは歌姫だし勇者は勇者だからな」

「そ、そんな…。私が…もう不要だとおっしゃるの？リカルド様…」

「…今更なんだけどサタナキアさんつて被害妄想強いよね」

「本当に今更だな。お前ならとっくに気づいてるとおもつてたんだ

が

「私はそっち系には疎いほうみたいでね」

ぶつちやけると私は彼氏いない曆イコール年齢だ。

というか作りたいと思つた事すらなかつた。

両親が大恋愛の末に結婚し、現在でもラブラブなため暑苦しいと思続けた結果かもしれない。

仕事中はそんな事無いのにプライベートスイッチが入つた瞬間ラブラブになる。

恋愛に関する本は読んでいたので恋愛についての関心はあるがこんな恋愛をしてみたいと思った事は無い。

あくまで空想、と割り切る事が多かった。

勿論恋愛だけでなく違うジャンルの本も読んだ。

そこで今思い浮かぶのは異世界トリップものの本だ。

恋愛やアクションの方面が多いこのジャンルは読んで面白いとは感じたがあくまで空想だったので現在こんな事が起きてるなんて空想も馬鹿に出来ないなと思つていて。

ほんと、馬鹿に出来ないな。

「じゃあサタナキアさんと勇者、また後でね」

「待ち合わせは宿でお願いします」

勇者とサタナキアを置いて、カフフを出ると一面に広がる屋台を回つていぐ。

見知ったような屋台が一つもないけど良い香りが漂つてくれる。

「美味しい～、おじさんこれください～」

「おつと、嬢ちゃんやめときな。これは子供の買える代物じゃねえよ。金貨2枚とこ超高額な高級食材のフライなんだ」

「ふつふつふ、舐めてもらつては困る。……はい」

ポーチから金貨2枚を取り出して差し出すと屋台のおじさんは驚き田を見開いた。

「なッ！嬢ちゃんを舐めてたか…、どつかの貴族かい？」

「旅人だよ、稼いだのさ」

「そうか…、まあ金さえ持つてりや小さくとも窑だ。ほりよ」

串に刺された揚げ物が差し出され、一口かぶりつぐ。

うん、うまい。

そしてその後も屋台で食べ物を買い捲る。  
両手が食べ物でいっぱいになつてきたその頃、いきなりある屋台からブーリングが巻き起つた。

「ふあひ？（なに？）」

「分からん、言つてみるか？」

「むぐ（うん）」

言つてみると、そこははどうやら射撃屋らしく中々的が倒れないとクレームを受けているらしい。

ほほう、射撃の典型的なクレームだね。

しかもクレームをつけているのは見るからに不良と言つた感じの男集団。

むむ、店主は可愛らしい女性。これは頂けない。  
この正義のヒーローが助けてしんぜよ。

「ひほ、ほえもつへへ（リド、これ持つてて）」

「え、おいちよ…待て」

「パリモグモグゴクン……ふはあ、大丈夫大丈夫！」

両手に持つていた食べ物をリドに預け、クレームをつける男集団の方に寄る。

「まあまあ、クレームなんて大人気ないぞ。的が倒れなかつたのはあんたらの腕の悪さが原因だろ？」

「何だとこのガキい！…」

「射撃つていうのは狙うところを狙えば倒れるもんなんだよ。それを出来なかつたくらいでピーピー五月蠅いんだよね。大人しく金を払つて立ち去りな」

「「」のガキッ、ゆつ」」とかいて……！……

「止める、馬鹿」

集団の中で一番大きい体格の男が殴りかかるがリーダー格な男がそれをとめる。

可愛い女性をいじめるなんていけません、ちょっと心を鬼にしてます。

なので若干口調がおかしくなつておりますが気にせず。

「…確かに俺達の腕の悪さもあるかもしけないが的には細工がしてあるんだ、絶対に倒れないように」

「ふむ、やはりこつちの細工も定番か…」

「的の後ろに鉄がはめ込んであって絶対に倒れないんだよ」

私はそんな言い分を無視して射撃の銃を取る。そして、射撃に弾を当て込み狙いを定める。

「おい、何やつてる？ 無駄だぞ的は倒れない」

力チリと引き金を引き、的の急所に弾を発射。こつんと的に弾が当たるが確かに倒れない。… て言つたか… まもぶれない。

あー…確かにこれはクレーム付けたくなる。

「言つたとおりだろ？ 分かつたら下がつてろ」

「……しうがない、本気で撃ちぬくか」

「は？」

私は再び銃に弾を詰める。

射撃の銃というのは構造的には単純なもので、引き金を引いてその

反動で弾が出るものだ。

つまり引き金を引く速さによって弾の速さは決まる。だったら話は簡単。思い切り引いて、鉄<sup>じ</sup>と撃ち抜けば良い。狙いを定めて、そのとおりにしてみた。すると案の定、小気味良い音と共に的にぼつかりと穴が開いた。うん、正義は必ず勝つ。

「やつた、撃ち抜けた。お姉さん、商品頂戴」「え…え、う、嘘…」

鉄<sup>じ</sup>と貫いた銃の威力にお姉さんは呆然。

何を呆れるのやら、元々銃つてのは人体の骨もを撃ち抜くために作られたんだ。

その銃が鉄を撃ちぬけないはずない。

「あー、倒れなかつたけど撃ちぬけた賞が欲しいな~」

「ノーノーノーノー、ごめんなさい~！」

にっこりと笑つて商品のおねだりをすると何もくれないままお姉さんは逃亡。

いつの間にか男集団も消えていた。

…ひとまず解決でいいやあ。

私はリードのところへ戻ると、再び食べ始める。

「…お前は、本当に謎だな」

「ほうはな~? ( そ う か な~? ) 」

「…ほら」

「ふむ? ( うん? ) 」

「撃ち抜き賞だ」

差し出されたのは綺麗な琥珀色のネックレス。  
いつの間に買つてたのさ？

「あいあとお（ありがと）」  
「どういたしまして」  
「モグモグ…よし、今度はあの屋台…」  
「まだ食べる気か…？」  
「当つたり前よ、さあ倒れるまで付き合つてもいいからねー。」  
「お前…、太る…、ぐはッ…」  
「はいそこ女に向かって何てことこの、めジ

私は食べ物を両手に抱える中で、琥珀に輝くネックレスをぎゅっと握り締めた。



## 第一十話・悪夢の再来（後書き）

だんだん距離の縮まる2人。

（補足）

5億円＝金貨50枚分。

つまり金貨一枚で100万円の価値。  
通貨は金貨とし札、し貨のみ。

し札一枚で1000円。し貨一枚で10円。

…金貨使い勝手悪い…。

\* 1月8日補足\*

第一十一話・子供は天使（前書き）

ハーレムはゲストキャラとなってしまった…。

## 第一十一話・子供は天使

大祭が終わり、ルーメンに朝の光が射す頃に私達はルーメンを立ち馬車でフィルカ村へと向かつて行った。

馬車の中では、勇者が瞼を閉じて瞑想しサタナキアがリドに寄り添い甘い雰囲気を出すのをリドが諦めたような顔をして見てい。

それと、馬車の揺れで眠りを誘われたミカエルを私が膝枕している。客観的に見てみるとなんてカオスな光景なんだろうか。

とか思つたが、ミカエルの寝顔が天使というよりも神様化しているせいで不思議と全てがどうでもいいように感じる。

ミカエルとは今日の朝に出会つた。

勇者の仲間になつてゐるのは勇者に命を助けられたからだそうで、その恩を返すために雑用として入つてゐるらしい。

昨日のサタナキアのステージで楽器運びをやつていたのもそれが原因。

そしてギルドで会つたのも案の定勇者の差し金で、街で見かけた私を探れとか言われたらしい。全く意味が分からぬ。何をしたかったのさ、勇者。

その際に何故か懐かれてしまつた私はミカエルと仲良くなり、現在に至る。

「うん……ふああ、リン……さん?」

「うん? 田え覚めた?」

「…はい、おはようございます…」

「おはよう、よく眠れたかい?」

「おかげさま…で? …つてうわああー?」「ごめんなさい…!」

ミカエルは現在の状況に驚いたようで飛び退く。

癒しに逃げられた…。

「どうして逃げるの？」

「い、いえ…あの、『めんなさい…』」

ミカエルはもじもじと顔を赤く染めて、俯く。

「あ、あの…僕…頭、重くなかったですか…？」

そしてまさかの乙女発言。頬を赤く染めた上目遣いは破壊力抜群だ。  
……可愛すぎる！

思わずミカエルを抱きしめる、気持ちは大きなぬいぐるみに抱きつ  
く女の子。

「ああ、もう何その可愛さ！襲っちゃいたい！…」

勢いのままに発言すると、リドが盛大に口け出した。  
…座つてるのにこけるって凄いね。

「…何て発言してんだ、お前はあ…！」

「え、何か変な発言した？」

ミカエルに抱きついたまま首を傾げると、リドが私とミカエルを剥  
がす。  
ああ、ミカエル～！

「お前は…！自重と言つ言葉を知れ…！」

「う～、分かつたから…どいてそ！」

ミカエルの前にリドが立ちはだかり、抱きつけない。  
手をわきわきさせてミカエルに再び抱きつこうと企むが僅か3秒で

無理だと痛感する。

話を適当に受け流したせいか、リドが説教モードに入る。

「…そこに正座しろ、リン

「……はい」

馬車の上で正座なので体が揺れて、バランスが取りにくい。  
くッ…これだけでも既に効果ありだよ！

「いいか、お前は何度も言つよつこ……」

決まり文句から始まる説教は延々と続くのがお決まり。  
だが、今日はいつもと同じようにさせない…そう、何故なら今日はサタナキアというお人がいるからだ！

サタナキアならリドの説教を喜んで引き受けてくれるはず。  
説教を他人に擦り付ける生贊作戦を思いついた私は早速サタナキアの方を横目に見てみる。

すると、サタナキアはリドに熱い視線をぶつけながら息を荒げ、頬を紅潮させていた。

「嗚呼、リカルド様が私を放置プレイ……ハアハア…。いつだつて私の新しい嗜好を目覚めさせるのは貴方なんですね…うふふ」

でも本能的に関わりたくないと判断、全力で目を逸らす。  
戦場以外の所で始めて本能が危険を感じ取った瞬間だつた。  
サタナキアは既に色々と末期だ。

「おい、リン？聞いているのか？」

「え…？あ、ごめん。それよりもサタナキアさん見て」

「は？サタナキアがどうし

「

田をサタナキアに向け、リドは固まる。

流石に事の重大さが伝わったようで、リドも全力で田を背けた。

ちょ…リドが原因なんだからリドがなんとかしてよ。

「リド、現実から田を背けちゃ駄目だよ。リドの責任なんだから止めてよ、じゃないとサタナキアさんが新たな境地に田覚めちゃうよ」

「既に手遅れだろ、俺は関わりたくない」

「…雇い主命令、サタナキアさんを止めて」

「それだけはどうあつても嫌だな」

「じゃあどうするの？ フィルカ村に着くまでずっとあの痛々しい姿を見てろって言うの？」

「そ、それも嫌だな…」

苦虫を噛み潰したような顔でサタナキアを見るリド。

…サタナキアは黙つてさえいれば絶世の美女なのに本当に中身が残念だな。

私はサタナキアを極力視界に入れないので、正座のバランスを取る。

「…あの、リンさん。サタナキアさんは…どうしてしまったんですか…？ 昨日から突然人が変わったようだ…」

リドの後ろからミカエルがひょつひつと顔を出して、尋ねてくる。何気にリドの肩に手を乗せている仕草は狙つてゐるの？

「ミカエル君…、とりあえずこいつおこで」

「く…あ、はい」

ぽんぽんと自分の横の席を叩くと、ミカエルがひょいとそこに座

る。

座高のせいでも上田遣いは必須条件。小さい子を見ると息が荒くなってしまうような変態だったら間違いなく理性が飛ぶ。

…あ、私は変態じゃないですよ？至ってノーマル。息が少々上がりしているのは気にしないで下さい。

「あのね、サタナキアさんが突然変わってしまったのには田の前にいるお兄さんが過去にサタナキアさんを弄んだ事が原因だよ」

「お前は語弊のある言い方しか出来ないのか！俺は何もしていない！…」

「またそりやつて否定して！私の事もお遊びだつたならサタナキアさんの事も遊びだつたのね！この外道！！」

「だからお前のそのキャラは何なんだ！いい加減やめろ！」

「リ、リカルドさん…、大丈夫です…！まだ謝ればリンさんは優しいからきつと許してくれますよ…！」

「よし、まずは」の子に誤解させきつている所から謝つて貰おうか、リン」

リドの声が少し震える。

…あらら、そろそろ止めとかないと怒られるな。

「…//カエル君、説明するよりも見せた方が早いかも」

私は虚空を見つめて悶えるサタナキアを見て、覚悟を決める。

…何の覚悟かつて？決まってるよ、あのサタナキアと関わるなんて相当の勇気がいるよ。

こんなに関わりたくないと思う人、人生で4人目だ。

私はサタナキアの隣へと移動し、とんとんと肩を叩く。

すると帰つてきてくれたらしいサタナキアはきょとんと私を見つめる。

くッ……美人に見つめられる事がこんなにも重労働だったとは。

「……どうしたんです、リン＝ヒヨード」

「とりあえずは帰つてきてくれてありがとうございます、早速なんだけどサタナキアさんがリードの事をどう思つてるのか話してくれませんか？」

「まあ……いいですわ、話して差し上げますーそうですね……初めて会つた時に体中に電撃が走つたような衝撃が始まりです……。その見目麗しい容姿に瞳は捕らえられ、体中がこの人の事を大好きと悲鳴を上げた瞬間でした……メイドのマリーに聞くとそれが恋だと言う事を知り、私はその日から恋についての書物をたくさん読みました！それからそれから……！」

いきなりマシンガントークをし始めるサタナキアをミカエルに見せる。

ミカエルは初めて会つた時から思つていたけど賢く、すぐにサタナキアがどんな状態なのか理解してくれた。

その証拠に、苦笑を浮かべている。

「……と言つわけなんだけど理解はして貰えたかな？」

「はい……わざわざ危険を冒してもらつて……ありがとうございます」

「ミカエル君のためなら別に構わないよ。……つとそろそろ止めないと」

私は話をし続けるサタナキアを止める。

止める際に不機嫌そうな顔を表したサタナキアを宥めるのが大変だった。

そうですね、私が悪いです。聞かせて欲しいと言つたのは私でもんね。

「『めんなさい、けど聞くのが辛い……じゃなくて余りにも素晴らしい話が私には難しかったので』

「全くもう一酷いです、折角私とリカルド様の愛の話をして差し上げようと思つたのに……」

「確かに酷かつたです、けどリドを好きなようにしていいから許してくれませんか？」

「リカルド様を？」

「リ、リン！？お前…ツ」

「ええ、お好きなように。ただしフィルカ村に着くまでですが」

一応助け舟は用意しておく。

それでもリドが辛い思いをする事に変わりは無いけど。  
ごめんね？リド。

リドに手を合わせてこれからのかつ難を祈る。

「まあ…なら許してあげますね、わざーリカルド様、一ひらへ！雇い主から許可を頂けましたわ！！」

「呪うぞ…リン…ツ！」

「許してとは言わない、リドよ」生贊

馬車を降りてからの説教が怖い。

だが、今を乗り切れるなら構わない！！

私はいちゃいちゃし出した2人（1人は絶望したような表情だが）を見ないようにして今度はミカエルを膝に乗せて抱きしめる。恥ずかしながらだけど、膝に乗ってくれたミカエルを撫でる。

ああ…本当に可愛い。

「あ…リン…さん…リカルドさん、いいんですか…？」

「いいよ、リドならこれぐらいの苦難を乗り切れるから。それよりもミカエル君の方が気をつけたほうがいいよ」

「ふえ？」

「あんまり可愛す、さると、どこかのおじ様に『君可愛いね、ハアハア…。おじさんの家がすぐ近くにあるんだけど一緒に来ない…ハアハア』とか言われて拉致られちゃうよ」

「…き、気をつけます…！」

「うふ、いい子いい子～」

ミカエルへの忠告は本当に真摯に受け止めてもうこたい。シャレで終わりそうに無いから。

と言ひか実際、私も小さこ頃に同じような体験をした事があるんだよね。

デパートで迷子になつてたら変なおじさんに任せつゝ今までのよつた言詞を吐かれた。

勿論、男の勲章を蹴つて逃げたけど。

私でさえこんな体験をしたんだからミカエルは絶対にこんな目に遭う。

逆に今まで遭わなかつた事が不思議だ。

「あ、リンさん。そろそろ…フィルカ村が見えてくる筈ですよ」

撫でてみると、ミカエルが急に馬車の外を指差す。

私は馬車の窓を開けて、前方を見てみる。

すると、うつすらと民家の並ぶ集落が見える。

あれがフィルカ村？ 海に接してゐるや。

と言ひ事は漁村かな？

「あ、案外早くて助かつた…！」

リドの顔に希望が射す。

よかつた、説教をする氣までサタナキアによつて削られたみたいだ。

私はほつと安堵の溜め息をつく。  
ありがと、サタナキア！

「… それから」

馬車に乗つて以来、ずっと瞑想していた勇者がやつと目を開く。  
その顔には私とは違う安堵の色が浮かんでいる。

「よくこんなに長い間瞑想なんてできたね。私だったら絶対飽きて  
る」

「… 瞑想すると心が安らぐからな、最近はよくしてる

「あー、驚きの連鎖だもんねえ。お疲れサマ」

そう言えば勇者はまだ召喚されてから1週間だ。あまりに馴染み過ぎて違和感無く過ごしていただけ普通の人ならパニックに陥つてゐるよね。

感心…としか言い様がないです。

「… と言つかせつきから演技取れてるけど大丈夫?」ここ一応皆いる  
よ

「歌姫とりカルドは2人の世界だしうニカエルは始めての海に感動中  
だからな、誰も聞いていない。それに別に演技をする必要も無い  
だろう、元々演技は世の中をうまく渡つていくための処世術だった  
上にここにいる奴らは全員俺の本性を知つてゐるし」

「そつか、私は素の勇者の方が好きだからそつちの方が嬉しいよ」

「… つ、そう…か…」

顔を赤くして目線を逸らす勇者ににっこりと笑いかける。

下手に取り繕つてるより素の方が私は好感が持てる。

リド達が勇者の本性をいつ知つたのか分からぬけど、あつと皆も

素の方が好きだと思つよ。

「リンさん……もつフィルカ村に着きますよ……」

いきなりミカエルが興奮して私の袖を引っ張る。

その次の瞬間に馬車の揺れが完全におさまる。

御者席から着きましたと声を掛けられて、一番にミカエルが馬車を飛び降りる。

袖を掴まれていた私も引かれて馬車に出る。

外に出た私の前に広がったのは、数件の木で作られた民家と広場に村の奥に見える海の青色。

地面は土色で舗装されていない。石がころびると転がって転んだら痛そうだ。

木は所々に田に入るが、多いとは言えない。

いかにもRPGで出てきそうな漁村だった。

「綺麗な海ですね……、リンさん」

「そうだね、思いつきり泳ぎたいかも」

「泳ぐのは諦めとけ、そんな時間は無いぞ」

「やつと…解放された…！」

「嗚呼、リカルド様…、もう別れだなんて……貴方の温もりが恋しい…」

私達が降りると、馬車は踵を返して走り去つていった。

「さて、じゃあ船を貸して貰えるように交渉をして行くぞ」

「行動が早いなあ。…村長さんつているのかな?」

「いるだろ、どこかの民家?」

「じゃあ片っ端から民家を漁つてこりつー行くよ、ミカエル君ー」

「は、はい…！」

「待てそこの非常識人間があああーー！」

リドの声は私達が勝手に民家に入つて中にいた村人に上げられた悲鳴によつてかき消された。

## 第一十一話・子供は天使（後書き）

勇者パーティ完成。

勇者＝腹黒チート

魔法士見習い＝非常識と謎の代名詞

傭兵＝ギルドS級ランクの萌え要素

歌姫＝限定の変態

雑用＝癒し天使

## 第一十一話・フィルカ村

悲鳴を上げられ続けて8件目、やつと村長らしき方といふ対面。

村長と会つまでの道のりは長かった。。

民家に押し入り、1件1件念入りに村長がいるかどうか捜索したから住民には悲鳴を上げられるわ、自警団を呼ばれそうになるわで大変だった。

もちろん全力で止めたけどね？

村長の家は、一見普通の民家と変わりなく田の前にいる老人が村長だと気づくのには村長の家をくまなく漁った後だった。

村長は白い髪を蓄えた杖を持つ老人で、何とも期待を裏切らない様な風貌だった。

「しゃて……、こんな村に何の御用かいの〜？」

口をもじもじさせて出る言葉は掠れてて聞き取りにくい。  
…ゲームの字幕が欲しいな。

「初めまして、村長さん。早速ですが我々は船を貸して頂きたいためにここへやつて参りました。船をお借り願えませんか？」

勇者が演技スイッチを入れて用件を簡潔に述べる。

すると村長は、はあ？と耳に手を当てて首を傾げた。

「ですから、船をお借り出来ませんか？」

勇者が仕方なくもう一度言つ。

村長はやつと理解できたと言つみづと手をポンと叩いた。

「はいはい……孫の写真を見たいとな。少し待つてくれ……」

「爺爺をどう聞きたいたら孫の話になるんだだらうか。一文字も合つてないよ。」

「違こまよ、村長わん。船です」

「ん……あ～、すまんすまん……妻の写真のう……。あつたかの……？」

「ふ・ね！です」

「少し黙つてくれ……、今写真を出すわー……」

どうあっても言葉を理解しようとしたしない村長は拳銃の黒で逆ギレ。勇者はだんだんイラついてくる様子だ！  
やばこやばこ！黒いオーラが滲み出し始めたよー……

「お爺さんーその方たちは船を貸してと言つてこるのよー。」

その時、玄関から謎の女性が入つてきて村長に呆れたように話す。

「んん……、やうなのかい？それは、悪い事をしたのう」

先ほどまでも勇者の言葉は全く理解していなかつたくせに、女性の言葉は瞬時に理解する。

凄いな、この村長。勇者をいじまで挑発するなんて……。

勇者は今にも腰にささる剣を抜いて村長に切りかかつてもおかしくないような雰囲気を醸し出していた。

「いのんなさいね、お爺さんつてば耳が悪く……」

女性はペコっと頭を下げる。

いや、耳が悪いとか言つてレベルではないと思います。

「構いませんよ。それよりも貴方は？」

「あ、失礼しました。私は村長の孫のアンと言います、よろしくソフイルカ村へ」

いかにもマニュアルに書いてありそな事を曠まざに言つてのけた  
アンは、ニッコリと営業スマイル。

勇者も作り笑顔で返す。

…どちらも笑顔なのにそれが本心からの笑顔でないと言つのは怖い。

「それよりも船でしたよね、船ならアマさん頼めばすぐに出してくれますよ。案内しますから着いてきてください」

何て無駄な話をしない人なんだろうか、こういう人は大好きだ。  
変な詮索もせず用件を受けて只、淡淡とこなす。

この人日本に来たら絶対凄腕のキャリアウーマンになれる。  
アンは扉を開けて外に出ると私達を船の所まで案内してくれた。  
広場を抜けて、浜辺へと出ると浜辺で船の整備をする男性がいた。

「トマサーん！ちょっとといいですか？」

「ん？ お、村長んとこのガキか。どしたー？」

「こちらの方々が船をお借りしたいそなんですけど」

「船を？ そいつあ無理だ、ここ最近海が荒れてて危険なんだよ」

「そなんですか？」

「ああ、海の主が怒つてんのかねえ」

トマと呼ばれた漁師風の男性は、ハチマキを取つて大きく溜め息をつく。

海が荒れてるとな？

だから船が出せない…と。ふむ、困った…。

私ならここは海が落ち着くのを待つ。

勇者はどうするつもりだ？

私は勇者を横目で見てみる。勇者は顎に手を当てて、考える素振りだった。

「どうするの、勇者？」

「…ここは落ち着くのを待ちたいが、落ち着く時期が分からないのなら今は避けるべきだらうな」

「選択肢はたつたの一つ、待つか船を無理やり出すか！」

「おいおい、そこのお嬢さんは頭がイカれてるのか？海を舐めんじやねえ、一瞬で転覆して命を刈り取られるぞ」

冗談で言つたつもりがトマに真剣な顔で注意される。私だつてそんな事は知つてゐるんだけどなあ。

しかもイカれてるとか失礼な！至つて正常だわ！！

トマに対する怒りパラメータが急上昇、子供だからって馬鹿にして！

「…怒るな、リン。冗談が分からない大人だつているんだ。特にその冗談の仕事に携わる人なんてな」

怒りを滲み出しているのがばれたのか、リドがそつと耳打ちしてくれる。

優しげな聲音に少し怒りが収まる。

「ううん、私も少し不謹慎だった。ごめんなさい」

ここは素直に謝る。

私の冗談を分かってくれた事が嬉しかったから。正直、一番私を非常識だと言うリドが私の今の言葉を冗談と分かっ

てくれるなんて予想外だった。

「よく言えた。その言葉をこの状況で言えるのはそつそつ容易い事じゃない」

頭をくしゃりと撫でられ、自然に頬が緩む。

…撫でられるのは嬉しいんだけど、これって確實に子供扱いだよねえ？

「トマさん、悪かったな。だが今のはこいつの[冗談なんだよ、そこ

の所は分かつてやってくれ」

「お、おお…、そつだつたのか。悪かったな、お嬢さん」

ちゃんとフォローを入れてくれるといつが本当に抜け目ない。  
まあ…嬉しいけどね。

「そつでしたの？リンク=ヒュード。私はその後者に賛成だったので  
すが」

1人、サタナキアだけは冗談を素で受け止めてくれたらしく。  
何というか…素直だな。

「冗談ですよ、私もそこまで海を馬鹿にしているつもりもありませんから。…私の唯一弱点とする場所でもありますし」

最後の方はボソリと口の中で呟く。

基本的に運動は得意なのに、水泳だけはびくしても無理なのだ。  
小さい頃に仕事で海へ行った際に水の中で息を止める時間を延ばす  
などと言われ、重りを付けられて海へ沈められてからとまつものの  
若干トラウマになつていてる。

『凛ならできるー頑張れ！』で10分間水の中よ？死ななかつたの奇跡でしょ。

親は目標30分とかほざいていたけど、彰が止めてくれてなんとか助かった。その後、私は何事も無かつたように食事をしていった。だけど内心では水への恐怖感と彰への感謝、親への殺意が渦巻いていた。

そして、それから水の中に入ると必ず溺れるようになつた。息を長時間止められるようになつていてから溺れても苦しむ事は無かつたけど。

学校の水泳の時間は毎回プールの底で体操座りをしていた。え、じゃあ村に着いたときに海で泳ごうとか言つてたのは？ 別に泳ぐのが嫌いな訳ではなくて、むしろ好きです。ただ、体が浮かないと言つだけで。

体にすっかり水に対する恐怖感が刻まれてるんで。

「それよつこれからどうするんだ、勇者。船は出ないそうだし引き返すか？」

リドが勇者にこれから決断を仰ぐ。

勇者はリドをちらりと見ると、睨みだす。え、何故。

「…」いつこつとは何か攻略法がある  
「は…？」

勇者が独り言のように呟き始める。

「ゲームでは必ずと言つていいほど移動法に関する問題が生じる。そんな時は攻略法が用意されているはずだ」

…」現実です。

確かにRPG風味な村だけれども！ゲームとは違うからね、これは現実で何が起こるかわからないの繰り返しが訪れる世界なんだから！流石に問題が起きた時の対処法を勇者1人に背負わせすぎたせいか勇者が壊れた。

それとも意外と勇者は抜けているのか？

「はい、勇者。現実逃避終了…ちゃんと考えて…」

手を叩いて、勇者を現実へと引き戻す。

「…あ、ああ…。悪い、余りにもゲーム的な展開が続いたもんだから…」

いかにもな村長といかにもな孫、止めにありがちなトラブル。まあ…しゃーない。私もゲームみたいだと思っていたし。

「トマさん、シケはどうの位でおさまるか」存知で？

「舐めるな、海の男がそれぐらい知らずにやつてけるわきやねえだろ。シケは大抵3日でおさまるな」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

ここまで地味にむかつかせてくるなんて……」の、人を怒らせる検定一級は確実に持つてるよ！

「い、いえ！ そんな事をして頂かなくても私の家に泊まつていつてください！ 2階のベッドも多く余つてありますし折角来て下さった皆さんを野宿だなんて酷い待遇はできません！」

何アンさん、超良い人だよ！

ここまで来るといつそ惚れるね！

「か～～ッ！ あんたな、良い人ぶんのも大概にした方がいいぜ？ 何処の誰かもわからんねえような奴らを泊めるなんてどこの物好きだよ」「トマさんッ！ 失礼ですよ！」

「はいはい……、口づるせえとこだけは母親似だな」

トマは吐き捨てるように言つと、浜辺の砂を蹴つて去つていった。アンはトマの最後の言葉に赤くなつて口をパクパクさせたが何も言い返さずに、口を噤んだ。

そして私達を先ほどの民家 村長の家に付いて来させ、2階に案内した。

「……先程は申し訳ございませんでした、トマさんは少し口が悪いだけで決して悪い人ではないんです……。どうか分かってあげてください」

「いえ、構いませんよ。ええ、全然構いませんとも」

「リン、笑顔が恐ろしいぞ」

「あはは何のことかな、リド。私は至つて平常ですとも」

あのトマって人……、むかつく上にアンにフォローを入れさせて……！ アンもあんな人底わなくたつていいのに偉いですね。

「「Jの部屋はどいつもお好きにしててください。何かあれば下にいますので聞いてください」」

アンはそれだけ告げると、階段を下りていった。

ひとまずこれで宿は確保できたけど、Jでシケがあると、いつのあくまで田安だから実際の所はいつ出発できるのかは分からぬかな。

「… わたし、Jの事だが最低3日間… どいつもする？」

勇者が数あるベッドの一つに座つて、全員に問い合わせる。最初にリドが口を開く。

「俺は少し前と話したい。元はと言えばそのために今まで動いてきたからな」

リドに続いてサタナキアが答える。

「私はフィルカ村を少し見て回りたいです」

次にミカエルが私の袖を引っ張つて小さな口を開ける。

「ほ、僕…。リンさんと…海を見たい…」

「うわ、超可愛い。

これを断る馬鹿はいない。

「私がミカエル君からの誘いを断るとでも？喜んで」

「よ…よかったです、です…！」

ぎゅうっとミカエルが私の腰に手を回して抱きつくる。

ぐふッ…。その可憐さは反則でしょう…。

私にとって初めて戦闘以外で負けを認めた瞬間だつた。

「…ミカエル君、将来お嫁さんに来て下さい」

理性を飛ばされた私は割りと真面目に口走ってしまった。

「ふえ、え……？あ、あの……僕……がお嫁さん……？」

「ツー? お前は何言い出すんだ! 色々おかしいだろーー。」

リドに頭をスパンと叩かれる。

痛い…………。…………はッ！私は今一体何を口走ったんだ！？

理性が無事帰還を果たし  
正氣にかえる

「う、ごめん！余りにも可愛くて理性破壊された！いつか私ニ力工ノサニニスルアラシノラタリニシテ、ジニシテ、リビ

「田舎に本氣で恋愛してはいけない」とか「恋愛は

「一戻一戻一戻」、沙の豊かなタレペーストの野菜

いんだけどミカエル君が余りに可愛くて…！おかしいよね、これ！

まだリドなら頷かぬナゾ！』

「罪にならぬ!?

「うん、ごめんね。迷惑かけた

「いや、別にそれはいいんだが……」

卷之三

興奮でわざわざこいつにしまつたかな?」めんたい。

私は両手を見つめて自分の両手をリドの頬にくつづける。  
リドは驚いて飛び退く。

「なッ……な……！」

「いや、顔が赤かったから冷やしてあげようと思つて……。私のせい  
だからね、冷たい？」

また両手をリドの頬に近づける。

少し体を引いて拒否の色を示したが、素直に私の冷たい両手を受け  
入れた。

頬の赤かつた所は少しだけ赤みが引いていく。  
リンは視線を泳がせて落ち着けないようだ。

うん、本当に悪い事をしてしまつたな。

しばらくそうしていると、いきなり両手をリドの頬から剥がされる。  
剥がしたのは不機嫌な様子の勇者とミカエルだつた。  
勇者が私の両手をリドから剥がし、ミカエルが私の体に抱きついて  
リドと少し距離を取らせる。

「……お前の冷たい手をリカルドに当てたら失礼だろ」

「リン……さん……、早く海へ……行きましょ、う……」

勇者め、何て言い草だ。冷たいからこその当てるのではないか！  
そしてミカエル、力入つてます。意外と締め付けるんだけど、この  
子お！

そのまま、抱きつきから手を繋がれて階段へと引っ張られる。

「……リカルド、話があるって言つてたな。丁度いい、俺も今……話が  
出来たとこだ」

「は？いや、確かに言つたが……」

勇者のリドを睨む力が異様だつたんだけど。

ミカエルに引かれるままに私は階段を下りて行く。

その際にミカエルが呟くよつて言い始める。

「リンさんは…リカルドさん…と仲が良い…ですか？」

「リドと…さあ、どうかな…？」

「え…？でもさつき…リドさんに…」

「リドとは知り合つて間もない上にお互いの事を何にも知らないなあ。友達…でもないし、何だらうね？」

「恋人…じゃない…ですよね？」

「恋人！？ないない！リドにはサタナキアさんがいるもん…」

「良かつた…です」

「けど、リドの事は大好きだよ。関係は分からぬけどこれだけははつきり自信もつて言えるね」

リドとの関係か…。考えてみると奇妙な関係だよなあ。

恋人なんてありえないし友達でもないから…何だらう。

…言つなれば、同志？仲間？いや、私が雇つてるから仕事上の関係かな？

うへん、そんな簡単な言葉で表したくなじよつな気がする…。

分かるのはリドが大好きつて事くらいかな。

ま、それだけ分かつてれば一緒にいる理由なんて十分だ！

私はまだよく分かつていなないリドとの距離を掴めずにいながら荒れる海へと赴いた。



## 第一十一話・フィルカ村（後書き）

仕事関係にしては近すぎるけど、親密にしては遠い。  
未だに掴めない2人の距離。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9051y/>

---

同じ世界の勇者と見習い魔法士

2012年1月14日16時51分発行